



# 月刊 もぐら通信

Mole Communication Monthly Magazine

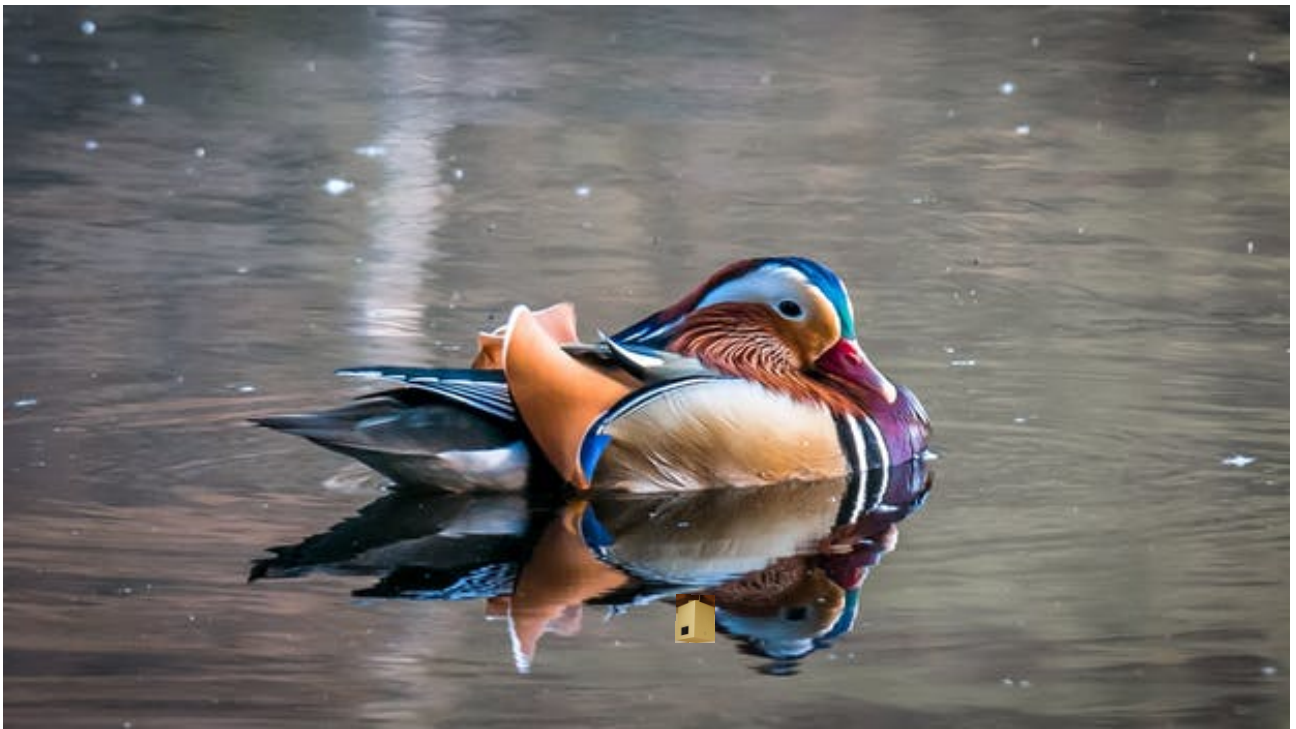
2020年7月1日 第94号 初版

[www.abekobosplace.blogspot.jp](http://www.abekobosplace.blogspot.jp)

あなたへ：  
迷う事のない迷路を  
あなただけの番地に届きます

安部 そういう実用価値のないムードとしての「真実一路」じゃ、とうていヒットラーの「真実一路」にかないつこないからね。 [1961.9.1]

『ヘミングウェイ他殺説』（全集第15巻、362ページ下段）



## 目次

- 0 目次…page 2
- 1 記録&ニュース&掲示板…page 3
- 2 荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む（12）：虫族の詩（うた）：岩田英哉…page 14
- 3 『周辺飛行』論（7）：3。『周辺飛行』について（4）：自己犠牲—周辺飛行4：岩田英哉…page 18
1. 医者と二等航海士と料理長による二者択一の超越
  2. 初期安部公房のエッセイ『様々な光を巡つて』の「窪み」
  3. 「周辺飛行4」で使はれてゐる存在論の記号
  4. 三人は自殺もせず他殺もしない
  5. 船員は何故二等航海士でなければならないのか
  6. 安部公房のニュートラルと三島由紀夫のニュートラル
  7. 安部公房の絶望と三島由紀夫の希望
  8. 「弱者への愛には、いつも殺意がこめられてゐる。」
  9. 料理長安部公房の北京餃子
- 4 Rongo Rongo：ヴォイニッチ手稿：岩田英哉…page 36
1. ヴォイニッチ手稿とは何か
  2. ヴォイニッチとは誰か
  3. ヴォイニッチ手稿を解説するための言語と家系
  4. ヴォイニッチ手稿の示す近代ヨーロッパの思想史上の分岐
  5. AI（人工知能）と終末・方舟思想
  6. 安部公房流の「透視図法」で時代を読む
- 5 [贗月報30] 三浦雅士『安部公房の座標』：「安部公房の座標」から何が解るか：岩田英哉…page 48
1. 安部公房論の分類
  2. 安部公房の座標軸
  3. 『安部公房の座標』は三つの章からなる
    - 3.1 安部公房の座標
      - 3.1.1 安部公房の具体的な作品とtopologyの関係を理解する
      - 3.1.2 時間と空間の超越論：中今と磐座
      - 3.1.3 安部公房の座標軸1：リルケとマルクス
      - 3.1.4 安部公房の座標軸2：マルクスとフロイトを結びつけたフランクフルト学派
        - (1) マルクス主義理論の未だ破綻が清算されてゐない弊害
        - (2) マルクスの価値論の崩壊
      - 3.1.5 安部公房の座標軸3：ニーチェとマルクス
      - 3.1.6 安部公房の思想とマルクスの『資本論』：本物・贗物論
    - 3.2 超越論とマルクス主義
      - 3.2.1 安部公房はどのように超越論とマルクス主義を統合したか
      - 3.2.2 安部公房の愛とは何か
    - 3.3 詩と散文と第三の沈黙・余白の関係：エピグラフの詩を最後から二番目に
    - 3.4 《……………》：日本語はクレオール語である
- 6 安部公房とチョムスキー（13）：17. 安部公房の縄文紀元論：休筆御免：岩田英哉…page 88
- 7 哲学の問題101（9）：性（sex）：休筆御免：岩田英哉…page 89
- 8 Mole Hole Letter（12）：LGBTとは何か（2）：人生相談「女装趣味隠していた夫」（読売新聞）…page 90
- 9 リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（37）：第2部 XII：“変身を欲せよ。ああ、炎に歓喜せよ、”：岩田英哉…page 94
- 10 編集後記…page 108
- 11 次号予告…page 108



## ニュース&記録&掲示板

### The best tweets 10 of the month



該当tweetなし。どうしたコーボーズ。

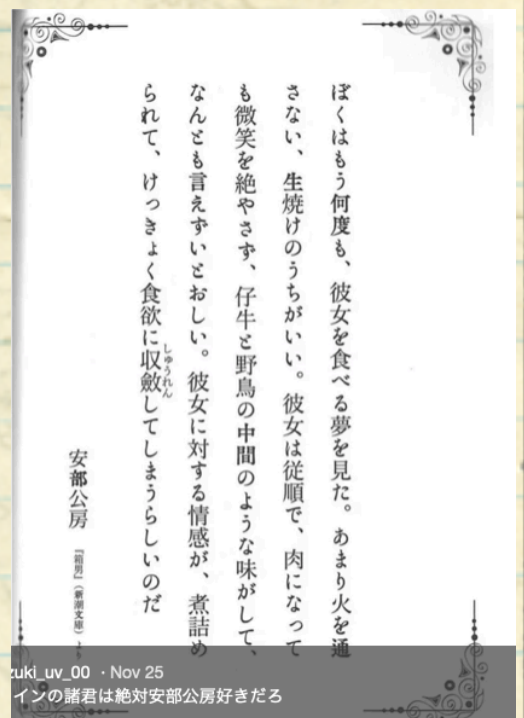


該当tweetなし。どうしたコーボーズ。

#### 今月の人肉食 (カニバリズム)

氷 葉月@hazuki\_uv\_00 Nov 25

私のタイムラインの諸君は絶対安部公房好きだろ



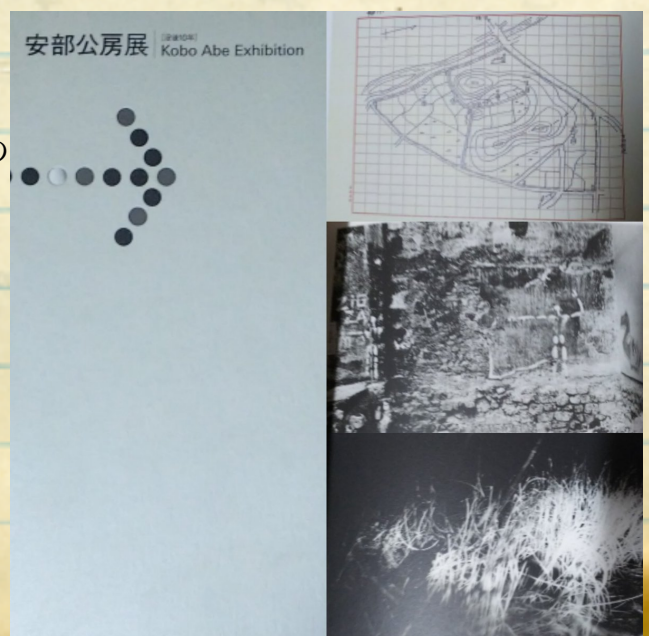
hazuki\_uv\_00 · Nov 25  
インの諸君は絶対安部公房好きだろ

#### 今月の「安部公房展 図録」(京都篇)

シーリハム ティップ@txdqmKT8BXypRuW Nov 25

「安部公房展 図録」(世田谷文学館、2003年)を東小金井「尾花屋」で。レアな図録を美本で入手できて有難い。

店内の音楽を聞いて「『くるり』お好きなんですか」と尋ねると、店主は「『くるり』は、昔よく行った近所の煙草屋の息子なんですよ」とのこと。ディープな京都ワールド。





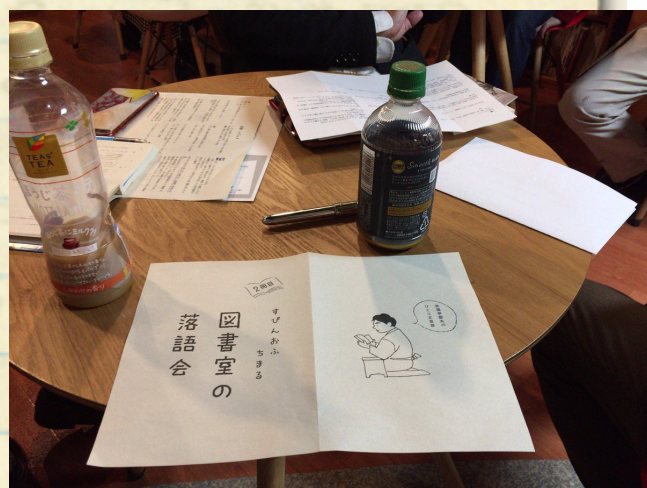
### 今月の安部公房の翻訳者

優午 Walter Mitty@waltermitty1854 Nov 22  
明日のヨーロッパ文芸フェスティバルは泣く泣く諦めたが、今夜は国際文芸フェスティバルに行ってきた。主に春樹さんの翻訳者のアーノルドさん、司馬遼太郎、水村美苗、安部公房等の翻訳者ジャネットさん、編集者のエルマーさん。日本語からアメリカ英語への翻訳の難しさを聴いてきたわ。



### 今月の読書会

麒麟児@nkirinji Nov 22  
笑福亭智丸さんの「図書室の落語会」へ。落語二席のあと安部公房「友達」を全員で語り合う読書会。十人十色の深い意見を聞けて、読んでなくても楽しめて、読んだ気になれる、読みたいと思わせる面白不思議イベント。



かとー@katochan\_pe\_\_ Nov 22  
11/22(木)19時半Spin off  
すびんおふちまる図書室の落語会  
笑福亭智丸／(遅刻で  
笑福亭智丸／小言幸兵衛  
中入り  
読書会／安部公房「友達」  
ナビ 智丸、弥っこ  
マクラも楽しい落語会の後に、不条理な公房の世界を智丸さんのレジメで味わい、話す。本読んでこなくてもOKな自由な会、落差も味わい深く



笑福亭智丸@chimaru\_s Nov 19  
年内最後の勉強会は読書会を兼ねています！22日19時30分開演です！安部公房の不安な戯曲「友達」を読みます。友達を読むのに友達の桂弥っこ君も参加してくれることになりました。よろしくお願ひします。



笑福亭智丸@chimaru\_s Nov 19

年内最後の勉強会は読書会を兼ねています！22日19時30分開演です！安部公房の不安な戯曲「友達」を読みます。友達を読むのに友達の桂弥っこ君も参加してくれることになりました。よろしくお願いします。

すぴんおふちまる  
笑福亭智丸のひと文芸部

1冊目  
10月18日(木)  
「Le Petit Prince  
(星の王子さま)」  
サンテイクジュベリ 作  
(訳はどれでも可)

2冊目  
11月22日(木)  
「友達(戯曲)」  
安部公房 作

落語会  
図書室の

19時30分開演 19時開場  
1部 落語会 (笑福亭智丸 独演)  
2部 読書会 (20時半頃からの予定)

《料金》1部2部通し 1500円  
それぞれ個別の参加 1000円  
(当日は各200円プラス)

《予約席》cut170@gmail.com

高橋の場に、お客様を参加で  
購読の場について高橋を待っています。  
必ずしも購入の必要はありません。  
但し、予約は必須です。

《会場》Spin off  
(大阪市中央区船場1-11-1 大船ビル6F)  
大船ビルは東海旅客輸出品運出2F

「タイトでとしごの会  
~笑福亭智丸・桂弥っこ二人会~」

笑福亭智丸 桂弥っこ

予約は [toshigonokai@gmail.com](mailto:toshigonokai@gmail.com)

日時：2018年12月01日(土)

西新橋 子らへり寄席  
☆昼の部 13:30開場・14:00開演  
☆夜の部 18:00開場・18:30開演

場所：深層くらぶ(ミュージックテイト西新橋店) 木戸銭・昼夜共予約1,800円・当日2,000円(昼夜通し3,000円)

お問い合わせ・ご予約は、株式会社ミュージックテイト西新橋まで 新宿区西新宿7-16-13末廣ビル103  
03-5332-6396 ticket@musiciteito.co.jp

今月の三島由紀夫と安部公房

非おむろ@Non\_omuro Nov 24

#憂国忌

#三島由紀夫

#川端康成

#安部公房

#石川淳

#文化大革命



今月の壁

スミマサノリ@sumimachine Nov 24

ステーキ屋さんで壁側の席に座ったら、「壁の人にスープ出して！」とか「壁の人からお会計いただいて！」という声が飛び交い、俺は安部公房か、と思った。



### 今月の朗読会

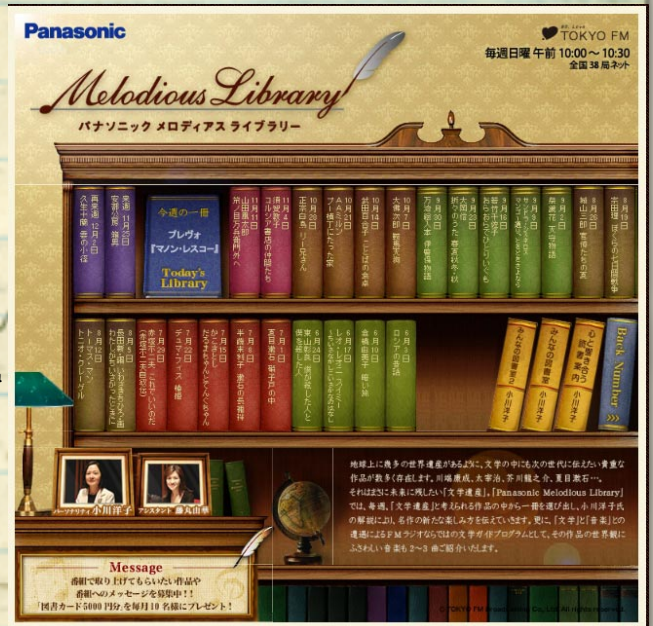
Swing birds@swing\_birds Nov 23  
パナソニック メロディアス ライブラリー

毎週日曜午前10:00~10:30

TOKYO FM系 JFN38局

毎週「文学遺産」と考えられる作品の中から一冊を選び出し、小川洋子さんの解説により名作の楽しみ方を伝えていきます。

11月25日 箱男 安部公房



### 今月の方舟さくら丸

もるがな@morugana Nov 23  
#ポリ裏ブックバザール に行ってきました。古本って買った人の人となりが出るから眺めてるだけでも飽きなかった。時間なくて最初は軽くひやかすだけのつもりだったけど、気がついたら色々買い込む羽目に。安部公房の『方舟さくら丸』かも。



### 今月の箱男の原稿

にやおバス@nyao12 Nov 22  
米田知子作品は「安部公房の眼鏡『箱男』の原稿を見る」とかこの眼鏡シリーズ(?)なんか読書垢の方たちいかがです？



### 今月の安部公房タワー

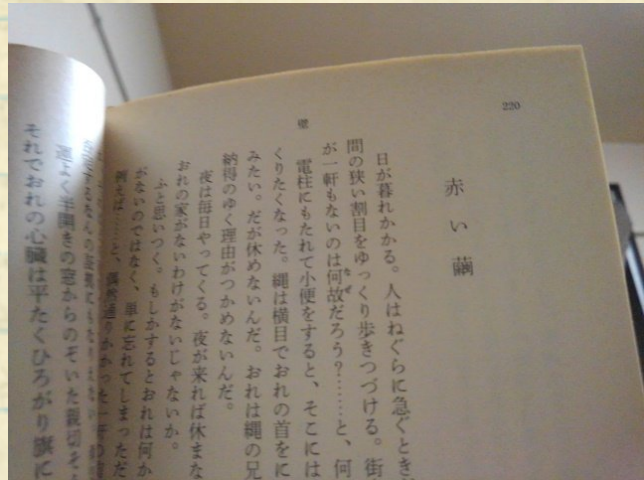
オレミズタニレオ@tsutsu\_urara Nov 20  
ダイソーの本棚のやつ買ったから安部公房タワーができそう





今月の赤い繭

中山ゆう子@yuunti Nov 26  
多分高3国語の教科書で  
衝撃を受けた  
多分教科書  
安部公房



今月の安部公房ゼミナール公演

比留間彩理 (ひるまさり) @senbeimajin Nov 23

昭和45年に出た清水邦夫の本を買ったら、昭和47年の安部公房ゼミの舞台3本上演のチラシ (清水邦夫がいる。紀伊國屋で500円!) と、昭和45年の国立劇場のチケット (1階A席) と、読めないメモが挟まっていた。

凄くきゅんとした。

チケットの裏には、何故かセドリックの宣伝 (さあお乗り下さい!)





### 今月の箱男

arox@ヌカぼうず@Thermidor999 Nov 23  
箱男だ。安部公房だ。



### 今月の砂の女と箱男

水嶋いみず@Imi\_Mizu Nov 22  
チラリと見えて、砂の女と箱男の  
背表紙が同時に浮かんだ。



### 今月の裁かれる記録

早坂 伸 Shin Hayasaka@shin\_hayasaka Nov 21  
今日撮影現場だった古本屋さんで安部公房の映画論集を買った。アンジェイ・ワイ  
ダ『地下水道』への考察が興味深い。



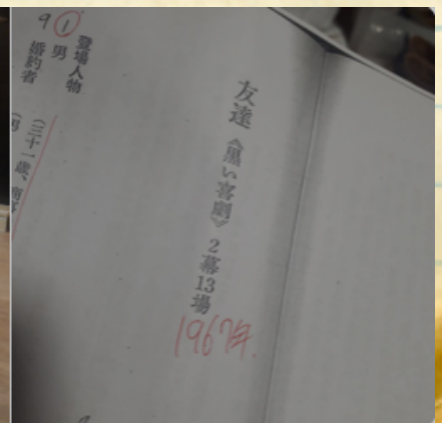
### 今月の読書会

雨宮 大夢@mizuame22 Nov 18

「戯曲を読む会」第5回目が終了しました！

今回は安部公房の「友達」

四年前にスープ劇場で安部公房の「未必の故意」をやったときの話や、共同主催者の和田響きがアンサンブルに入団する前にこの作品に出演したりと、盛り上がりました。次回は12月9日18時30分～是非ご参加ください





### 今月の1日240時間

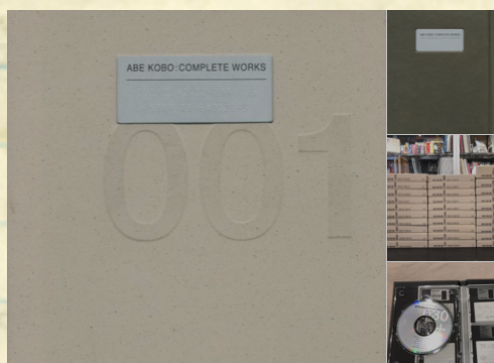
ホッタタカシ@t\_hotta Nov 24

1970年万博の自動車館で上映された、安部公房脚本・勅使河原宏監督のミュージカル映画『1日240時間』を8K修復して4面スクリーンによる完全再現上映。音楽は佐藤勝で特撮は高野宏一だ。#大阪万博のパビリオンを提案しよう <http://infoseek RIP.G.RIBBON.TO/EXPO70-WEB.HP.INFOSEEK.CO.JP/JIDDOUSHAKAN4.HTML> ...

### 今月の安部公房全集全30巻

神田神保町 小宮山書店@komiyama\_tokyo Nov 22

【オススメブログ更新】安部公房全集 全30冊揃 月報揃 2年半ぶりの入荷です！！  
<http://www.book-komiyama.co.jp/bookblog/?p=55586> ...



### 今月の全集未収録記事

ホッタタカシ@t\_hotta Nov 19

ホッタタカシ Retweeted pieinthesky

この記事、「安部公房全集」にも未収録ですね。



pieinthesky @pieinthesky4

安部公房、なかなかインパクトあるな♪

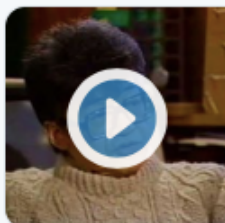
### 今月のETV特集

齋藤伸之\_猪熊蛸@inokumatako3613 Nov 17

ETV特集 テレビが記録した知性たち3

安部公房 複眼の冒険者

1999.3.17 <https://youtu.be/cgEeQB3QzXo> @YouTubeさんから



ETV特集 テレビが記録した知性たち3安部公房 複眼の...  
ETV特集 テレビが記録した知性たち(3)安部公房 複眼の冒険者 1999.3.17 1985.1に放送された「訪問インタビュー」全四回のダイジェスト 第一回「核時代の絶望 ...  
[youtube.com](https://www.youtube.com)



## 今月の安部公房の詩を読んだ読者

椰@wh\_mate10 Nov 18

安部公房の詩は初めて読んだんですけど、やはり文字の選択センスの違いに圧倒されます。たまには耽美的じゃないのもいいですね

## 今月のヤマザキマリ

「プリニウス」文芸誌・新潮で連載再開、創刊114年で初のマンガ連載  
Yahoo!Japanニュース [11/22(木) 17:19配信]

ヤマザキマリととり・みきによる「プリニウス」が、12月7日発売の新潮2019年1月号(新潮社)にて連載再開することが発表された。

百科全書「博物誌」の著者としても知られる、古代ローマの博物学者・プリニウスの活躍と、その時代を描いた本作。これまで新潮45(新潮社)にて連載されていたが、同誌の休刊を受け、新潮での再スタートに至った。なお新潮でマンガが連載されるのは、創刊114年にしてこれが初。また本作は新潮で掲載された後、Webマンガサイト・くらげバンチでも掲載される予定だ。

連載再開にあたり、ヤマザキは「『新潮45』の休刊は唐突な顛末ではありましたが、これはこれで有り難いご縁だったと受け止め、プリニウスの連載当初に抱いていた思いどおり、文芸という領域でも捉えていただけるような漫画作品を描いていくことができれば本望です」とコメント。とり・みきは「『新潮』初のマンガ連載だそうで、何であっても通念を塗り替えて響感を買うのは横紙破り冥利に尽きます(そんな冥利があるのか)」と述べる。また新潮の矢野優編集長は「文芸誌は文明誌でもありたい——『プリニウス』連載で114年越しの願いが実現して幸福です」と言葉を寄せた。

### ■ ヤマザキマリコメント

漫画家になるずっと以前、イタリアで画学生をしながら母親に時々送ってもらっていた文芸誌のひとつがこの「新潮」でした。絵と文章が、まだ自分の中では表現として繋がっていなかった頃のことです。若かった私はイタリアの文学者達に日本文学についての無知を指摘され、安部公房や三島由紀夫を始めとする様々な作家の書籍を日本から送ってもらっては、貪るように読みました。その時に受けた強烈な知的触発が、文章から画像を生み出していくという現在の私の漫画技法の礎となっています。「新潮45」の休刊は唐突な顛末ではありましたが、これはこれで有り難いご縁だったと受け止め、プリニウスの連載当初に抱いていた思いどおり、文芸という領域でも捉えていただけるような漫画作品を描いていくことができれば本望です。



## 今月の石川淳

新国立劇場が西村朗作曲、佐々木幹郎台本による新作オペラ【紫苑物語】世界初演を、2019年2月17日、20日に上演する。

事前に開催されたトークイベント【『紫苑物語』～一の矢「知の矢」石川淳の原作からオペラへ】は、満員の聴衆のもと、台本の佐々木幹郎、作曲の西村朗、指揮の大野和士、演出を手掛ける笈田ヨシ、そして監修を務める長木誠司の5名が一堂に会し、これまでの創作過程、本作の魅力などを、2時間にわたって語った。



『紫苑物語』は、石川淳が1956年に書いた短編。舞台は平安時代で歌の名家に生まれた国司の宗頼と、権勢を振るう家の娘、うつろ姫の婚礼の儀が執り行われる。歌の道を捨て弓術に邁進する宗頼を父は責め、宗頼は彼の妻に身持ちの悪いうつろ姫をあてがわれたことに怒る。宗頼は、第一の矢(知の矢)、第二の矢(殺の矢)の弓術を習得し、人を殺すたびに、紫苑(忘れな草)を植えさせる。狩りに出た宗頼は怪しい魅力を持つ千草と出逢うが、千草は宗頼が射た狐の化身だった。狐の妖術に触れた宗頼は第三の魔の矢を悟る。

(略)

石川淳の描く、幽玄で摩訶不思議な、魑魅魍魎のうごめく世界観が、新しい時代の“オペラ”として眼前に現れる、2019年の世界初演を楽しみに待とう。

### ◎公演情報

オペラ【紫苑物語】

新国立劇場 2019年2月17(日)~24(日)全4公演

<https://www.nntt.jac.go.jp/opera/asters/>



## 今月の齋藤飛鳥

人気アイドルグループ・乃木坂46の齋藤飛鳥(20)が、12月9日放送のMBS・TBS系ドキュメンタリー番組『情熱大陸』(毎週日曜 後11:00)で40日間の密着を受けたことが、わかった。中心メンバーの白石麻衣(26)をして「今後の乃木坂46を引っ張って行くのは飛鳥」と言わしめる“エース”でありながら、初日取材から「なんで白石麻衣や西野七瀬への密着ではなく、私なんですか?」と疑問を呈するなど、控えめな性格の持ち主である齋藤の素顔に迫る。

(略)

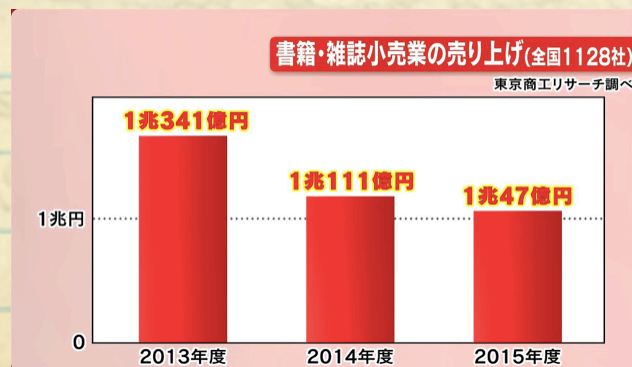
番組では読書好きで、好きな小説家は貫井徳郎と安部公房という文学好きな一面を持つ彼女が休憩中に部屋の隅で一人読書をする物静かな一面や、撮影現場に入ると一転、見事な表現力でスタッフを唸らせていく様や初の上海単独公演にも密着。メンバー一人の母を持ち「自分がハーフであることが、アジアの方々に興味を持って戴くきっかけになれば」とアジア展開に意気込みを見せる齋藤が、初の海外公演で魅せた姿とは。そしてその舞台裏にも注目だ。



12月9日放送のドキュメンタリー番組『情熱大陸』に齋藤飛鳥(乃木坂46)に密着

## 今月の東京商工リサーチ

今月編集部がネットで拾ったデータですが、紙の出版業界の売り上げが1兆円を切つたら、これは相当にいけない状態になると思はれる。このデータは2015年のものが最新ですから、ひよつとしたら今年2018年は1兆円を切つてみるのかも知れません。



何故かネット上の検索では2016年までが最近のデータで、2017年のデータは出てみない。ひよつとして、その惨憺たる数字に世間への発表を憚(はばか)つたか。編集子のころは、新潮社よ、新潮4の5の事件を起こす暇があつたら、早く安部公房全集全30巻を電子書籍にしてをくれ。といふ事です。



## 早稲田大学エクステンションセンターにて鳥羽耕史氏による安部公房連続講座開催

鳥羽耕史早稲田大学教授による安部公房連続講座開催。

### 開催の要領

開催の要領は下記の通りです。「ただ今受付準備中」とありますが、時機をみて、申し込みは次のURLへ：<https://www.wuext.waseda.jp/course/detail/44819/>

曜日：水曜日

時間：19:00～20:30

日程：全4回・01月09日～01月30日

日程詳細：01/09, 01/16, 01/23, 01/30

### 講義概要

安部公房(1924～93年)は、1951年に『壁』で芥川賞を受け、1962年の『砂の女』で国際的な名声を得ました。いわゆる「純文学」にとどまらず、メディアを超えて活躍した作家でした。この講義では、彼の世界の広がりや、四つの側面から紹介します。小説を中心とする文学、ラジオドラマとテレビドラマ、映画、そして演劇です。20世紀のメディア革命の時代を生きた一人の作家の活動から、文学・芸術の世界の広がりを実感して頂きたいと思います。

### 各回の講義予定内容

1 01/09

共同制作と『壁』

安部公房は1940年代から50年代にかけて、〈夜の会〉、〈世紀の会〉、〈現在の会〉といった芸術運動に関わり、画家、作家、評論家らと共同制作をしながら、文学世界を形成していきました。芥川賞受賞作『壁』を中心に、芸術運動と共同制作の成果としての文学作品を検討します。

2 01/16

ラジオドラマとテレビドラマ

1950年代から60年代にかけて、安部は多くのラジオドラマやテレビドラマのシナリオを手がけました。音声や映像が残る作品を部分的に鑑賞しながら、放送メディアを通じた芸術の可能性を考えます。

3 01/23

書き下ろし長編小説と映画

1960年代から80年代にかけて、数年に一度、安部は書き下ろしで長編小説を発表するようになります。その中でも、勅使河原宏によって最後に映画化された『燃えつきた地図』に注目し、小説と映画の関係や、描かれた団地や郊外の空間について検討します。

4 01/30

演劇と安部公房スタジオ

1970年代、安部は自らの名前を冠した演劇グループを率いて、身体的な表現の可能性を追求しました。1950年代以来の俳優座の千田是也との協力関係で実現した舞台も検討した上で、安部と演劇の問題を考えます。



荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む

(12)

虫族の詩（うた）

岩田英哉

瑠璃色の夜のうちに  
蜘蛛族は巣を張り  
耳をすます天の声  
夢見るは蝶となる来世  
太古から彼らは  
グノーシス主義者であった

蝶族の望む夢は  
靈魂の運び屋となること  
エジプト人が考えたように

世界を滅ぼした人間の言葉を  
蟻族が埋葬する

\*\*\*

最初の一行に瑠璃色の夜が出てくる。前回の『淤能碁呂島幻歌』の淤能碁呂島の景色の構成要素三つのうちの一つです。

1. 天地（あめつち）の肇の島
2. 治療的な瑠璃色の夜空
3. 原古の月

淤能碁呂島の「瑠璃色の夜空は治療的である」のでした。さうであれば、

蜘蛛族は巣を張り  
耳をすます天の声

と歌ふ蜘蛛族の巣は治療的である。巣が治療的とは、次の二つの意味があるでせう。

- (1) 営巣といふ蜘蛛族の行為が病気を治療するといふこと
- (2) この巣そのものが病気を治療するといふこと

この二つです。



あなたが此のいずれの巣にあらうとも、即ちあなたが蜘蛛族の一人であつて（1）の営巣をしようとも、また何か病ひを得て（2）の場合の巣の中に治療のために籠らうとも、あるひはあなたが蜘蛛族ならぬ者として治療のために巣に入つて蜘蛛族のお世話にならうとも、あなたの病ひは治る。

しかし、「耳をすます天の声」の耳すますものが蜘蛛族であるならば、蜘蛛族は夢を見て、来世は蝶となる夢を見る。病ひが癒えれば、蜘蛛は蝶になるといふこと、それも次の来世と呼ばれる次元の中で蝶に変身する、あるひは転生輪廻するといふことです。

太古から彼らは  
グノーシス主義者であつた

と歌はれてみますので、この来世たる次元には太古からの記憶と時間と、といふことは/したがつて未来と呼ばれる「既に起きた未来」といふ過去もまた存在してゐて（以上超越論）、グノーシス主義者であるといふことは、そのやうに生きる人々のことをいふのです。

もし「瑠璃色の夜のうちに」営巣の蜘蛛が仕事の合間に水を飲むことがあるならば、それはきつと淤能碁呂島にある、

太古の地層から湧き出ずる  
原水の泉の畔で

湧き出る水に違ひない。

さて、かうして蜘蛛は蝶になつて無時間の空間の存在となつた。

蜘蛛が蝶になつたらなつたで、今度は蝶族として夢見る夢があるのだといふ。それが、

靈魂の運び屋となること  
エジプト人が考えたやうに

ここまでの、蜘蛛族、蝶族と登場して、最後に蟻族が歌はれます。

しかし、前二者は上のやうなつながりがあるのに、蝶族と蟻族の間には改行の一行の空白があるだけで、文字による接続関係は語られてゐません。

さうして

これは人間滅亡後の連である。人間が滅亡した後に、



世界を滅ぼした人間の言葉を  
蟻族が埋葬する

とは、一体どういふことでありませうか。

このやうに読んで参りますと、やはり蝶族は靈魂の運び屋であるのですから、蝶族は蟻族に、いつの間にか一行の空白の中で転生輪廻をして、なつてゐるのではないでせうか。

しかし、蝶族は人間に、蝶族の引き継いだ蜘蛛族の靈魂を運んだのではない。やはり蟻族に、どうも、運んで引き渡した様子です。

人間の言葉にある言霊といふ靈魂を、どうも人間は世界を滅ぼすために使用したやうである。その言葉を蜘蛛族であつた、蝶族であつた蟻族が、この転生輪廻の最後に、そのやうな埋葬をするといふ。

かうしてみますと、最後には、虫族の詩（うた）といふ詩は、埋葬の詩、葬送の詩、そして、虫族が人間に送る惜別の詩といふ事になります。

23歳の安部公房の『無名詩集』に蜘蛛の巣を歌つた「倦怠」といふ詩があります（全集第1巻、250ページ）。

倦怠

蜘蛛よ

心の様にお前の全身が輝く時

夢は無形の中に網を張る

おゝ死の綾織よ

涯しない巣ごもりの中でお前は幻覚する

渴して湖辺（うみべ）に走る一軍のけだものを

また『無名詩集』の前の22歳の詩集『没我の地平』の中に、瑠璃色を歌つてゐます。これは、瑠璃色の夜空ではなく、『淤能碁呂島幻歌』の尾長鳥であるかも知れぬ瑠璃鳥です。詩の題は「夢と夢」（全集第1巻、164ページ）。既に此の題からして、夢の中の転生輪廻を思はせる。蜘蛛から蝶へ、蝶から蟻へ、夢から夢へ。

夢と夢

夢は早くも瑠璃鳥の  
羽もて夢を押し包み



秋の陽射しを消す雲に  
夢の窪みを彫りとりぬ

夢もて夢を語りつゝ  
外の面に歌ふ顔（かんばせ）ぞ  
夢に立つ夜のことはり  
幼き胸の想ふ夢

蜘蛛、蝶、蟻と転生輪廻した話者は、「秘密の上昇通路」といふトンネルを通つて、垂直方向へと上下分かたず、安部公房ならば問題上昇し、問題下降する、といふことでせう。



## 『周辺飛行』論

## (7)

## 3。『周辺飛行』について(4)

## 『自己犠牲—周辺飛行4』

岩田英哉

## 目次

- 1。医者と二等航海士と料理長による二者択一の超越
- 2。初期安部公房のエッセイ『様々な光を巡つて』の「窪み」
- 3。「周辺飛行4」で使はれてゐる存在論の記号
- 4。三人は自殺もせず他殺もしない
- 5。船員は何故二等航海士でなければならないのか
- 6。安部公房のニュートラルと三島由紀夫のニュートラル
- 7。安部公房の絶望と三島由紀夫の希望
- 8。「弱者への愛には、いつも殺意がこめられてゐる。」
- 9。料理長安部公房の北京餃子

\*\*\*

## 1。医者と二等航海士と料理長による二者択一の超越

安部公房全集のどこかに、ボート（小舟）に二人の男がゐて、自分が死ねば相手が助かり、相手を殺せば自分が助かるといふ条件設定をして、インタヴューに君ならどうする？と尋ねる話があります。今どこにあつたのか正確な引用できないのが惜しい。

人殺しをせずに、この殺人といふ問題を解決できる解があるのだと安部公房は言ひ、それは二人が同時に海に飛び込んで死んでしまふことなのだと言ふのが其の解なのですが、これは二項対立を否定して第三の客観、即ち存在を求めると云ふ安部公房の論理に適つてゐると云えば適つてゐる。アガサ・クリスティ風に云えば「そして誰もいなくなつた」と云ふわけです。

そして、この「周辺飛行4」は人数を二人から三人に増やして、さて船の中の食料が尽きたらどうするか？と云ふ問いに答へようと云ふのです。その解が、自己犠牲と云ふわけです。

三人ゐれば二項対立にはなりませんから、いつもの安部公房の論理は使へない。それでは、さてどうやつて食料問題を解決するのか？と云ふ問いに対する答へが、自己犠牲といふわけです。「そして誰もいなくな」らず、一人だけ生還して、報告者として此の「周辺飛行」の顛末を読者に報告してゐると云ふわけです。

掻い摘んで言えば、自分で自分の胸にナイフを突き立てて死ぬのは、他者のための食肉用の肉と



して自分の体を供するといふやうに目的が明らかであれば、それは自殺にはならず、しかしまた他殺にもならないといふ話です。と云ふことであれば、やはり、この三人と云ふ数字は、自殺でもなく他殺でもない第三の客観、即ち（自己喪失といふ自己犠牲による）存在を求めると云ふ話になつて、これはまた、やはり、安部公房らしい二項対立否定の問題設定なのであることがわかります。

さうすると、問題解決のための仮説は、常に超越論ですが、しかし、これは小説ではなくエッセイですから、このやうな厳密な様式化はなされてみないのは、これまでの「周辺飛行」の体裁を見て来て知つた通りです。

激しい嵐で船が沈没して、医者（報告者）、料理長、二等航海士の三人が救命ボートに移つた。「食料品をのぞけば、ほとんどあらゆるものが完備していた」と書かれてゐるほどに豊富な資材があるのであれば、私ならば釣り糸をつくり、冷蔵庫の中の食料を餌にして魚を釣つて生き延びるところですが、しかしこれが安部公房の安部公房たる所以であつて、発想が全く普通の人間とは逆であるのです。必要である筈の資材をどんどん三人で海の中へ放り投げて捨てて行く。生存の可能性の無さを極限にまで高めて、さあ、どうするか。と云ふことを考へるのです。This is Abe Koboです。

## 2。初期安部公房のエッセイ『様々な光を巡つて』の「窪み」

同じ論理を初期安部公房に読むことができます。これは、安部公房のphaseで云えば、Phase0の問題下降論確立期〔註1〕の安部公房のエッセイで『様々な光を巡つて』といふエッセイがあります（全集第1巻、202ページ）。

### 〔註1〕

初期安部公房については『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第56号から第59号）をお読み下さい。この「転身」の過程をtopologicallyに詳述しました。

この作品は全編この「周辺飛行4」の論理で書かれてゐるエッセイですので、その一行一行のどれもが「周辺飛行4」に深く関係してゐるのですが、そのうち最も「周辺飛行4」の解説になつてゐる23歳の安部公房の二行を引用して解説とすることにします。

「或る作家が偉大であると言われる為には、やはりその作品があゝの窪みの中への落とし物でなければならぬ。〈物〉の在り方、存在の嘆きに、何処かしら一致した振動数を持っていなくてはならぬ。」（同巻、204ページ上段）（傍線引用者）

歴史といふ時間の中を馬が走るにせよ（蹄の跡の窪み）、人間が生きるにせよ、走り生きながら所有してゐる諸物を皆「窪み」の中へと捨てるか、捨てなければ馬も人も「その窪みに中に入らば」それら馬の背負つてゐるもの、人間の背負つてゐるものうち「一番重い物が先に



落ちたに違いない。そして全部が、その窪みの中にころげ込んだ。」といふわけです。

かうしてみると、安部公房の論理を理解するためには、やはり上の引用だけでは足りない。もう少し引用を増やします。この初期安部公房の論理と形象は一生涯を貫いてゐるのです。19世紀と安部公房の生まれた20世紀の特徴を述べながら、20世紀の人間たちの特徴として、否、典型的な人間の特徴として、忘却と自己承認〔註2〕といふことを言ひ、次の文を安部公房は書く。：

「疾駆したのはプーシキンのトロイカばかりではなかつた。宇宙の到る所にほりつけられた我々の歴史の総てが、その蹄にえぐられた跡だった。太陽の下では嵐の様に、月の下では影の様に、そのトロイカは疾駆した。

その狂奔は神々のつまずいた或る一点に起つた分解だった。宇宙は丸い。その一点で人間の歴史もまだ幾度かつまずかねばならぬだろう。アリストテレスとソクラテス、キリストとブッダ、それ等の対立が深く交わるあの一点だ。ローマン主義の始まる所で自然主義も始まり、破れる所で終つた。象徴主義も表現主義も同じ事だ。宗教と科学についても同じ事が言える。宗教の終わった所から始つたのが科学ではない。宗教も科学も、同じ所で始まり同じ所で終るのだ。

それは《物》と言うささやかな窪みだった。」

(同巻、202ページ下段～203ページ上段) (傍線引用者)

「一回のつまずきの度に、トロイカは何かしら落しものをして行つた。それはとにかく、一番重いものが先に落ちたに違いない。そして全部が、その窪みの中にころげ込んだ。

トロイカは次第に軽くなる。そして速くなる。そして更に落とす。恐らくやがて霧の様になり、更に終いには空気の様になって了うだろう。

小さな吾々一個人の歴史についてだって同じ事だ。一切がその窪みに向つて流れ注ぐ。そして誰しも、或る事にふと気付く時がある。つまり、ほとんど気にも止めずに落として来たその窪みの中のものが、何時の間にか自分自身よりももっと重大な自己になっていて、自分は一個の名札に過ぎず、うらぶれた木枯しにすぎない事に気付くのだ。それは涙さえ涸らして了う生理的な病いだ。

彼は蒼白の中で皮肉に笑う。何て身軽な風なんだ。それに、何んて気のきいた病気なんだ。」

(同巻、203ページ上段) (傍線引用者)

#### [註2]

この忘却と自己証認、即ち自己喪失と自己の存在証明の問題は22歳の論文『詩と詩人(意識と無意識)』に詳しい(全集第1巻、104ページ)。初期安部公房の概念化した位相幾何学に基づく用語(部屋、窓、反照、自己証認)といふ概念の一式は、語彙を変へて概念は変はらず、安部公房の生涯を貫いてゐます。

上の引用では凹の形象とつまずきといふ言葉に焦点を当てて線を引きましたが、しかし、これ以外にもあなたは勿論、この短い引用の中には箱男もあれば、S・カルマ氏もゐる、水中都市もあれば、洪水も起きてゐる、第四間水期の最後の、水棲人間の少年に吹く木枯らしも吹いてゐる事

に気付かれるでせう。

《物》といふ此の存在の窪み（凹）に重いものから落ちて行く事、さうして終ひには人間もプーシキンのトロイカも「空気の様に」なる事。空気の様になれば、『飛ぶ男』の空飛ぶ鷹の弟や『さまざまな父』の鷹の父親のやうに、体は宙に浮くでせう。体が宙に浮くとは、従ひ此のやうに存在になるといふ事なのです。さうであれば、鷹の弟は《弟》、鷹の父親は《父親》と記号化する事ができます。

この23歳の文章でも既に存在の記号《 》を安部公房は使用してゐる。しかし、そのあとの物を囲む記号は〈 〉を使用してゐます。この違ひを文章を追つて見ると、前者は窪みへの最初の落下であり、後者はその後の2回目以降の落下であるといふ使ひ分けをしてゐる事が判ります。あるひは後者は、その窪みから人間が「立ち上がった」場合の物を〈物〉と表記してゐる。従ひ〈物〉とは、歴史といふ時間の中に現れた《物》のことなのです。それ故に上記最初の引用にある通りに、

「 或る作家が偉大であると言われる為には、やはりその作品があゝの窪みの中への落し物でなければならぬ。〈物〉の在り方、存在の嘆きに、何処かしら一致した振動数を持っていないてはならぬ。」（同巻、204ページ上段）（傍線引用者）

何故ならば、垂直方向といふ時間の存在しない《物》が、水平方向といふ方向に存在する時間の中に落ちて〈物〉として現れると、それは振動といふ、従ひ或る周波数を持つた波の繰り返して現れるからです。それ故に人間は「何処かしら一致した振動数を持っていないてはならぬ」のです。これが〈物〉です。

安部公房は厳密です。1、2、3……と数を数へることの意味を十二分に知つてゐて記号化をしてゐるのです。まあ、成城高等学校開闢以来の数学の天才と言はれたといふ安部公房であつてみれば、当たり前と云へば当たり前ですけれども。

### 3。「周辺飛行4」で使はれてゐる存在論の記号

《 》は安部公房の新象徴主義哲学の存在論の用語、〈 〉はリルケと安部公房の詩の世界の用語といふ事が、ここでもよく判ります。

このエッセイの中での存在論の記号が使はれてゐる言葉は次の通り：

(1) 《 》：

《物》：同書、203ページ上段

(2) 〈 〉

〈物〉：同書、203ページ下段、204ページ上段下段、

〈問題〉：同書、205ページ上下段、206ページ上段下段



- 〈解決〉：同書、205 ページ上下段、206 ページ上段下段  
 〈問題以前〉：同書、205 ページ上下段  
 〈解決以前〉：同書、205 ページ上下段  
 〈如何に〉：同書、205 ページ上段

《物》が時間の外部にある存在であるのに対して、〈物〉以下の言葉の意味する所はみな時間の内部で生きる人間との関係で起きることであり、解決を必要とし、解決が必要となることです。この《 》と〈 〉の記号の区別は、既に初期安部公房論でお伝えした通りの使ひ分けです。〔註3〕

[註3]

『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第58号）の「IV 「転身」といふ語のある小説を読む(「2詩と散文統合の為の問題下降」期の小説)」より引用します：

「【散文に関する結論】

『終りし道の標べに』では、

- (1)安部公房独自の話法、即ち内省的な記憶の中での「僕の中の「僕」」に呼びかける話法にあつては、会話は《 》でやりとりされてゐる。それから、
- (2)此の意識に連なる場合の哲学用語についても、《 》で書かれてゐる。これに対して、
- (3)呼びかけない話法、即ち形式上普通の話法にあつては地の文の中で「 」で語られてゐる。
- (4)『終りし道の標べに』は、このやうな二層の構成をとつてゐる。そして、

『名もなき夜のために』では、

- (1)《 》の使ひわけはそのまま〈 〉といふ記号として『名もなき夜のために』に受け継がれてゐる。しかし、この使ひわけはもつとよく整理されてゐて、
- (2)安部公房独自の話法の内にある詩の世界の言葉だけが〈 〉といふ記号で識別されてゐる。一言でいへば、リルケの世界に関する用語だけが〈 〉の中にある。勿論哲学用語と重なる同じ言葉はあるが、それは哲学用語ではなく、リルケと自分の詩の世界の言葉である。哲学用語が〈 〉の中にあることはない。即ち哲学用語は地の文の中に問題下降されてゐて、普通の言葉になつてゐる。
- (3)『終りし道の標べに』を問題下降して『魔法のチョーク』を書くために、『無名詩集』をも併せて問題下降した数学的・中間項である詩的・散文的作品『名もなき夜のために』は、『終りし道の標べに』を踏襲して、このやうな二層の構成をとつてゐる。(4)『名もなき夜のために』では、後述する安部公房の問題下降の努力によつて、安部公房らしいことに、《 》や〈 〉の記号の階層にある文と地の文に書かれた文字そのもの、文章(text)そのもののtopologicalな交換、即ち『デンドロカカリヤA』(雑誌「表現」版)の主人公コモン君の経験した座標の喪失、即ち内部と外部の交換を、安部公房は『名もなき夜のために』で、自分自身の事として、そして文章(texts)の問題として実行した。これは、全くバロック的な試みであるといふ事ができる。

このやうに意図して、また同時にtopological(位相幾何学的)な方法で、安部公房は詩人から小説家になつたのである。この論理的な、問題下降による変身または「転身」は、誠に安部公房らしい。」

(『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第58号）の「IV 「転身」といふ語のある小説を読む(「2詩と散文統合の為の問題下降」期の小説)」より)

従ひ、以上のことから、安部公房は、哲学の存在論の問題を文学の詩の問題として時間の中で解決しようとした。それが超越論による仮説を設定した仮説設定の文学である。といふことになります。

#### 4. 三人は自殺もせず他殺もしない

さて、「周辺飛行4」に話を戻します。

窪みに落とし/落ちる物については、重量といふ量で測れば、それは「一番重い物」となりませうが、質を問へば、生きるために最も重要なものが最初に「その窪みの中にくろげ込んだ。」といふ話になるでせう。そして、その話が、この「周辺飛行4」といふ話であるといふわけです。

この窪みとは存在の穴の凹であり、この形象なのであり、砂の女の棲む砂の穴だといへば、安部公房の読者には、もはやこれ以上説明する必要のないほどに周知でありませう。しかし、野暮を承知で解説を続けます。

さて、「周辺飛行4」は、海といふ存在の「窪み」（凹）に自分の命を落とすことを巡る三人の物語といふわけです。

海は、安部公房が Rilke に学んだ存在の形象の一つでした。いふまでもなく、『洪水』『第四間氷期』の名前を挙げることができます。それから、『方舟さくら丸』の便器といふ存在の穴（凹）、この存在のトンネル（通路）を通じて外界たる海に繋がつてゐる其の海です。この存在のトンネル（通路）を『他人の顔』の仮面と呼ぶなら呼ぶことができます。同じ概念です。便器も凹の顔も通路（例へば廊下）も、さう『箱男』といふ凹の形象の箱も、みな等価交換可能な汎神論的存在論、即ち超越論、即ち topology の世界の通路です。

汎神論的存在論の同じ形象が、『洪水』と同じく短編集として芥川賞受賞の対象となつた『S・カルマ氏の犯罪』の中に所収の『事業』です。これは人肉加工の話です。これを「僕の中の「僕」」たる話者は大量生産、大量販売して世に大量頒布させる。この形象もまた、この「周辺飛行4」には生きてゐる。もつとも、『事業』では、世の中の多数の人たちが存在のソーセージを食するわけですが、「周辺飛行4」は逆に自己犠牲の話で、一人の腹の中に他の三人の人肉が納まるといふところが対比的に異なります。

3といふ数字は、この場合、世の中全体の人数を代表させてみると考へれば、一人の人間の為に其れ以外の人間たちが皆自己犠牲を払ひ、自殺にはならぬ死を供する話といふ風に読むことも出来ますので、段々と、かうなると、安部公房らしいブラック・ユーモア（「黒い笑ひ」と呼びませう）の話になつて来ます。

さて、かうして、かういふわけで、三人は、生きるために必要な全ての生きるためのものを重いものから順番に海といふ存在の穴の中に投げ込んで捨ててしまつた。そこで、お互ひがお互ひに



対して、自分がまづ食料になつて進ぜようといふ主張をし合ひ、二等航海士、料理長の順序で、前者は「大型ナイフを引き抜き、われとわが喉笛を掻き切り」、また後者は「そのナイフの刃先を、こともあろうに自分の心臓めがけて突き下し」て、最後に残る医者のために、食用に自分の肉を供するのです。

この船員が何故二等航海士でなければならないのかといへば、私はこの「周辺飛行4」は、隠された三島由紀夫への追悼の掌編であると思ふ。『午後の曳航』の航海士が何故二等航海士でなければならないのかと云へば、二等航海士の職務が高い帆柱（マスト）の上に登つて海を観察することだからです。この詩人の高みが、詩人三島由紀夫の世界でした。〔註4〕勿論、三島邸の三階の特別室「サン・ルーム」で三島由紀夫から10代の手作りの詩集を見せてもらつてみた安部公房は、二等航海士の意味を十分過ぎる位に知つてゐた。〔註5〕この二等航海士はまづ最初に自分の体を他者二人が生き延びるための自己犠牲とするのです。

## 〔註4〕

三島由紀夫にとって大切な此の詩人の高みについては『三島由紀夫の十代の詩を読み解く1』（<https://shibunraku.blogspot.com/2015/04/blog-post.html>）および『三島由紀夫の十代の詩を読み解く13：イカロス感覚4：塔と窗（まど）』で詳細に論じましたので、ご覧ください（[https://shibunraku.blogspot.com/2015/09/blog-post\\_5.html](https://shibunraku.blogspot.com/2015/09/blog-post_5.html)）例へば、二等航海士の登場する『午後の曳航』の冒頭は次の文章で始まる：

「おやすみ、を言ふと、母は登（のぼる）の部屋のドアに外側から鍵をかけた。家事でも起つたらどうするつもりだらう。もちろんそのときは一等さきにこのドアをあけると母は誓つてゐるけれど、もしそのとき木材が火でふやけ、塗料が鍵穴をふさいだらう、どうするつもりだらう。窓から逃げるか。しかし窓の下は石のたたきで、この妙にノツポの家の二階は絶望的に高かつた。」

この冒頭から判る通りに、「絶望的に高かつた」「ノツポの家の二階」といふ少年の殺人者である詩人の高い塔の上の部屋から話は始まるのです。

また、三島由紀夫の小説の分類については『三島由紀夫の十代の詩を読み解く26：イカロス感覚6：呪文と秘儀』をお読みください（[https://shibunraku.blogspot.com/2015/10/blog-post\\_18.html](https://shibunraku.blogspot.com/2015/10/blog-post_18.html)）。詩、小説、戯曲の関係を分類をし、それぞれの違ひを、三島由紀夫の言葉通りに明確にしました。小説の冒頭に着眼した此の論によれば、三島由紀夫の小説には次の3種類の小説があります：

- (1) 叙情詩としての小説
- (2) 叙事詩としての小説
- (3) 第三の小説

## 〔註5〕

このことの証（あかし）については、

- (1) 『春の雪』の第38章にもぐらの赤ん坊の死骸を登場させたこと（『三島由紀夫が安部公房に贈った別れの挨拶〜『春の雪』の中のもぐら〜』：[https://abekobosplace.blogspot.com/2015/03/blog-post\\_7.html](https://abekobosplace.blogspot.com/2015/03/blog-post_7.html)）、また、
- (2) 「『方舟さくら丸』の中の三島由紀夫」（[https://abekobosplace.blogspot.com/2017/01/blog-post\\_1.html](https://abekobosplace.blogspot.com/2017/01/blog-post_1.html)）

これら二つに於いて詳細に論じました。これら二つに加へて、

(3) 『自己犠牲——周辺飛行4』を挙げることにします。

## 6. 安部公房のニュートラルと三島由紀夫のニュートラル

上記の〔註5〕の註釈をまとめるために更に此の本文に続けて言へば、

(4) 1970年(昭和45年)の三島由紀夫の死後に安部公房の立ち上げた安部公房スタジオの演技論の中核概念に命名した「ニュートラル」といふ名前は、三島由紀夫が同じ年に産経新聞(7月7日付)に「果たし得ていない約束—私の中の二十五年」と題して寄稿した次の文中のニュートラルだからです。即ち、安部公房スタジオの演劇活動は、安部公房の、三島由紀夫の死に対する密かなる葬ひ合戦であつた。〔註6〕

「私の中の二十五年間を考へると、その空虚に今さらびつくりする。私はほとんど「生きた」とはいへない。鼻をつまみながら通りすぎたのだ。

二十五年前に私が憎んだものは、多少形を変へはしたが、今もあいかはらずしぶとく生き永らへてゐる。生き永らへてゐるどころか、おどろくべき繁殖力で日本中に完全に浸透してしまつた。それは戦後民主主義とそこから生ずる偽善といふおそるべきバチルス(つきまとつて害するもの)である。

こんな偽善と詐術は、アメリカの占領と共に終わるだらう、と考へていた私はずいぶん甘かつた。おどろくべきことには、日本人は自ら進んで、それを自分の体質とすることを選んだのである。政治も、経済も、社会も、文化ですら。

私は昭和二十年から三十二年ごろまで、大人しい芸術至上主義者だと思はれてゐた。私はただ冷笑してゐたのだ。或る種のひよわな青年は、抵抗の方法として冷笑しか知らないのである。そのうちに私は、自分の冷笑・自分のシニシズムに対してこそ戦はなければならない、と感じるやうになつた。

この二十五年間、認識は私に不幸をしかもたらさなかつた。私の幸福はすべて別の源泉から汲まれたものである。

なるほど私は小説を書きつづけてきた。戯曲もたくさん書いた。しかし作品をいくら積み重ねても、作者にとっては、排泄物を積み重ねたのと同じことである。その結果賢明になることは断じてない。さうかと云つて、美しいほど愚かになれるわけではない。

この二十五年間、思想的節操を保つたという自負は多少あるけれども、そのこと自体は大して自慢にならない。思想的節操を保つために投獄されたこともなければ大怪我をしたこともないからである。又、一面から見れば、思想的に変節しないといふことは、幾分鈍感な意固地な頭の証明にこそなれ、鋭敏、柔軟な感受性の証明にはならぬであらう。つきつめてみれば、「男の意地」



といふことを多く出ないのである。それはそれでいいと内心想つてはいるけれども。

それよりも気にかかるのは、私が果たして「約束」を果たして来たか、といふことである。否定により、批判により、私は何事かを約束して来た筈だ。政治家ではないから実際的利益を与えて約束を果たすわけではないが、政治家の与へうるよりも、もつともっと大きな、もつともつと重要な約束を、私はまだ果たしてゐないといふ思ひに日夜責められるのである。その約束を果たすためなら文学なんかどうでもいい、という考へが時折頭をかすめる。これも「男の意地」であろうが、それほど否定してきた戦後民主主義の時代二十五年間、否定しながらそこから利益を得、のうのうと暮らして来たということは、私の久しい心の傷になつてゐる。

個人的な問題に戻ると、この二十五年間、私のやつてきたことは、ずいぶん奇矯な企てであつた。まだそれはほとんど十分に理解されていない。もともと理解を求めてはじめたことではないから、それはそれでいいが、私は何とか、私の肉体と精神を等価のものとすることによって、その実践によつて、文学に対する近代主義的妄信を根底から破壊してやらうと思つて来たのである。

肉体のはかなさと文学の強靱との、又、文学のほのかさと肉体の剛毅との、極度のコントラストと無理強ひの結合とは、私のむかしからの夢であり、これは多分ヨーロッパのどんな作家もかつて企てなかつたことであり、もしそれが完全に成就されれば、作者と作られる者の一致、ボードレール流に言えば、「死刑囚たり且つ死刑執行人」たることが可能になるのだ。作者と作られる者との乖離（かいり）に、芸術家の孤独と倒錯した矜持を発見したときに、近代がはじまつたのではなからうか。私のこの「近代」という意味は、古代についても妥当するのであり、万葉集でいえば大伴家持、ギリシア悲劇で言えばエウリピデスが、すでにこの種の「近代」を代表してゐるのである。

私はこの二十五年間に多くの友を得、多くの友を失つた。原因はすべて私のわがままに拠る。私には寛厚という徳が欠けており、果ては上田秋成や平賀源内のようになるのがオチであろう。

自分では十分俗悪で、山気もありすぎるほどあるのに、どうして「俗に遊ぶ」という境地になれないものか、われとわが心を疑つてゐる。私は人生をほとんど愛さない。いつも風車を相手に戦つてゐるのが、一体、人生を愛するといふことであるかどうか。

二十五年間に希望を一つ一つ失つて、もはや行き着く先が見えてしまつたやうな今日では、その幾多の希望がいかに空疎で、いかに俗悪で、しかも希望に要したエネルギーがいかに膨大（ぼうだい）であつたかに啞然とする。これだけのエネルギーを絶望に使つていたら、もう少しどうにかなつていたのではないか【a】。

私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行つたら「日本」はなくなつてしまふのではないかといふ感を日ましに深くする。日本はなくなつて、その代はりに、無機的な、からつぽな、ニュートラルな【b】、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国

が極東の一角に残るのであらう。それでもいいと思つてゐる人たちと、私は口をきく気にもなれなくなつてゐるのである。」（傍線引用者）

〔註6〕

この論考を機会に、安部公房が三島由紀夫を語り、または言及した安部公房全集の中の該当する作品を挙げると次の通りです：

1. 「精神の城塞」：全集第22巻、157ページ
2. 続・内なる辺境：第22巻、337ページ
3. 発想の周辺「二十世紀の文学」：全集第22巻、422ページ
4. 「共同体幻想を否定する文学」：全集第23巻、280ページ
5. 堤清二へのインタビュー：全集第23巻の贗月報（これは堤清二氏による三島由紀夫の死に関する安部公房の反応についての発言）
6. 「周辺飛行19」の「前回の最後にかかげておいた応用問題」：全集第24巻、175ページ
7. 人間・共同体・芸術：対談：安部公房と磯田光一：全集第24巻、370ページ、そして378ページ以降
8. 安部公房氏に聞く：全集第25巻、111ページ上段
9. 「反政治的な、あまりに反政治的な」：全集第25巻、374ページ

『安部公房と共産主義』（もぐら通信第29号）より引用してお伝えします。：

「このような三島由紀夫を自分の同類、即ち「戯曲以前に」「俳優が言葉による存在（原文傍点）でなければならない」（『前回の最後にかかげておいた応用問題—周辺飛行19』。全集第24巻、176ページ上段）ということをも十分深く理解していた三島由紀夫に対する安部公房の言葉が、やはり『反政治的な、あまりに反政治的な』〔註6A〕にありますので、これを引用して、紹介します（全集第25巻、374下段～375ページ）。これは、三島由紀夫の死後6年経って、やっと書くことのできた、安部公房による鎮魂の文章です。傍線筆者。

〔註6A〕

これは「三島由紀夫全集」の第33巻付録のNo.33の付録と、安部公房全集の書誌にありますので、三島由紀夫全集の月報のための文章です。

「ふと思う。ぼくには案外根深い共通項があったのかもしれない。文学的にも思想的にも違っていたし、日常の趣味も違っていた。ぼくがカメラ・マニヤなら、彼は時計マニヤだった。ぼくが大の蟹好きなら、彼は大の蟹嫌いだった。しかし、ある種の存在（もしくは現象）に対する嫌悪感では、完全に一致していたように思う。いつか銀座のバーで飲んでいたとき、とつぜん二人同時に立ち上がってしまったことがある。同時にトイレに駆けこもうとしたのだ。理由に気付いて、大笑いになった。某評論家が入って来たところだった。

ぼくらに共通していたのは、たぶん、文化の自己完結性に対する強い確信だったように思う。文化が文化以外の言葉で語られるのを聞くとき、彼はいつも感情的な拒絶反応を示した。しかもそうした拒絶反応が、しばしば三島擁護の口実に利用されたり、批判や攻撃の理由に使われたりしたのだから、ついには文化以外の場所でも武装せざるを得なくなったのも無理はない。それが有効な武装だったかどうかは、今は問うまい。安易な非政治的文化論の臭気に耐えるほど、鼻づまりの楽観主義者になるには、いささか純粹すぎたのだ。文化的政治論も、政治的文化論も、いずれ似たようなものである。

反政治的な、あまりに反政治的な死であった。その死の上に、時とはどまり、当分過去にはなってくれそうにない。」

「反政治的な、あまりに反政治的な死であった。」と言って、二人で真剣に語りあった筈のニーチェの論文『人間的な、あまりに人間的な』の題名を本歌取りする安部公房は、本当に此の自分と同類の親しき再帰的な友を、深く正確に理解しておりました。」



この1976年1月25日付エッセイ『反政治的な、あまりに反政治的な』は「三島由紀夫全集」の第33巻付録のNo.33の付録と、書誌にありますので、「三島由紀夫全集」の月報のための文章です。当時の編集者には二人の仲はよく知られてゐた。今は三島由紀夫の読者には忘れられてゐる。

その他上記〔註6〕に挙げた作品を読むと、安部公房が三島由紀夫に言及して、三島由紀夫の死への事前の予知・予測の言葉も含めて、安部公房の読者にとっては如何に二人は親しい友であつたかがよく判ります。確かに一人娘ねりさんの言ふ通りに「馬のあう二人だつた」のです。（もぐら通信第6号）（『安部公房』に缶切りを！～安部ねり&加藤弘一 トークライブ報告～2013年2月20日紀伊國屋書店新宿南店』ホッタタカシ 氏報告）

殊に上記「6」。「周辺飛行19」の「前回の最後にかかえておいた応用問題」：全集第24巻、175ページ」は二人が如何に演劇に於いても相対立した立場にみながらお互ひに理解しあふ親しい関係であつたかの非常によく判る文章になつてゐます。「周辺飛行」と云ふ連載は、安部公房が安部公房スタジオといふ演劇集団を立ち上げるために執筆を開始した連載エッセイです。この「周辺飛行19」は、三島由紀夫の演劇が一体どのやうな演劇であるのか、その本質を言い当ててゐる隙がありません。

そして、最も大事なことは、この「周辺飛行19」の「前回の最後にかかえておいた応用問題」は冒頭述べられてゐるやうに、安部公房スタジオの演技論の中核概念「ニュートラル」を説明する文章なのです。そして、その冒頭の（戯曲、俳優、演技）についての短い説明の後に、与へられた残りのページ全てを使つて、三島由紀夫との演劇論、演技論、俳優論の話をしてゐるのです。そしてまた、自己犠牲といふ主題の元に書かれた「周辺飛行4」に登場するのが二等航海士であり、さうして自分自身も料理長として登場するのであれば、「安部公房スタジオの演劇活動は、安部公房の、三島由紀夫の死に対する密かなる葬ひ合戦であつた」といふ仮説を裏付け、補強することになります。

## 7. 安部公房の絶望と三島由紀夫の希望

さて、このやうに【b】が「ニュートラル」といふ三島由紀夫の言葉である。これに対して【a】の希望に対するに絶望といふことの積極的・肯定的な理解への言及は、安部公房の言葉が下敷きになつてゐる。

後者【a】は、魯迅の言葉として全集中にも繰り返し変奏されて出てきます。今ここで整理しますと、

（1）1962.6.1：エッセイ「絶望の歌」：全集第16巻、113ページ上段：

「これまで僕は、「絶望が虚妄であるのは、希望が虚妄であるのと同じことだ」という、あの名言を、もっぱら、希望でも絶望でもない、煉獄的薄明の弁証法的把握なのだと考えていた。しかし最近になって、その文句の配列が、あらためて気になりだしたのである。」

この月は『砂の女』の刊行の月でもありますから、同作の冒頭のエピグラフ「――罰がなければ、逃げるたのしみもない――」にどこか繋がつてゐる気配があります。

「罰がなければ、逃げるたのしみもない」の両端に配置された「――」は勿論安部公房の存在論の記号です。この文の両端に付ける記号の意味については「『カンガルー・ノート』論(1)」(もぐら通信第68号)の「5. 1. 4 『カンガルー・ノート』の形象論：(16) 風の音」より引用してお伝へします：

「このことから見ると、安部公房の呪文の使ひ方による存在の物語の存在化の深まりの度合ひは、次のやうになつてゐる。呪文に関する存在化深化の記号を使つた表記規則です(以下必要に応じて「呪文存在化記号規則」と呼ぶ事にします)。

- 1 呪文を地の文にベタで書く
- 2 呪文の両端に記号を置く。組み合わせは「一」と「一」
- 3 呪文の両端に記号を置く。組み合わせは「一」と「……」
- 4 呪文の両端に記号を置く。組み合わせは「一」と空白:最後の端には記号を置かずに余白(と沈黙)とする
- 5 呪文の両端に記号を置く。組み合わせは「(」と「)」:存在の記号( )を使ふ。

安部公房の呪文は、この5つの順序を踏んでゐる。」

『砂の女』のエピグラフのステップは2の段階であることがわかります。さあ、これから存在の物語が、この呪文「罰がなければ、逃げるたのしみもない」とともに始まるぞ、といふわけです。さうして、第2章は砂の女の「甕のなかの水垢を、かい出しながら、同じ文句を、飽きもせずくりかえしている」の呪文で始まる。

(2) 1965.9.17: 「30人への3つの質問『われらの文学』のアンケートに答えて」: 全集第29巻、545ページ下段:

「(3) 絶望の虚妄なるは、希望の虚妄なるにひとしい——魯迅」。

また、

(3) 1973.11: エッセイ「プレス本『洪水』覚え書」: 全集第24巻、467ページ:

「希望を語るのは容易だが、絶望を語るのはもっと容易だ。

飽きずに絶望を繰り返して語りうるほど、人類はまだ希望にみちているのだろうか。」

(4) 1984.11.1: 『核時代の「方舟」』: 全集第27巻、245ページ下段:

「筑紫 安部さんご自身には、生きのびるためのプログラムがありますか。

安部: いや、ないですね。ただ、ないということが生きるプログラムじゃないかという気もする。結局、絶望的な状況が見えていても、絶望はそれ自体が希望の一つの形式だと思うわけです。時代がここまで進んでしまったからには、もはや絶望の対極に希望があるという考え方は捨てた方がいいのではないか。」



絶望といふ言葉とはまた別の言葉の話になりますが、『暁の寺』と云ふ虚構の結末が思ひも掛けずに現実の時間と非ユークリッド幾何学的に交差してしまつたことを三島由紀夫が嘆きの口調で書いてゐる箇所に言はれる非ユークリッド幾何学といふ言葉もまた、長年安部公房と三島由紀夫二人の間で議論されて来た小説論、演劇論の鍵語（キーワード）の一つでした。〔註7〕

〔註7〕

『三島由紀夫の十代の詩を読み解く1』：<https://shibunraku.blogspot.com/2015/04/blog-post.html>より引用します：

「2. 三島由紀夫と安部公房の思考論理の差異

この現実と非現実との間の差異をどのように生きるのか、この差異をどのようなものの考え方で0にするのか、この差異にどのように対処するのか、安部公房は、この差異のことを、ユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学の平行線の差異として、三島由紀夫に説明をしました。勿論安部公房は後者を選択し、他方、三島由紀夫は前者を選択したのです。

次の三島由紀夫の発言を読みますと、安部公房は三島由紀夫に、中学生のときに読んで以来終生好きだったエドガー・アラン・ポーの作品の内、『楕円形の肖像画』の話为例にして、自分の文学概念である仮説設定の文学の話したことがわかります。

そうして、そのときに、ユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学の平行線の差異が後者では0になるという話をし、安部公房は後者を選択するのだと言つたのに対して、三島由紀夫は、俺はそれは嫌だ、現実と非現実は永遠に交わることなく、0になることなく、俺はその二つに立って、二つを永遠に平行線のままユークリッド幾何学の世界にいて宰領するのだ、それが俺の自由なのだと言つたのです。

自己を現実と非現実の間に立って永遠に宰領しようとしたら、即ち現実の中で自己が透明な媒体となり関数となろうとしたら、関数は無時間の媒体（統合的な関係である積算）のことですから、自己の変化や社会の変化に応じて、関数である自分自身を更に上位接続（積算：conjuncton）をして変形させなければ生きてゆけなくなります。これが、三島由紀夫がボディビルをしたり、武道に励んだりという、文に対するに武に傾いた、現実と非現実の均衡をとるために止むを得ず自然になりゆくべくして選択した選択肢であり、言語の世界から言葉の眼で眺めた、三島由紀の文学の世界の有り様です。

これらのことを『暁の寺』を書き終えた三島由紀夫は、次のように言っております。

「つい数日前、私はここ五年ほど継続中の長編『豊饒の海』の第三巻「暁の寺」を脱稿した。これで全巻を終わったわけではなく、さらに難物の最終巻を控えているが、一区切がついて、いわば行軍の小休止といったところだ。人から見れば、いかにも快い休息と見えるであろう。しかし私は実に実に不快だったのである。この快不快は、作品の出来栄に満足しているか否かということとは全く関係がない。では何の不快かを説明するには、沢山の言葉が要るのである。

私は今までいくつかの長編小説を書いたけれども、こんなに長い小説を書いたのははじめてである。今までの三巻だけでも、あわせて優に二千枚を超えている。長い小説を書くには、ダムを一つ建てるほどの時間がかかる。従つて、『豊饒の海』を書きながら、私はその終わりのほうを、不確定の未来に委ねておいた。この作品の未来はつねに浮遊していたし、三巻を書き了えた今でもなお浮遊している。しかしこのことは、作品世界の時間的未来が、現実世界の時間的未来と、あたかも非ユークリッド数学における平行線のように、その端のほうが交叉して溶け合っていることを意味しない。

作品世界の未来の終末と現実世界の終末が、時間的に完全に符号するという事は考えられない。ボオの「楕円

形の肖像画」のような事件は、現実には起こりえないのだ。」（傍線筆者）

しかし、この文の語るところは、作品世界の未来の終末と現実世界の終末が、時間的に完全に符号するという事は考えられない。ポオの『楕円形の肖像画』のような事件は、現実には起こり得ないという確信のもとに生きてきた三島由紀夫の確信が根底からくつがえって、作品世界の時間的未来が、現実世界の時間的未来と、あたかも非ユークリッド数学における平行線のように、その端のほうで交叉して溶け合ってしまうと、その平行線の間の差異が0になったということを行っているのです。

この三島由紀夫の文章を読んで解ることは、この作家は安部公房の説明したユークリッド幾何学のどこまで行っても交わらない平行線を時間のこととして理解をしていること、これに対して安部公房は、そうではなく、これは空間のことなのであって、幾何学の世界には時間は無関係であること、世界は差異であって、連続量（又は連続体）としてみたら、それは歪みであり、人間の意識も含めて世界は歪んでいるのだということ、従って現実には曲面なのであって、実際に平行線を現実の世界で引いても、空間の問題として先へ行くと交差するのだと説明をしたのだということです。

安部公房の読者であれば『箱男』に挿入された8枚の安部公房自身の撮影した写真のうち一枚にカーブミラーの写真があり、それは曲面であるが故に、対象となる旧海軍将校倶楽部の建物が歪んでいることを知っているでしょう。

（安部公房の十代の詩と安部公房の空間についての理解、特に十字路と十字形についての理解については『もぐら感覚22：ミリタリオ・ルック』（もぐら通信第27号、第28号）で詳細に論じましたので、これをご覧ください。）又、そのほかの安部公房の撮った写真に、タンクローリー車のタンクの背面の歪みを写した写真その他のあることは、あなたのご存知の通りです。

また、安部公房の読者であれば、安部公房は時間を幾何学的に空間化して、即ち時間の単位を交換して時間を無化する事によって、即ち今日は昨日の未来、今日は明日の過去と考えて、位相幾何学的に誕生する（今日配達される）

「明日の新聞」や『第四間氷期』のコンピューターの（今現在に予言を実現させる能力を有する）未来予言機械を思い出せば、それは安部公房のいう通りだと思われるでしょう。」

安部公房は三島由紀夫とポオの『楕円形の肖像画』を巡って、現実と虚構の関係を議論したものと見えます。

（以下、このページは余白）



## 8。「弱者への愛には、いつも殺意がこめられてゐる。」

さて、二等航海士の肉の重さは32キロ。これで二人は「約二十日あまりを生き延びることが出来たのである。」料理長の肉の重さは36キロ。「味もよかった。二等航海士をけなすわけではないが、さすがに長年美食できたえ上げただけのことはあったと思う。おかげでさらに、四十日あまりを食いつなぐことが出来たばかりか、無事救出された時には、遭難以前にくらべ、三キロも増えていたほどだ。」

かうなつて来ると、物質的な物（ブツ）は海といふ凹（窪み）に落とし、人間といふ生き物は存在たる医者（この医者が贗医者だとすると）、即ち《医者》の胃袋といふ凹に落とすといふ、これは話だと考へることができます。

何といふ論理展開をする奴だ、安部公房といふ奴は。

小説とは異なり、これはエッセイですから、安部公房には珍しく、「この短い報告文を通じて言いたかったことの、骨子」を文字にして表してゐます。

それは「だが、断るまでもなく、なにも肉や脂だけが問題だったのではない。危機に際して、人間はいかに気高く、自己犠牲の精神を高揚させうるものか、まさその点こそが、この短い報告文を通じて言いたかったことの、骨子にほかならないのである。」

さう、さうして「肉や脂だけ」を問題にするのであれば、「さう、骨子と言へば、なんと言つても、腰椎のシチューにまさる珍味はない。いまやわが骨肉となった、二人の友に、心からの感謝をささげよう。」と最後の一行を締めてゐます。

この掌編を読んで味はふ醍醐味は、三人の間で交はされる会話の可笑しさ、面白さです。一度全集第23巻を開いてお読み下さい。救命ボートの三人のやりとりを読みますと、権利と義務といふ言葉が飛び交つて、三人であるといふこと、これがやはり社会の縮図であることを安部公房は示してゐます。さう、『S・カルマ氏の犯罪』の法廷の場面と同じやりとり、即ちあの滑稽なnon-senseは、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』の最後にもある法廷審理の場面でもありましたが、その同じやりとりを安部公房は「周辺飛行4」で再現してゐるのです。

しかし、この話には裁判長もゐないし、ランプの赤のハートの王様もゐない。裁き手のゐない社会の中で、一体殺人ではない自己犠牲による死を何と考へるべきなのか？と問ふと、安部公房の次の有名な惹句が思ひ出される。

「弱者への愛には、いつも殺意がこめられてゐる。」

最後に生き残つた医者は、社会の中での最弱者であつたのだらうか？それとも、自己犠牲の死を

死んだ二人が社会の中での最弱者であつたのだらうか？この場合、医者に殺意はあつたのか？どうも殺意はなかつた。何故なら医者もまた最初に食料になることを主張した一人であるからです。

前回の「周辺飛行3」にも料理が出て来ましたが、この時期安部公房の念頭を去来したのは料理と料理人であつたやうです。これが一番殺人に関係のある世の中の職業であるからでせう。さう、私たちは毎日死を三回食べてゐることを憶ひ出して下さい。料理とは死の美しい再生産である。食事をすると美しい死の嚥下咀嚼であり、消化であり、レストランで代金を支払へば死の消費である。安部公房は此の美しさを裏側から描いた〔註8〕。

〔註8〕

『密会』刊行後の安部公房の言葉に次の言葉ある：

「この小説のエピグラフとして僕は、「弱者への愛には、いつも殺意がこめられている」という言葉を置いたけれども、それが最後には裏返されて、「弱者の幸せには、いつも殺される期待がこめられている」という感じに逆転していった。「弱者への愛には、いつも殺意がこめられている」と言っている立場と、小説を書いている僕の立場とは、ちょうど裏表なんだな。書きながら感じたんだが、強者である「馬人間」を仮に主人公とすると、この小説はやはり、僕の眼で書いたのではなく、僕が自分の眼にはしたくない眼でこの世の中を書いたということになる。ある意味で、「もの凄く美しく地獄を書こうとした」とも言えるし、また、ユートピアを裏から書いたとも言える。」（『裏からみたユートピア』全集第25巻、503ページ下段）

### 9. 料理長安部公房の北京餃子

「周辺飛行3」では、話者（報告者）は時間の存在しない存在の粉末の鶏肉料理を食べ、「周辺飛行4」では、やはり話者（報告者）は、今度は時間の中を生きた人間の肉を食べる。前者はどうやら永遠に存在の三階層に閉ぢ込められて、「ゴドーを待ちながら」終はりなく食べ続けなければならない。後者は日常の時間に生還して、この報告書を書いてゐる。

最後に付言すれば、実は此の三人の乗る船の中にあるもので海に投げ入れなかつたものがあるのです。それは「四日目には、救急箱の中の、劇薬以外の薬——むろん絆創膏も——を、すっかりしゃぶりつくした。」とある以上、劇薬だけは最後の最後まで船の中にあつたのです。しかし、三人は自殺といふ選択はしなかつた。あくまでも、自殺でも他殺でもない第三の死。自殺でも他殺でもなければ、帰還後に警察官も逮捕の仕様がなく、さうであれば裁判官も裁判の仕様がな。それ故に、

「しかし、私たちの共食いは、決して世間の非難をあびるような性質のものでは無かつたのだ。」

この「しかし」は世間に対して言はれた「しかし」です。しかし、

「それ故に、三人の共食いは、決して世間の非難をあびるような性質のものでは無かつたのだ。」

と、人称を変へ、話法（mode）を変へて、私が改めて第三者の事件として誰かに報告すると、



このように言ふことになるでせう。

出来のいい掌編小説です。安部公房には、川端康成の向かふを張つて、この手の掌編をもつと沢山書いて欲しかつたと思はせる掌編小説です。

これを掌編探偵小説と呼んで良いのではないでせうか。この大きなものが『燃えつきた地図』である。

さうさう、この掌編探偵小説といふべき報告書は、『事業』といふ短編小説が、話者たる一人称の私が「「彼の中の彼」殿」へと報告する報告書であるのと全く同様に、安部公房独自の話法である内省的な記憶の中での「僕の中の「僕」」といふ話法に従つて、この「周辺飛行4」もまた最後の一行は「いまやわが骨肉となった二人の友に、心からの感謝をささげよう。」とあつて、今や文字通りに話者の腹の中に納まつて話者と一体になつた「僕の中の「僕」」である複数の「僕」に向かつて、二人を思ひながら此の言葉が言はれてゐるのです。

同様に『事業』の最後の一行は、次の通りです：

「当日のメニューには、腹にバターと香料をつめ、密につけた六ヶ月の胎児（食べごろである。とりわけ軟骨の歯ざわりは格別である。）の丸焼が、特に付け加えられ、用意されるであろうことを、お誘いの言葉として申しそえておく次第である。

「彼の中の「彼」殿」

ところで、「いまやわが骨肉となった二人の友に、心からの感謝をささげよう。」といふことであり、二人の友の一人が二等航海士といふ三島由紀夫であれば、もう一人の自己犠牲の死を死んだ料理長とは、実は安部公房自身の投影された存在の料理長ではないのだろうか。さうして、この料理長は餃子をつくる名人であることを自負してゐた〔註9〕。安部公房が餃子をつくる姿が「厨房の殿方」といふ記事に掲載されてゐます（『アサヒグラフ』昭和29年9月26日号）〔註10〕。



餃子の調理中 (1954年)

安部公房は三島由紀夫にあのサン・ルームか六本木のレストラン・キャンティ（CHIANTI）かで会った時に、きつと餃子の腕前を自慢したに違ひない。そして、安部公房の論理に、即ちリルケとニーチェに学んで自家菜籠中にした論理に従ひ、最も近いものは最も遠く、最も遠いものは最も近いといふ論理に忠実に、かう言つたに違ひない。何故なら三島由紀夫は最も親しい友であつたから。

「君には作つてやらないよ。」

[註9]

安部公房は山口果林にも餃子が得意だといふ自慢をした。さうして、三島由紀夫に言つたに違ひない理由と同じ理由で、山口果林にも存在の餃子をつくつてやらなかつた。同じことを同じ論理で、「餃子をつくつてくれると言つたじゃない」といふ山口果林のなだる言葉に、安部公房は山口果林を釣つた魚に譬（たと）へてかう言つてゐる

「またある日、ハンバーグのひき肉を捏ねていると、安部公房は肉の捏ね方の講釈を始めた。話は満州の恒例の年越し「北京餃子」に飛び、如何（いか）に餃子料理が得意かという自慢になる。いつか作ってくれる約束をしたが、実行に移される日は来なかつた。

「餃子作ってくれるって約束したじゃない」

「釣り上げた魚にエサは要らない」

「それ冗談だよ」まじまじと顔を見つめてしまった。」

（『安部公房とわたし』、42ページ）。

きつと、この女優のための餃子は『アサヒグラフ』の実物の餃子とは違つて、贗の餃子、即ち存在の餃子であるからでせう。何しろ安部公房にとって此の女優は、存在として時間の中を生きる作家にとつての「案内人」なのであり、案内人たる未分化の実存、例を挙げれば芥川賞受賞作『S・カルマ氏の犯罪』のY子であり、最後の作品『カンガルー・ノート』の「トンボ眼鏡の看護婦」であるからです。

[註10]

『私の本棚より』（もぐら通信第16号）に、岡田裕志氏の投稿による同記事の詳細な説明が、厨房の中の岡本太郎の姿その他も含み解説されてゐます。

[無番号の註]

この「周辺飛行4」と並行して書いてみた『箱男』の第20章《死刑執行人に罪はない》に次の「ぼく」（贗医者）が（これから殺されて死体となる「以前に」）夢の中で看護婦である「君」に呼び掛ける話法（mode）で、その看護婦を食べる人肉食の箇所がある。やはり、自殺でもなく他殺でもない第三の死を、即ちいつ殺されるかは不確定な刑の執行までの間に死刑執行人である看護婦に呼び掛けるといふ設定で次の人肉食の話があります（全集第24巻、103ページ下段～104ページ上段）：

「ぼくはまず、ぬけぬけと彼女に求婚し、断わられれば（断られるに決まっているが）彼女を殺し、何日もかけてその死体を味わい始めることになりそうだ。たとえではなく、文字どおり、口に入れて噛みしめ舌で味わうのである。ぼくはもう何度も、彼女を食べる夢を見た。あまり火を通さない、生焼けのうちがいい。彼女は従順で、肉になつても微笑を絶やさず、仔牛と野鳥の間のような味がして、なんとも言えずいとおしい。彼女に対する情感が、煮詰められて、けっきょく食欲に収斂してしまうらしいのだ。そこまで食欲が嵩じれば、いやでも生に執着せざるを得なくなる。だから、こうして理性が残っているうちに、なんとか片を付けてしまいたいと思うのだ。」





イースター島のモアイ像

## Rongo Rongo (1) ヴォイニッチ手稿



魚型の板に彫られたロンゴロンゴ

岩田英哉

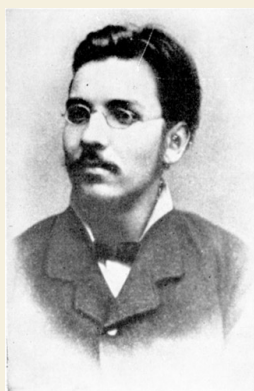
### 目次

1. ヴォイニッチ手稿とは何か
2. ヴォイニッチとは誰か
3. ヴォイニッチ手稿を解読するための言語と家系
4. ヴォイニッチ手稿の示す近代ヨーロッパの思想史上の分岐
5. AI（人工知能）と終末・方舟思想
6. 安部公房流の「透視図法」で時代を読む

\*\*\*

### 1. ヴォイニッチ手稿とは何か

発見者の名前にちなんで「ヴォイニッチ手稿」または「ヴォイニッチ写本」と呼ばれる文書があります。



1912年にイタリアのモンドラゴーネ寺院でヴォイニッチが発見した。1915年にその存在が公表されて以降、幾人もの高名な言語学者や暗号学者が文字の解読に挑戦したが、未だ解明されていない文書です。

具体的に文書の写真を掲載します。

(1) 文字

48  
 Torsol v22iq crowd dffleatd oftoedg  
 drol of ato vand chrg ftand bac  
 ethrol dand gollor ofthro ofstaud  
 dand crollq crog qollq gollcro  
 ofthro of crog crad qthecro chrg ?  
 gollcrg crollq lland offcrg vand  
 crog crowd cro v22iq 2 crg lladoge  
 qthcro of crog of ovd offq crog dand  
 ofthro ofthro of crog crog crog dand  
 crog crog ofthrou chrg gollcrg  
 crog ovd crog crog dand ofthrg  
 dand ofthro of crog crog

(2) 植物

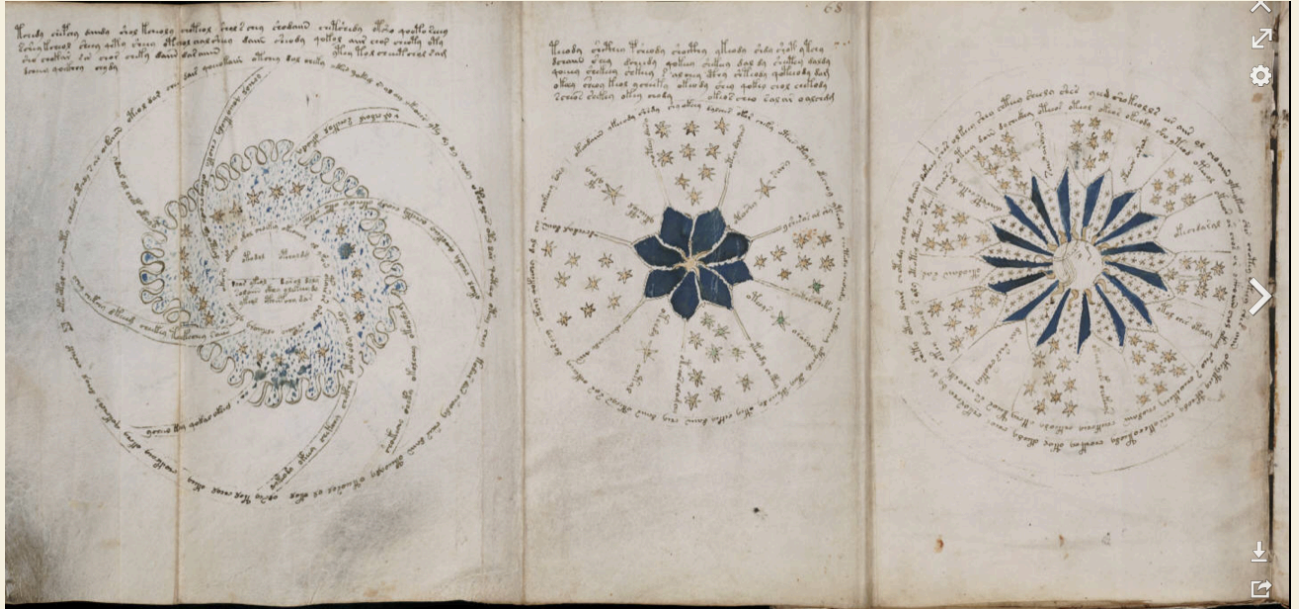


(3) 女性たちの入浴





## (4) 円環図



「大きさは23.5 cm × 16.2 cm × 5 cmで、左から右読み、現存する分で約240ページの羊皮紙でできている。未解読の文字で書かれた文章の他、大半のページに様々な彩色された生物を思わせる挿絵が描かれている。文章に使用されている言語は多くの歴史研究者および言語学者によって何度も解読の試みが行われているが、現在でも解明されていない。名称は発見者であるポーランド系アメリカ人の革命家で古書収集家のウィルフリッド・ヴォイニッチにちなむ。彼は1912年にイタリアで同書を発見した。

手稿の執筆時期については分かっていない。2011年にアリゾナ大学で行われた放射性炭素年代測定により、手稿に使用されている羊皮紙は1404年 - 1438年頃に作られたとされる[1][2]。ただ、執筆時期はさらに後年である可能性もある[3]。

最初の確実な所有者はプラハの錬金術師ゲオルク・バレシュ (1585-1662) である。彼が1639年にアタナシウス・キルヒャー にあてた書簡がこの手稿に言及する最古の資料である[4]。

バレシュの死後、手稿は友人のヤン・マレク・マルチ (1595-1667) の手に渡り、数年後、手稿は彼の長年の友人であるキルヒャーに送られた[4]。

手稿のカバーの中から発見された1665年ないし1666年の8月19日の日付のあるマルチがキルヒャーにあてた書簡は、この手稿がかつてルドルフ2世に600ドゥカートで購入されたという逸話を紹介している。この書簡はヴォイニッチがこの手稿を入手したときにも付属していた[5]。

以後200年の間は記録が存在しないが、キルヒャーの死後、彼の他の文書とともにローマのコレッジョ・ロマーノの図書館の所蔵になったと考えられる。ヴォイニッチ手稿が再び歴史に登

場するのは1870年にヴィットーリオ・エマヌエーレ2世がローマを占領した後である。新しいイタリアの政府は大学の図書館の蔵書を含む教会財産の没収を決定したが、多くの書物は個人の所有とすることで没収を逃れた。ヴォイニッチ手稿は当時 イエズス会の指導者で大学の学長を務めていたピーター・ヤン・ベッククス の蔵書となり、他の書物とともにローマからフラスカーティのヴィラ・モンドラゴーネ に移された[4]。

1912年、コレッジョ・ロマーノが財政難から所有する財産をいくつか売却することになった。その時ウィルフリッド・ヴォイニッチが購入した30の手稿の中にヴォイニッチ手稿が含まれており、以後同書は彼の名を冠して世に広く知られるようになった[4]。1969年にヴォイニッチ手稿はハンス・P・クラウスにより イェール大学のバイネキ稀覯本・手稿図書館に寄贈され、MS 408 として収蔵された[6]。現在ではインターネット上で閲覧が可能である[7]。 」

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヴォイニッチ手稿>)

## 2. ヴォイニッチとは誰か

ヴォイニッチの人生は過激であり、波乱万丈です：

「ウィルフリッド・ヴォイニッチは、ロシア帝国コヴノ県（現在のリトアニアのほぼ北半分）の1都市であったテルシェイで、ポーランド系リトアニア人の貴族（名義顧問官（Титулярный советник）、文官の第9位）の家系に生まれた[1]。

1885年にワルシャワで、ルドヴィク・ヴァルィニスキ（Ludwik Waryński）率いる革命組織 Proletariat（プロレタリアート）へ参加。1886年に、ワルシャワ要塞に収監されている死刑判決を受けた同志を解放しようとして失敗した後に、ロシア帝国の警察に逮捕された。1887年に強制労働刑である囚人農場（Каторга）送りの判決を受け、トゥンカ（Тунка、シベリアのブリヤート共和国にある村落）へ流刑となる。

1890年、シベリアからロンドンへ脱出して、偽名としてファーストネームをヴィルフリッド（Wilfryd）とした。1893年には、高名なイギリス人数学者のジョージ・ブールの娘で革命同志であるエセル・リリアン・ブール（Ethel Lilian Boole）と結婚。名をポーランド式の Wilfryd Wojnicz からイギリス式の Wilfrid Voynich へと改めた。また、同志のセルゲイ・クラフチンスキー（Сергей Михайлович Степняк-Кравчинский, (Sergius) Stepniak の名で知られる。1878年にサンクトペテルブルクで秘密警察長官ニコライ・メゼンツォフを暗殺して以降、英米など各国で活動していた）と共に「ロシア自由の支持者の会」（Society of Friends of Russian Freedom）を設立した。

1895年に、クラフチンスキーが西ロンドンのベッドフォード・パークの踏切で轢死して以降、革命運動からは身を引いた。1898年にロンドンで本屋を始め、1914年にはニューヨークにも出店した。ヴォイニッチは稀覯書の取り扱いに深く関わったほか、多くのカタログの執筆を行ったりした。



1930年、ニューヨークで死去した。」

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/ウィルフリッド・ヴォイニッチ>)

### 3. ヴォイニッチ手稿を解読するための言語と家系

世にある此の未知の、未解読の言語についての推論を見ると、次の二つの言語論が、当たり前のことながら、一般論として論ぜられてゐる。

(1) 自然言語

(2) 人工言語

発見者であるポーランド系アメリカ人の革命家で古書収集家のウィルフリッド・ヴォイニッチの妻、エーテル・リリアン・ヴォイニッチが、ブール代数といふ今のコンピューター（電子計算機）の基礎数学である二進数の世界の創始者の娘であるといふことを知ると、これは後者（2）の人工言語である可能性が高いと思ふ。しかし高名な父は生まれた年に亡くなつてみますので、直接の数学の手ほどきは受けませんでした。生まれた年に娘は余所に預けられて成長する。

父親のジョージ・ブーランは小学校に通つただけでの学歴です。49歳に没します。その間、イギリスのRoyal SocietyよりRoyal Medalを授与され、遂にはRoyal Societyの会員（フェローの資格）に選ばれてゐます。数学の天才であつた。私も随分何十年も前に天才の人生を調べたことがありますし、その後も注意をして様々な方面に目を遣つて来ましたが、天才は国家の用意した学校へ行つてもみな学校が嫌いで、または学校に縁がなく、学歴をいふならば学歴がないに等しい〔註1〕。学校で優秀な成績で一番になればなるほど、なりたいたいと思へば思ふ程、あなたは天才から遥かに程遠くなるのです。このブール代数の創始者の娘も父親の血をひいて自学自習型の独創的な娘でした。

#### 〔註1〕

そのうちの一冊が『天才たちは学校がきらいだった』（トマス・G・ウエスト著。久志本克己訳。講談社）です。もう一冊は天才論として読める盛田昭夫著『学歴無用論』です。天才たちに共通してゐる特徴は、天才たちは言葉で表現できないが、非常に明瞭に眼に見える（といふ意味でもある生命の）vision（ヴィジョン）を持つてゐるといふことです。前者の本には、物理学者のファラデー、マックスウェル、アインシュタイン、安部公房も大好きなルイス・キャロル、数学者のポアンカレ、発明家のエジソン、ニコラ・テスラ、藝術家のレオナルド・ダ・ヴィンチ、政治家のチャーチル、軍人で戦車隊を率いたパットン、詩人のイェーツの名前が挙げられてゐます。国家の授ける教育で優等生であつた人間たちからは大きな変化は生まれませんが、これら低学歴か学歴皆無の天才たちからは時代を根底から揺るがす変化が生まれる。これらの人間のvisionは眼に観えるのみならず、そのvision（visionとはモデルである）記述と或る写真を見ると、ほとんど視覚が触覚を含んでゐて、二つは通じ合つてゐる。

文字が人工言語による可能性が高いといふ意味は、自然言語ならば、ある地域で使用されてゐた痕跡がある筈だからです。しかし、無いので、ヴォイニッチ写本またはヴォイニッチ手稿の

研究者や好事家たちは滅びた民族の言語であると論じる次第になつてゐる。

滅びたものが存在するまたは存在してゐたことを、現在に証明することは難しい。何か考古学的な、物質的な遺物が出土しなければ、これを滅びた民族の言語であるとは言ひ難い。

ここから先の論は、上の可能性をいふだけのことで、法螺吹き男爵の法螺話だと思つてお読み下さい。しかしどんな法螺話でも、何がしかの真実は含まれてゐるでせう。

さて、論ずる可能性があるとするれば唯一、自然言語でもなく人工言語でも無い第三の言語、即ち安部公房の考へた、チョムスキーの生成変形文法のやうな普遍文法に基づくクレオール語だといふ推論です、いや此れを仮説として立てて文字を読み解くといふ可能性はあるのではないかと私は思ひます。相当過激な革命運動をした男が、それもロシア帝政下のリトアニア人の貴族であるといふ出自に加へて、妻がブール代数の創始者の娘であるといふ婚姻は、何か二義的な位置にある人間が世の本末を転倒させるには、もしさうしようと思へば、十分な土壌であるやうに私には思はれる。それに職業が古書商であるといふことが加はる。古文書の真贋に詳しくつたこととせう。それも成功してアメリカのニューヨークに支店を出すほどになつてゐる。

冒頭に掲げた

- (1) 文字の部分
- (2) 植物
- (3) 女性たちの入浴
- (4) 円環図

(1) と (2) からの私の連想は、(1) の植物は薬草であらうといふ推測です。それも何故か女性ばかりの入浴の絵でありますから、女性の病気を治すための薬草による湯浴みである。今でも薬草療法はヨーロッパの民間療法として生きてゐます。

(3) の円環図は、円環といふ形から云つて、何かの原理に関係した図とせう。さうすると、治療の効果と関連してゐる。薬草の種類と効果が、円環図といふ原理図と結びついてゐる。

(4) の文字の部分は何を意味するかといふと、このやうに考へてくると、解釈の可能性が二つあつて、

- ①ひとつは、(1) から (3) に関することについての解説であるか、または
- ②もうひとつは、全くそれらと無関係な何か、絵図を隠れ蓑にして、別の主題について記述したものであるか、



このうちのいずれかではないだろうか。

さて、私の取り敢へず立てた仮説は、(1)の自然言語ではなく(2)の人工言語だといふ仮説です。といふことは、フランスの探偵小説、ガストン・ルルーの書いた古典的探偵小説の名作『黄色い部屋の謎』のトリックと同じく、死体の発見者が犯人であつたといふことも知れない。即ち、ヴォイニッチ自身が犯人にして名探偵であるといふ場合です。即ち、同文書巡る「手稿のカバーの中から発見された1665年ないし1666年8月19日の日付のあるマルチがキルヒャーにあてた書簡」も含めて一切合切をヴォイニッチの贋作であるといふ場合です。革命と贋作はどこで一脈通じてゐるやうに思はれるのですが、如何か。

共産党といふ党が常に例外なく歴史を捏造するやうに(何故なら共産党には、歴史を否定して無いものと考へる唯物論ですので、歴史といふものがないからですが)、個人の立場で革命を主張する人間もまた、時間との関係で、同じ理由で歴史を贋作するのではないでせうか。即ち、自分の人生の時間を無いものとして考へて、それ故に、0(ゼロ)から言語を発明しようとする。これはどこか、人造人間を絶えず製造しようとして来たヨーロッパの中世以来の歴史に通じてゐる。といふ事は、

人間とは何かといふ問いに対する答へを、宗教の位相から科学の位相に移(または写)して理詰めで答へようとする場合に、ヨーロッパの人間は人造人間を製造しようとする。

といふことになります。

しかし、それにしても、さうだとしても、一体何故わざわざ余人に読むこと不可能な文字で通称「ヴォイニッチ手稿」と呼ばれる写本を、以上の推理が正しいと仮定して、この場合は安部公房の世界らしく贋の写本、即ち存在の写本を書いたのでせうか？

さうだとすれば、確かに、この情熱は、安部公房の遺伝子生物学への情熱、チョムスキーの生成変形文法への情熱、それからクレオール語への情念に通じてゐる。

この連載の題としたRongo Rongoとはイースター島の失はれた言語ですが(といふよりも植民地主義のために其の尖兵となつたキリスト教の神父たちが書かれた文字板をほとんど全て破壊してしまつたので残つてゐないのですが一本当に酷いことをするものです。ペルーのインカ帝国も同じです)、私たち安部公房の読者は此の二つの語の繰り返しで直ぐに、これが呪文であると理解することができます。

Rongo Rongoとは、この当のRongoを呼び出すか、あるひはRongoを儀式的手段としてRongo以外の何かを呼び出すか、論理的に此の二つの解釈があり得ます。

RongoとRongoの間の隙間に言語または言葉が隠れて存在してゐる。文字ならばさうですし、

発声ならば吃りです。しかし、私たちは普通には吃らないので、同じ言葉を繰り返すことで吃りと同じことをしてゐる。Rongo Rongo、鶴亀鶴亀、クワバラクワバラといふわけです。ドイツ人なら、トイトイトイ。これが言語の起源です [註2]。

[註2]

『言語とは何か II：言語起源論』をご覧ください。言語の起源について論じました。

#### 4. ヴォイニッチ手稿の示す近代ヨーロッパの思想史上の分岐

さうであれば、ヴォイニッチ手稿にも繰り返しの言葉がある筈です。

マルクス主義の創始者のマルクスはユークリッド幾何学でものを考へてゐた。さうして此れがマルクスとマルクス主義の論理の限界を示してゐるわけです。しかし此れに対して、実は非ユークリッド幾何学を求めたマルクス主義者がやはりゐたといふことではないのかと、このブール代数の創始者の娘が革命に専心したといふことを考へると考へることができます。

これはこれで、哲学の超越論と共産主義の分岐がカントにあるやうに、同様にしてカントでの分岐と同じく、共産主義にあるユークリッド幾何学と超越論にある非ユークリッド幾何学の分岐を、ジョージ・ブールが示してゐる。論理学では既述の通りフレーゲです。これが思想史上の、また言語論理 (logos：ロゴス) 上の、ヨーロッパの近代史だといふことになる。

しかし、マルクスの思考範囲はユークリッド幾何学の領域に終始してゐるのに対して、後者はさうではないので、もはやマルクス主義者ではない。別の名前が必要でせう。超越論による革命といふことになれば、これは「存在の革命」と埴谷雄高が言つたものになるので、安部公房に益々近くなる。

しかし、埴谷雄高の『不合理ゆえに我信ず』を読みますと、埴谷雄高は超越論者ではありません。やはり、若年の折にマルクス主義に惹かれたといふことから生まれた自己に対する否定的な感情、即ち感情が災いして言語の持つ言語固有の再帰性を否定するといふ苦しみはどうしても癒し難いのです。この苦しみの感情を抱きながら、他方理詰め考へて、『死霊』を一生に亘つて書き続けた。この論理と感情を、埴谷雄高は、私とは何かといふ問いに、次の三語で答へた。

「薔薇、屈辱、自同律——つづめて云えば、俺はこれだけ」。

埴谷雄高は、この三語の「これだけ」といふ否定に自分の肉体と生理を賭けて生きた。といふことです。それ故に、自同律は常に不快である。



薔薇は美であり、一個の、埴谷雄高の文体 (style) の示す通りの入籠構造の宇宙でありませう、屈辱とは上記の「感情が災いして言語の持つ言語固有の再帰性を否定するといふ苦しみ」、自同律は、自己再帰性の否定を自己、即ち自分自身にではなく、律といふ（自分自身とは分離した）絶対的な規則として不快のままに従ふ律の自己再帰性、即ち自己否定的な契機を内蔵した自動機械、オートマトン (automaton)、自己否定的であるが故に他者を求める自動システム（自律的体系）です。

言ひ換へると、埴谷雄高の存在概念は絶対概念であるのに対して、安部公房の存在概念は相対概念であるといふことです。「奉天の窓」の数の多数あるあことを〔註3〕、そして安部公房スタジオの演技論の中核概念「ニュートラル」を〔註4〕思ひ出して下さい。

〔註3〕

「奉天の窓」については『安部公房の奉天の窓の暗号を解読する～安部公房の数学的能力について～』（もぐら通信第31号および第32号）をお読み下さい。

〔註4〕

安部公房スタジオの演技論の中核概念「ニュートラル」については『安部公房の奉天の窓の暗号を解読する～安部公房の数学的能力について～』（もぐら通信第31号および第32号）および『魔法のチョーク』論（もぐら通信第52号）、それから初期安部公房論『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について（4）』（もぐら通信第59号）をご覧下さい。

## 5. AI (人工知能) と終末・方舟思想

さて、話を元に戻します。そして、かう考へて来ると、此の時同じ時代にあつて既にマルクスは時代遅れであり、ショーペンハウアーやニーチェやハイデッガーやらの超越論やフレーゲの論理学を考へ、また数学ではtopologyやブール代数でものを考へる未来の別系譜の超越論者としての、ローマ帝国と政治的に手を結んで組織化されたローマ法王庁とは全く異なつた、原始キリスト教徒のやうな人間たちが、ヨーロッパにゐたといふことになるのです。

かうして、ヴォイニッチ手稿は、そのやうな来歴になる女性の夫の手になるものだとしたら、この暗号化された文字列の生まれたことも解るのです。何故なら、これはマルクス主義の中での反マルクス主義に、即ち、ロシア革命といふロシア民族の名前の元に偽装されたて起こされたユダヤ人による革命に反対する反ユダヤ教の反対革命にほかならないからです。この場合、妻のエーテルはアイルランド人ですから、大地母神崇拜といふ私たちの心事にも通じてみて誠に興味ふかい。さうであれば、マルクス主義者たちに読まれてはならず、暗号化された文字列で反対革命といふ革命を主張する文章を起稿しなければならなかつた。即ち、超越論による革命です。さうなると、話はいよいよ安部公房に近づいて来る。となると、これらの絵はみな隠れ蓑であるといふことになります。しかし、

ヴォイニッチは一体どういふ現実の社会の中で（相当に過激な社会ですが）、どのやうなあるべき理想の社会を思ひ描いて（超越論者の思ひ描く理想の社会、例へば安部公房の思ひ描く四極国體論）、この手稿を贋作したものか。

もつと言へば、ブール代数は今のコンピュータの基礎理論ですから、AIもまた其の延長にある以上、ヨーロッパの人間はまたぞろAIを革命的な発明だなどと寝言をいふのではないかといふことですし、実際にさうです。それをsingularity（シンギュラリティ）と言つてゐる。

「岩を情報保存のためのメモリーにする場合であれ、情報処理のためのプロセッサーにする場合であれ、いずれにせよ、岩のエントロピーを縮減するには、熱力学第二法則により、外部から低エントロピーのエネルギーを入れ、それを高エントロピーの熱として外部に排出しなければならない。宇宙に存在するエネルギーの多くは、そのために使えるほどエントロピーが小さいエネルギーではない。資源と環境という二つの制約要因のおかげで、宇宙全体がコンピューターとなり、覚醒するといったことは、熱力学的に不可能なのである。

宇宙の覚醒という観念は科学的というよりも宗教的なテーマだ。人間の精神が神の水準にまで高まって遍在化し、その結果宇宙が覚醒するという思想はヘーゲル[78]にも見られるが、その思想をさらに遡るなら、キリスト教の終末思想に辿り着く。

私たちが宇宙における物質とエネルギーを知性で満たすと、宇宙は「覚醒」し、意識を持ち、崇高なまでに知的になるだろう。それは、私がそれ以上は想像できないほど神に近づく時なのだ。[79]

カーツワイルがこういうのを聞くと、やはり彼のシンギュラリティ論はカルト的だと感じてしまう。予言者カーツワイルの信奉者たちは「シンギュラリタリアン」と呼ばれているが、これは奇妙な呼称である。シンギュラリティの本来の定義からすれば、「頭の中が破綻した人」というふうに聞こえる（実際に、世間ではそのように思われているのだが）。私は、情報技術の指数関数的進化の継続や、マインド・アップロードや、ポスト・ヒューマンの宇宙への拡散が将来実現される可能性を否定はしないが、カーツワイルとともに「イッヒ・ビン・アイン・シンギュラリタリアン[80]（私はシンギュラリタリアンだ）」と宣言するつもりはない。

中長期的に私たちが誠に注意すべきことは、カーツワイルといふ著者が、ここでは引用しませんでした。Wikipediaにあるやうに、Googleの社員であるといふことです。

（『私の本棚：永井俊哉氏書評：レイ・カーツワイル著『シンギュラリティは近い』（もぐら通信第86号）より）

この引用を見ると、また終末思想と方舟思想をヒステリックに語つてゐます。これもまた21世紀のマルクス主義なのです。但し、欧米の人間にとつては、といふ限定辞付きで。即ち、AI



がマルクス主義なのではなく、AIとは何かといふ問いに何を以つて答へるか、AIをどのやうに考へるかといふことが、彼我の違ひである。その答へが何千年も性懲りなく終末思想と方舟思想であるならば、それはまた19世紀20世紀のマルクス主義の二の舞であるといふことが、私の言ひたいことです。即ち、現在ただ今中国共産党の支配する大陸の地で起きてゐるやうに、AIで監視をして、人々の時間を個人的な細部に至るまで支配しようといふヘーゲル・マルクスと同じ覇権主義・帝国主義に利用される/されてゐるし、全地球的にさうなつてしまふといふことなのです。今日本でも同じことが起きつつある。

この終末思想と方舟思想はマルクス主義の専売特許ではない。元々はキリスト教の思想です。かうして見ると、キリスト教もまた、ヘーゲルの罪の深さを考へると（何故ならヘーゲルの論理からキリスト教を容易に切り捨ててマルクス主義が生まれたから）、マルクス主義同様にまた罪深い。キリスト教と中国共産党が、後者の司教任命を前者が追認するといふことによつて手を握るといふことは、結局歴史は、今度はヨーロッパではなく支那（China：シナ）といふアジアの大陸の地で繰り返してゐるといふことになります。『2084』といふ小説が生まれることになるのか。

### 6. 安部公房流の「透視図法」で時代を読む

しかしながら、私たちは日本列島の上で、AIを超越論（汎神論的存在論）の中で活かすといふことになるでせう。20世紀に工場のロボットに”百恵ちゃん”と名付けて一緒に仕事をしたやうに。もしAIを一神教topologyによつてではなく、汎神論的存在論のtopology、即ち存在の三階層の、高天原topologyによつて活かすことができれば、これはマルクス主義やキリスト教のtopologyによる一党独裁中央集権型のnetwork topologyによつて生まれる応用技術の展開ではなく、広く世の人々に役立つものになるでせう。即ち、貧富の差を生むことはなく、逆に其の解決へと向かひ、向かふどころではなく富を産み出すといふことです。

何だか、一時代の激変ーヴォイニッチ手稿ー暗号ー革命ーブール代数ーユークリッド幾何学ーマルクス主義ー超越論ーキリスト教ー終末論ー方舟思想ーAIー共産主義（ファシズム：全体主義）ー非ユークリッド幾何学ー汎神論的存在論ー日本列島ー私たち（日本人）ーといふ連鎖が出来ました。

この連鎖をtopologyの、安部公房流の「透視図法」または「棒になつた男」図法 [註5] で三題話にまとめるとどうなるか。

- (1) 暗号（文字、数字、記号）：文明の問題
- (2) 時代の割れ目（時代の転換点）：topological turning point
- (3) 凸凹（地政学か海政学か）：陰陽（存在論）の問題

この（暗号、時代転換、凸凹）の三つで上の連鎖全てを含むのではないでせうか。

この三つの（１）から（３）の「：」の記号の右左を等価交換すると、

- （１）文明の問題
- （２）topological turning point（位相幾何学的転換点）
- （３）陰陽（存在論）の問題

この三つが21世紀の私たちの問題だといふことになります。

是非とも、この三題法螺話を吟味願ひたい。

[註5]

安部公房流の「透視図法」または「棒になつた男」図法については、『[贗月報30] 三浦雅士『安部公房の座標』：「安部公房の座標」から何が解るか』（もぐら通信第94号）の「3.1.1 安部公房の具体的な作品と topology の関係を理解する」をご覧ください。

そして最後に安部公房の次の三題話も、読者としては忘れずに。

1980年代から21世紀の今に至るまで続いてゐる人間の愚昧の原因三題：

- 「（１）シミュレーションゲーム(現実と仮想現実の混同)
- （２）現実と仮想現実の関係に存在する記号の混同(実は、言葉の意味を考へぬ無知・無能)
- （３）閉所・トーチカ願望(他人攻撃願望:排除型・クルクルパー論理の外部否定型の理屈)

といふ此の三つが社会現象として現れてゐるといふことに。なります。」

（『Mole Hole Letter (12) LGBTとは何か（１）～安部公房の世界から眺めると～』（もぐら通信第91号）の「4. 安部公房の挙げた現代の3つの特徴」より）



[ 贗月報 3 0 ] 三浦雅士 『安部公房の座標』

～ 「安部公房の座標」 から何が解るか～

岩田英哉

目次

1. 安部公房論の分類
2. 安部公房の座標軸
3. 『安部公房の座標』 は三つの章からなる
  - 3.1 安部公房の座標
    - 3.1.1 安部公房の具体的な作品と topology の関係を理解する
    - 3.1.2 時間と空間の超越論：中今と磐座
    - 3.1.3 安部公房の座標軸 1：リルケとマルクス
    - 3.1.4 安部公房の座標軸 2：マルクスとフロイトを結びつけたフランクフルト学派
      - (1) マルクス主義理論の未だ破綻が清算されてゐない弊害
      - (2) マルクスの価値論の崩壊
    - 3.1.5 安部公房の座標軸 3：ニーチェとマルクス
    - 3.1.6 安部公房の思想とマルクスの『資本論』：本物・贗物論
  - 3.2 超越論とマルクス主義
    - 3.2.1 安部公房はどのやうに超越論とマルクス主義を統合したか
    - 3.2.2 安部公房の愛とは何か
  - 3.3 詩と散文と第三の沈黙・余白の関係：エピグラフの詩を最後から二番目に
  - 3.4 《……………》：日本語はクレオール語である

\*\*\*

1. 安部公房論の分類

20世紀から21世紀に書かれた安部公房論の分類を示して、本題に入ります。

20世紀から21世紀の今までの安部公房論を眺めて整理すると、次のものがあります。これらの論は皆何々視点論と読むと、私の真意がお解り戴けるでせう。

- (1) 前衛論
- (2) 作品論
- (3) 主題論
- (4) 人物論
- (5) 範疇論
- (6) 哲学論
- (7) 文学史論
- (8) 文明論

- (9) 師弟論
- (10) 海外評価論
- (11) 評伝論
- (12) 言語論
- (14) Topology論
- (13) 上記(1)から(12)を部分的に含む個別具体論

これは種類を挙げただけで、厳密には分類ではありませんが、しかし、これ以上の分類は返つて実用を妨げると考へますので、上のままに示します。

この、三浦雅士さんといふ方の『安部公房の座標』は上記(8)の文明論、文明視点論の安部公房論だといふことになります。

安部公房文学史の上での文明論としての安部公房論は、この論者の此の論が初めてでせう。そして、二つ目の文明論は、私の『安部公房とチョムスキー』といふことになりませう。この二つの論を線で結んで、過去に線を伸ばすと、やはり哲学徒、高野斗志美さんの最初の安部公房論が其の出発点になります。即ち、文明論としての安部公房論は、安部公房文学の性格からして、言葉と文字の世界では哲学論を骨子として含むといふことになるのです。時系列でこれら三つの論を並べると次の通りです。

- (1) 1971年：高野斗志美『安部公房論』（哲学論）
- (2) 2009年：三浦雅士『安部公房の座標』（文明論）
- (3) 2018年：私の『安部公房とチョムスキー』（言語論）

## 2。安部公房の座標軸

『安部公房の変形能力(1)』（もぐら通信第3号）にて私が示した、小説家としての安部公房（個人）視点での分類は、安部公房文学は次の三つの軸からなる座標の上にあるのでした。

- (1) ポー
- (2) リルケ
- (3) ニーチェ

「周辺飛行3」を読んだ結論を云へば[註1]、安部公房の云ふ仮説設定の文学の仮説とは超越論のことでした。超越論とは汎神論的存在論であり、topologyでありますから、上の三つの座標軸は、安部公房の理解に従ひ、次のやうに云うことができます。

[註1]

「『周辺飛行』論(6)（もぐら通信第93号）の「3. 『周辺飛行』について(3)：『案内人—周辺飛行3』」より引用します：



「まあ、蒲の穂が仁木順平、鶏肉料理の粉末が砂の穴の砂といふことで考へますと、『砂の女』の世界になります。しかし、この「周辺飛行3」では、主人公は上記の理由で脱出することはありません。それ故に、最後のところで、

「給仕がいきなりぼくの肩を叩いて、かういふのです。「そのとおり、まだ分からないの、始めなけりゃ終わりも無しってと……」

何故給仕がこんな科白を主人公にいふのかと言ひますと、その前段で主人公は、(略)「そして、[引用者註：レストランの中の]その上客たちをじっと見守るように、壁ぞいに並んでいる、黒い大きな人影」を見て、「客でも、案内人でも、給仕でもなく、ここでの本当の主演は、じつは彼等なのかもしれないという予感がした」からなのです。こう思つて内心起きた「ぼくの狼狽に、案内人がすばやく搬(はこ)んで来るのは、きっと彼等にちがいない。」といふ主人公の内心の狼狽の様子を察知して、案内人は次のやうな、超越論的な科白を口にする：

「そのとおり、まだ分からないの、始めなけりゃ終わりも無しってこと……」

この文脈で読みますと、この影のやうな大男達は、超越論的な「彫像」のやうな人間達であつて、「その彫像は、あきらかに生きている。」(略)かういふ「彫像」と云ふ語彙の選択に若き日の安部公房が依然として生きてゐるのです。

恐らくは、この影のやうな静かに物言はぬ彫像の大男たちが、『第四間氷期』の最後に勝見博士を殺しにやつて来る暗殺者に当たるのでせう。「ここでの本当の主演は、実は彼等なのかもしれないという予感」、この主人公の予感は、勝見博士が小説の中で予感する予感、即ち「既にして」(超越論的時間)起こつてしまつてゐる未来の事実が現在の時間の単位と等価交換されて現在只今此処に起こるといふ「現在である未来」に関する予感なのであり、これらの男達はいつてみれば短編小説『使者』の冒頭の次の詩に歌はれてゐる、この小説の主人公奈良順平が定時定刻に始まる筈の講演の時刻までの間に、謂はば劇場の幕の開く前に現れた火星人と超越論的な時間といふ余白と沈黙の中で会話して想到した「箱の論理」と同じ論理による、作品のエピグラフでもある次の詩の中の32人の火星人の使者達であるのです。安部公房の仮説設定[註3]では、火星といふ惑星では、時間に始まりも終わりもないのです。即ち、

火星といふ惑星は超越論の惑星といふ仮説設定なのです。

(略) 」

かうして考へて参りますと、

安部公房の唱へる仮説設定の文学の仮説とは、超越論(汎神論的存在論)に他ならない。

といふ事がよく判ります。」

- (1) ポー (仮説設定の文学：超越論：汎神論的存在論：topology) [註2]
- (2) リルケ (詩文：超越論：汎神論的存在論：topology) [註3]
- (3) ニーチェ (哲学：超越論：汎神論的存在論：topology) [註3]

## [註2]

仮説設定の文学について『安部公房の小説論総覧 安部公房全集より』（もぐら通信第61号）より引用する：

## 「II 仮説設定の文学とSF文学論

自分の仮説設定の文学の淵源をポーに求めている。

1. 私の文学を語る:全集第22巻、42ページ上段 子供のころから文章を書くのが好きだったという発言がある。小学生のころ作り話をして先生に盗作の疑いをかけられて叱られたこと。そうして、中学二年頃に、ポーに熱中したことが発言されている。このインタビューは、この前後も非常に重要な安部公房の発言を含んでいる。

2. 私の創作ノート:全集20巻、162ページ

3. 『仮説の文学』:全集第15巻、237ページ

4. 『仮説・冬眠型結晶模様』:全集第7巻、77ページ

5. 『空想科学小説について』:全集第15巻、237ページ

6. 『空想科学小説の型』:全集第8巻、252ページ

7. 『空想的リアリズム』:全集第7巻、50ページ 8. 『ぼくのSF観』:全集17巻、288ページ 9. 『SFの流行について』:全集第16巻、376ページ」

## [註3]

「僕が最初に実存哲学なるものを発見したのは、消えるけゴールやヤスパースやハイデッガーに於いてよりもむしろ、リルケとニーチェに於いてだった。しかし是は勿論実存主義とは名付け得ないかもしれない。とにかく僕は其處から出発した。そして四年間……僕の帰結は、不思議な事に、現代の実存哲学とは一寸異つた実存哲学だった。僕の哲学(?)を無理に名づければ新象徴主義哲学(存在象徴主義)とでも言はうか、やはりオントロジーの上に立つ一種の実践主義だった。存在象徴の創造的解釈、それが僕の意志する所だ。」(『中壘肇宛書簡第10信』全集第1巻、270ページ上段)

結局、安部公房の文学とは、ポーであれ、リルケであれ、ニーチェであれ、三つの座標軸は三つとも、超越論であるといふことなのです。そして、汎神論的存在論である、また数学的にはtopology(位相幾何学)である。といふことなのです。

従ひ、安部公房個人に焦点を当てると、マルクスは安部公房の座標にはなり得ない。何故なら、マルクスの世界はユークリッド幾何学の世界であるのに対して[註4]、安部公房の世界はtopology、即ち非ユークリッド幾何学の世界、即ち哲学でいふ超越論または汎神論的存在論の世界であるからです。これについては『安部公房とチョムスキー』の連載(もぐら通信第73号以降)にてお話して来た通りです。即ち、近代ヨーロッパの用語を使つて言へば、安部公房はマルクス主義者では全くなく、正反対の此れの否定者たる超越論者である。これは諸処既述の通り。

## [註4]

『安部公房とチョムスキー(11)』(もぐら通信第93号)をお読みください。『資本論』の原文からマルクスの思考の限界を明確にしました。



アインシュタインの相対性理論がニュートンの古典力学を其の一部として含んで最新の理論の全体であるやうに、安部公房の超越論に限らず、そもそも超越論とは、マルクスの理解し継承したユークリッド幾何学の上に成り立つアダム・スミスの古典的な価値論を其の一部として含んで最新の理論の「新価値論とも云ふべき体系」〔註5〕といふ全体としてあるのです。それ故に、マルクス主義には超越論は理解できず、超越論はマルクス主義を理解することができるのです。純然たる論理の問題として、上位の次元は下位の次元を理解することができるが、しかし、下位の次元は上位の次元を理解することができない。

〔註5〕

「新価値論とも云ふべき体系」といふ言葉は哲学談義を親しく交はした友、中埜肇宛書簡に「新価値論とも云ふべき体系、若しくは方法に思考を集中して居ます。」とある（『中埜肇宛書簡 第1信』全集第1巻、68ページ下段）。この「新価値論とも云ふべき体系」が22歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』です（全集第1巻、104ページ）。

しかし、文明論の視点で安部公房を位置づけようとする、20世紀に猖獗を極めたマルクス主義を入れることになります。何故ならば此れは世界的な規模での共産主義といふ革命運動であつたからです。さうすると、この論者による文明論の視点での安部公房の位置はどうかと云ふと、次の三つの座標軸の名前を挙げてゐます。

- (1) リルケ
- (2) ニーチェ
- (3) ○○

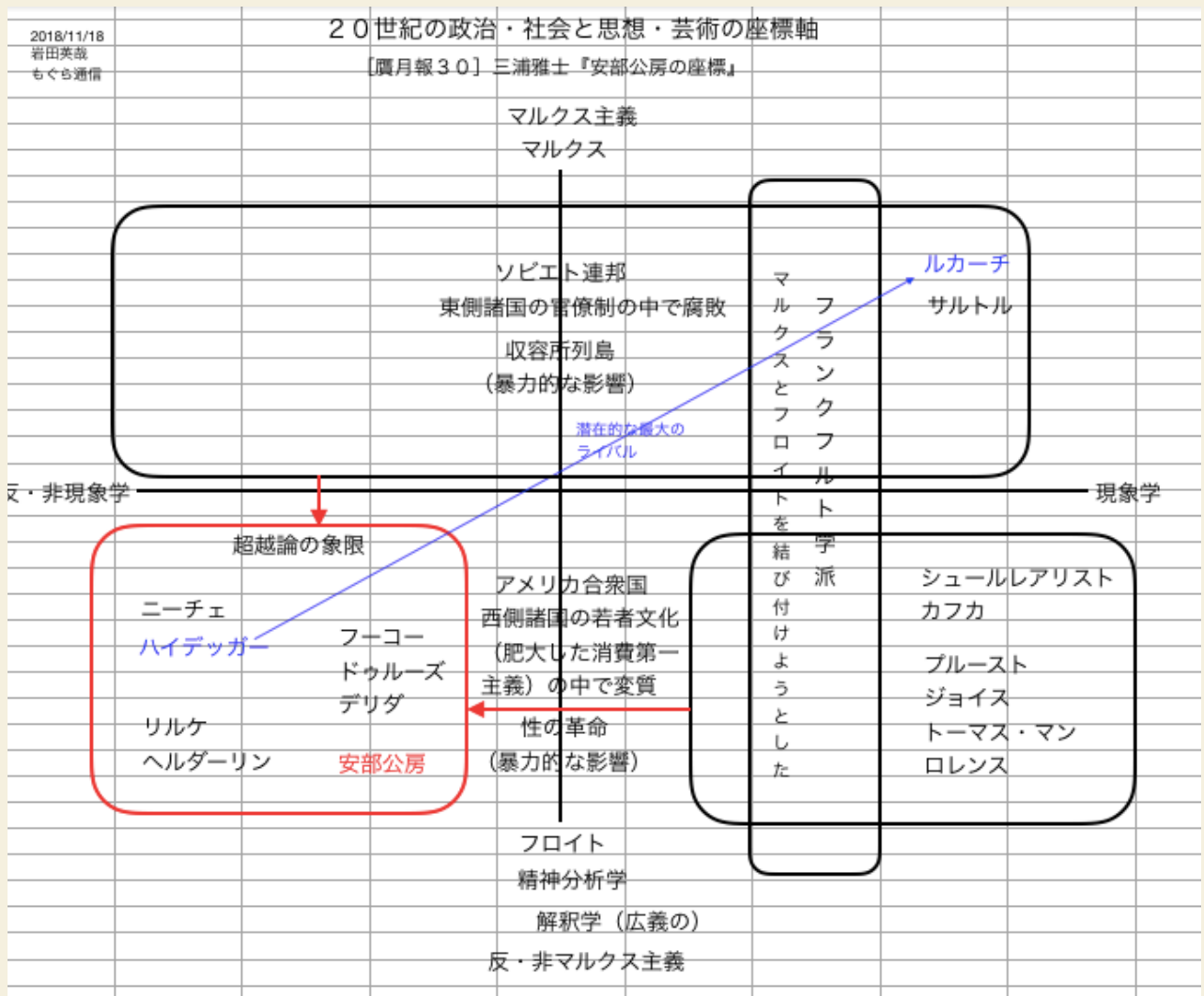
リルケとニーチェに関する論者の理解は私と同じく、この用語こそ使つてをりませんが、そのリルケ理解の正確なことを知りますと、それぞれ超越論の詩人であり哲学者であるといふ理解で、私と同じです。

さて、論者が論ずるのは、(3)にどのやうな名前が来るのかと云ふと、この三つ目の名前を確定的に挙げて立体的な三次元の座標を構成するのではなく、(3)の位置に来る名前に論者の考察に応じて複数の名前があつて、それらの内の次の二つの名前を入れることになるのです。ここにヨーロッパ文明内にあつて始まりながら、それ以外の文明圏に影響を及ぼした次の二つの名前です。

マルクス  
フロイト

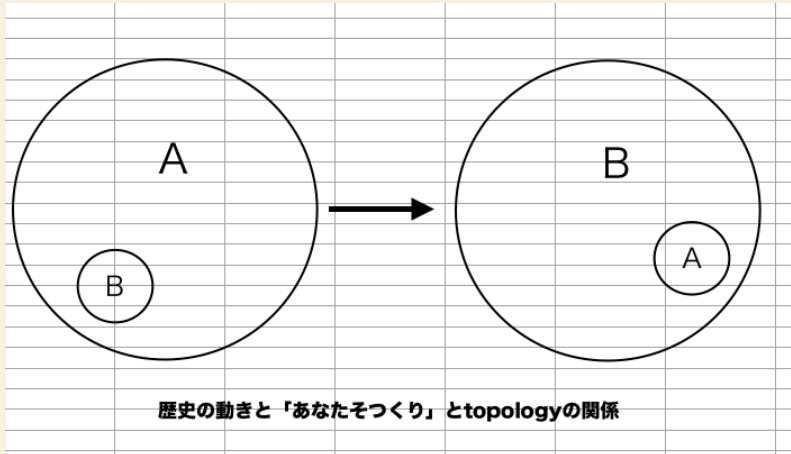
この筆者のいふところに従ひ、縦軸にマルクス主義、横軸に現象学を置いて整理すると、次のX軸とY軸からなる「20世紀の政治・社会と思想・芸術の座標軸」と名付けることの

できる次の二次元の座標を得ることができます。これは、マルクス主義のみならず、その後継たるフランクフルト学派の位置も明らかにしてあるのみならず、それに加えて21世紀の現在の中国共産党といふマルクス主義国家の位置もまた示す優れた分類です。ソヴィエト連邦の位置を中国共産党または中華人民共和国に置き換えれば良い。さうすると、これを「21世紀の政治・社会と思想・芸術の座標軸」として活用し、欧米の思潮の流行を理解する事ができます。フランクフルト学派—Globalismといふ接続もまた、後者は経済の領域の話ではあつても、此の図の上で理解する事ができます。この場合は、「フランクフルト学派」を「金融資本主義」に置き換へて、この図を眺めると良いのです。お金 (money) には、俗に言はれるやうに色は付いてゐない、実に文字通り現金 (cash) なことに右も左もないのです。ダウンロードのURLは：<https://www.scribd.com/document/393858148/20世紀の政治-社会と思想-芸術の座標軸>



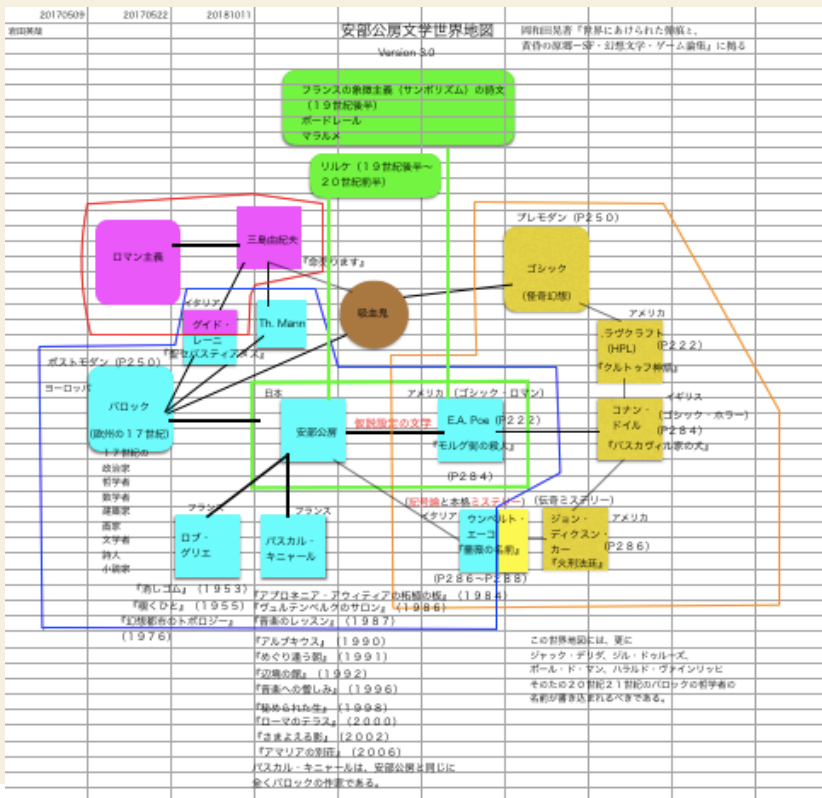
この図の二つの赤い矢印の意味は、安部公房は、この「超越論の象限」で二つの象限を一つに纏 (まと) めよう、それらを一部として統合しようとしたといふことを示してゐます。これは、言語の観点から時代の転換を考察すれば、次の図になることですが、この図を再掲しますので、改めて此の図の意味を、言葉の意義 (sense : 内包 : intensive) と意味 (meaning : 外延 : extensive) の問題として吟味してもらひたい。



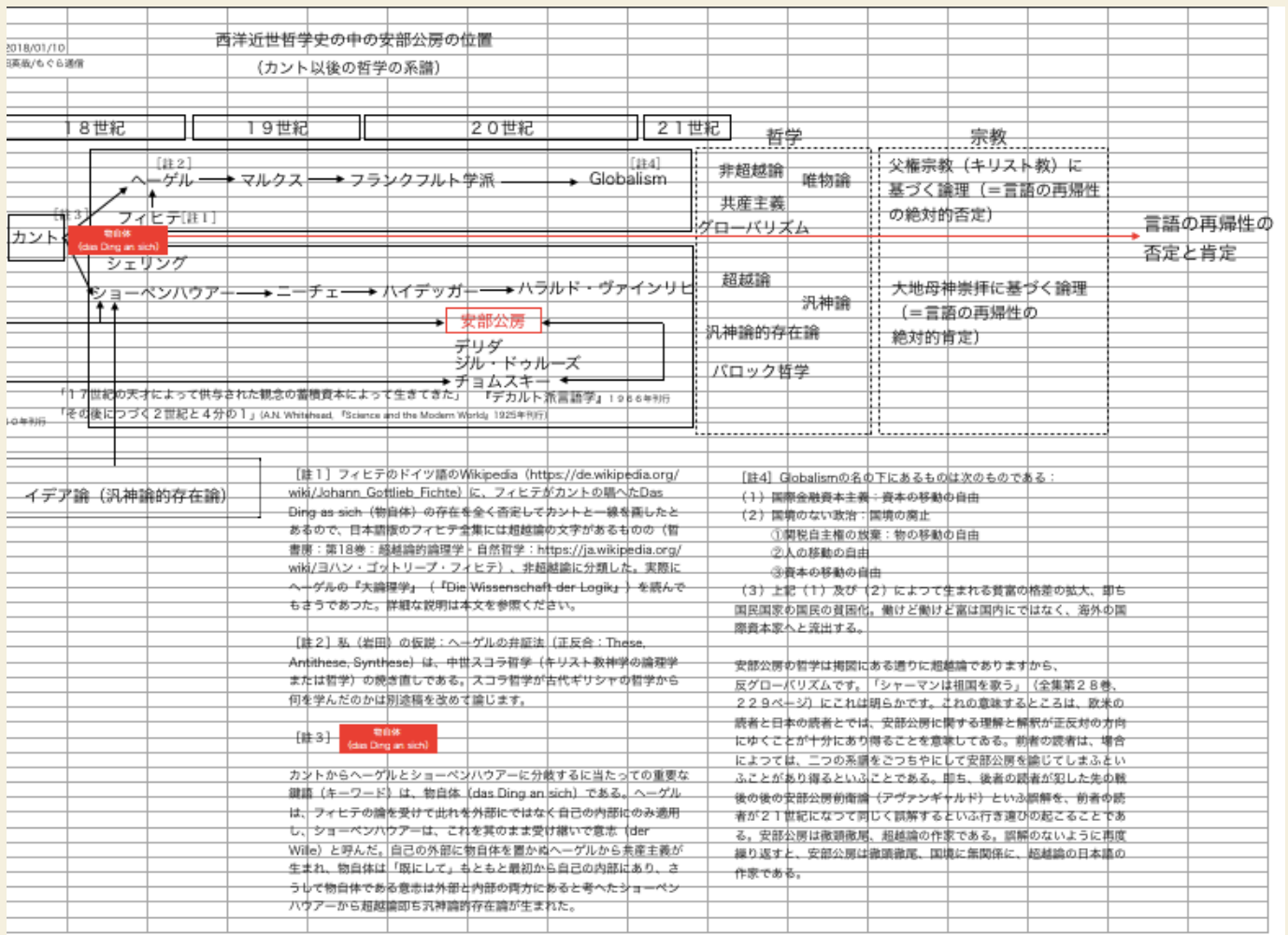


「特殊性の中にほうがんされない普遍性はない。同時に、普遍性につらぬかれぬ特殊は存在しない」とは、内部と外部を交換し、その境界域の両義性に身を没して自己を生かす topologyの考へ方です。これは、単なる言葉の意味と位相幾何学的な問題だけではなく、歴史が其のやうに展開し、人間に働きかけるものだからです。歴史の根本的な変化は、言語 (logos)の観点からみると、いつも次のやうに動きます。安部公房は当然このロゴスの働きを知つてゐたのです。宇宙は単純にできてゐる。小学生の安部公房の知つてゐた「奉天の窓」です。Aをあなただと思つて見ませう。すると、→は、次の次元へのあなたの失踪を意味するといふことになります。Bをあなただと思つてみませう、「あなたそっくり」の、しかし、異次元での、また別の人生がある。といふことになります。あなたは何処にゐるのか？」（『安部公房の札幌文学への批判』（もぐら通信第62号）より）

「20世紀の政治・社会と思想・芸術の座標軸」は題名通りの目的を示す図ですが、今度は文学の、それも世界文学の視点から同じ座標軸を眺めるとどうなるかといふことを示したのが『安部公房文学世界地図』です。この二つを併せて眺めると、安部公房の立つ世界的な位置が複眼的によく解ります。ダウンロードのURLは：<https://www.scribd.com/document/394363280/安部公房文学世界地図-v3>

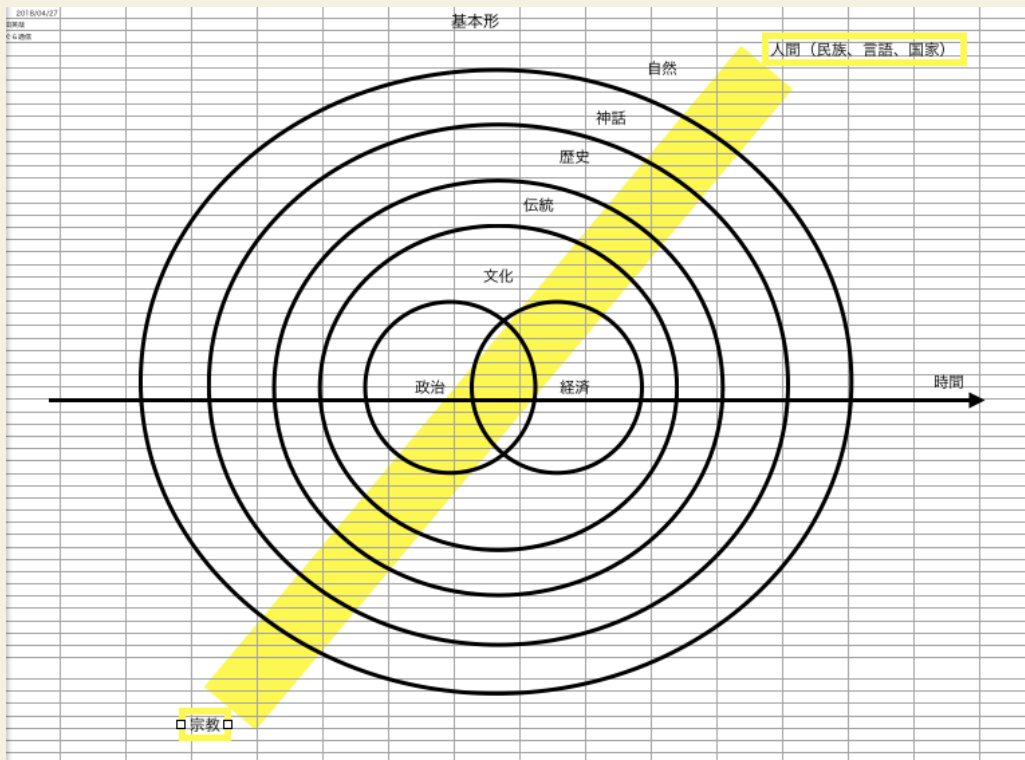


更に、これら二枚の地図に加えて、『安部公房とチョムスキー（1）』（もぐら通信第73号）から次のカントでの哲学史上の分岐図を観ると、歴史といふ時間の中での近代ヨーロッパの文学・哲学・言語学の思想史上での安部公房の位置が、そして一層良く、理解できるでせう。この図のダウンロードのURLは：<https://www.scribd.com/document/368975265/西洋近世哲学史の中の安部公房の位置>



(以下、このページは余白)

もし更に此れに政治と経済を入れて、文学・哲学・言語学・政治・経済の全体を考へる場合には「政治と経済の内部から外部の自然まで」の円盤図を思考対象全体の根拠に置いて考へると、満遍なく、また遺漏なく思考することができます。ダウンロードのURLは：<https://www.scribd.com/document/392167695/政治と経済の内部から外部の自然まで>



### 3. 『安部公房の座標』は三つの章からなる

以上の整理を踏まへて、以下論者の論を引用をしながら私の感想を付すといふ形式で此の論を続けたい。

この論文は次の三つの章からなつてゐる。各章に見出しはついてみませんが、私が付けて整理をします。

- (1) 安部公房の座標
- (2) 安部公房の思想とマルクスの『資本論』：本物・贋物論
- (3) 超越論とマルクス主義

以下、各章について論じます。

#### 3.1 安部公房の座標

この論の書かれたのは2009年ですから既に20世紀は終はつてゐますが、しかし「安部公房はその全軌跡において二十世紀を代表する表現者と言っていいが、代表しているそ



の二十世紀がいまなお終わっていないということである。いまなお決着がついていないということだ。」としてゐます。そして、その理由を次のやうにいふのです。実は此れが此の論の冒頭の最初の段落なのです。

「『安部公房全集』刊行はひとつの事件である。頭脳の現在を強烈に刺激する事件だ。にもかかわらず読書界一般の反応が鈍いのは、ひとつは頭脳の現在がただちに対応するには刺激が強すぎるためであり、いまひとつはそれを受け入れるための図式がなお明確に描かれていないためであると思われる。」

かう言つて論ずる此の最初の章の骨子が、上掲の「20世紀の政治・社会と思想・芸術の座標軸」図です。二章も三章も、この図の上で論じられてゐる。かうしてみれば、論者は当然のことながら、用意周到に準備をして、この安部公房論を示したのです。

「『安部公房全集』刊行はひとつの事件である。頭脳の現在を強烈に刺激する事件だ。」とは其の通りです。「にもかかわらず読書界一般の反応が鈍い」理由として次の二つが挙げられてゐる。

- (1) 頭脳の現在がただちに対応するには刺激が強すぎるため
- (2) それを受け入れるための図式がなお明確に描かれていないため

### 3.1.1 安部公房の具体的な作品とtopologyの関係を理解する

(1)の「刺激が強すぎる」といふ当の刺激を「受け入れるための図式」は、「2. 安部公房の座標軸」で、この論者の図式を含み計4枚の図を示すことによつて示されたと私は思ひますが、あなたに於かれては如何。これらの4枚は形式こそ統一されてをりませんが、それぞれの視点から他の図を観て、さうして行きつ戻りつすれば、目的の領域を特定できて、あなたの理解は捗（はかど）る筈です。

これらの紙がトレース紙の上に描かれてみると想像して下さい。さうして、その幾枚も重複した上から眺め（勿論どの紙をどの順序で重ねるかはあなたの目的次第です）、それを透視してあなたの視線の集中した所にあなたの解答がある。これがtopologyのものの考へ方です。

安部公房に『透視図法』といふ小説がある。三つの短編からなる小説の総称ですが、それぞれの題名は次の通りです。

- (1) 現実
- (2) 盗み
- (3) 泣く女

これら三つの話の骨子を三枚のトレース紙に描いて重ね、あなたが上から観て、何か色の特別に濃い所、例へば、線分が集中してゐる所とか、円が重なつてゐて格別に濃厚であるとか、そこにこれら三つの短編の本質（エッセンス）があるといふことなのです。即ち、本質とは関係の総体（函数関係）であるといふことです。本質といふ言葉に意味はなく、何か実体がある訳ではない。あなたは意味の運搬人ではない。これがtopologyの思考論理であり、本質に至るための手続であり手順であり、このまま安部公房の思考方法です。

『透視図法』の例で行きますと、まあ、落語の例でもあるやうに、あなたが三題話を自分で拵へてみると云ふことなのです。これが「透視図法」と云ふ名前の総称の意味です。

また同様の話に、これは戯曲ですが、『棒になった男』と云ふ三つの戯曲からなる戯曲があります。これも同様に三つの章は次のやうになつてゐる。

- (1) 鞆
- (2) 時の崖
- (3) 棒になった男

これら三つの章に共通する何かを、あなたは発見して名前を付けると、あなたは此の戯曲の本質に至る。本質といふ言葉に意味はなく、何か実体がある訳ではない。あなたは意味の運搬人ではない。即ち、あなたはこれら三つの関係の総体（函数関係）を知ることができて、topologyといふ安部公房の大好きな数学の本質に至る。数学もまた言語（logos：ロゴス）に拠るのですから、数字で表すか文字で表すかは関係がない。論理の問題としては同じことです。また、作品の属する範疇にも無関係に、越境的に、範疇横断的に、あなたのなすべきこと、なすことのできることは、ここでも、

『透視図法』や『棒になった男』の例で行きますと、また落語の例でもあるやうに、あなたが三題話を自分で拵へてみる

と云ふことなのです。

あなたが層を重ねた三題三層三枚の本質を層横断的に一筆で描くことができたなら、また反対に層を重ねた三枚の紙を一筆で描くことができて本質を一筆書きで抽出して表すことができたなら、またこれらを言葉の意味の世界、即ち概念の世界で層を重ねた存在の三階層を一筆で描くことができたなら、さう、階層と階層の間を三段の階段で接続しながらこれができたら、あなたは安部公房と同じ構造の作品を創造した事になります。

この3といふ数字からなる話をあなたが作ることができたならば、あなたは安部公房と同じく超越論を理解したことになるのです。即ち、昨日と明日と今日という一日づつのは、

一日といふ単位の場で交換することができる。単位に時間は存在しない。

今日は昨日の明日、今日は明日の昨日  
 昨日という今日は明日という今日の昨日  
 明日という今日は昨日という今日の明日

この三行を頭から読んで理解したら、あなたは超越論を理解したことになります。さうして、「既にして」（超越論的時間）時間とは何か？といふ問いに「いつの間にか」（超越論的時間）「どこからともなく」（超越論的空間）正面から答へたことになり、答へを得たことになるのです。縄文紀元に生きる日本人が答へた答へです。同じ論理であれば、21世紀の日本人に理解できない筈がない。昔どころか、大昔どころか、太古の縄文人と呼ばれる縄文紀元の日本人が時間とは何かといふ問いに答へた答が、これです。

昨日・今日・明日といふ上記三つの時間の単位を、縄文紀元の日本人は、三枚に重ねて「透視図法」でtopologicalに、その都度その単位化された時間に存在する本質、即ち関係の総体、即ち函数関係を観たといふことなのです。縄文紀元の日本人も「明日の新聞」を発行してゐた。紙といふ媒体は当時はありませんから、それは土を使ひ、石を使ひ、木を使つたといふことです。土器、土偶、磐座、柱はみな、安部公房のいふ記録藝術であり、「明日の土器」「明日の土偶」「明日の磐座」「明日の御柱」といふわけです。これらは「明日の新聞」と同様に、「明日といふ過去である未来」から「現在といふ過去である未来である今」、即ち縄文紀元以来の神道でいふ超越論的な「中今」に、さう神道でいふといふもよし神道でいふといはぬもよし、私たちの自然の道としてある超越論的な「中今」に、発掘して発見される都度、「いつの間にか」（超越論的時間）配達される。そして、そのたびに、私たち現代の日本人は、「いつでも何処でも誰にでも存在してゐる」世界の果てに、ほら、あなたの直ぐ側に在る異次元に接して、安部公房の主人公たちと同様に、立つてゐる。これが、私たちの汎神論的存在論、即ち近代西洋哲学がキリスト教を脱してやつと18世紀のカント以降の超越論の系譜で横文字でいふことの出来た超越論です。

既に『安部公房とチョムスキー（8）』（もぐら通信第81号）の「7. 一神教と大地母神崇拜をtopologyで読み解く」で詳述した所ですので、詳細は此の号を参照戴くとして、ここに高天原の存在の三階層を再掲します。自分自身を思ひ出してもらひたい。即ち、一筆書きで自分自身の姿を思ひ描いてもらひたい。あなたがあなたである事、「あなたの中の「あなた」」が「あなたの中の「あなた」」[註6]であること、日本人が日本人である事を思ひだす事、これが私たちの「近代の超克」なのです。即ち、これが、神仏習合1500年来の哲學習合です。

[註6]

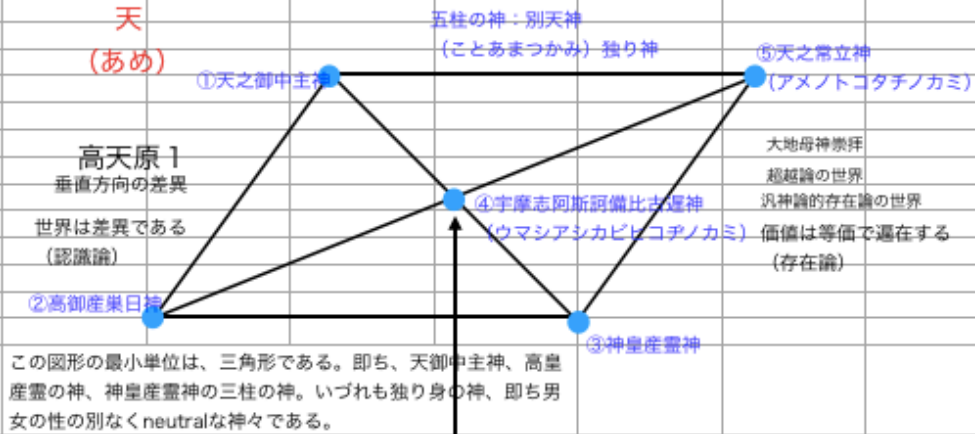
この安部公房固有の話法については「『デンドロカカリヤ』論（後篇）」をお読みください。詳述しました。



2018/3/15, 4/9, 4/17  
 岩田英哉  
 もぐら通信

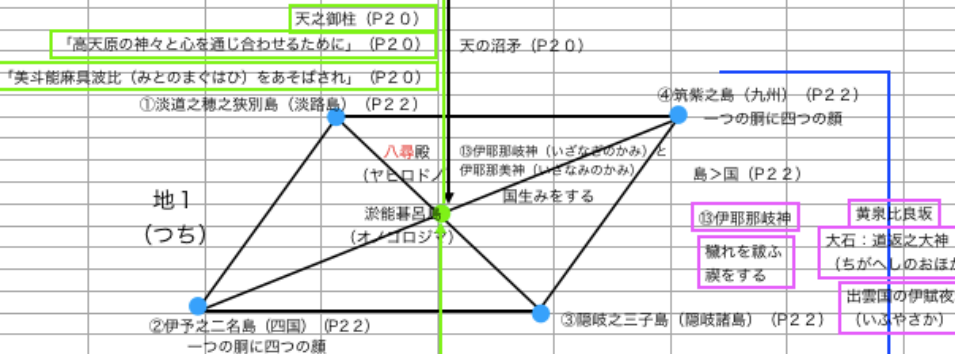
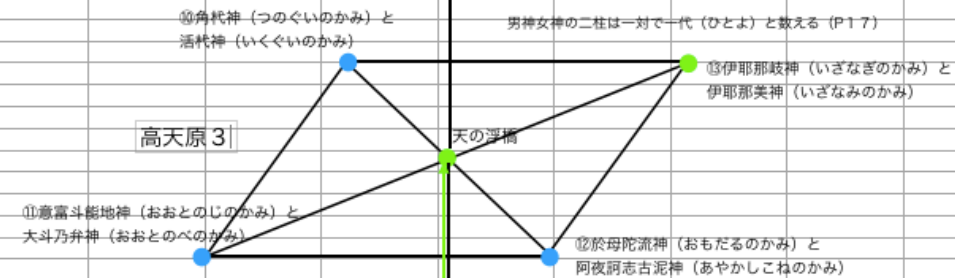
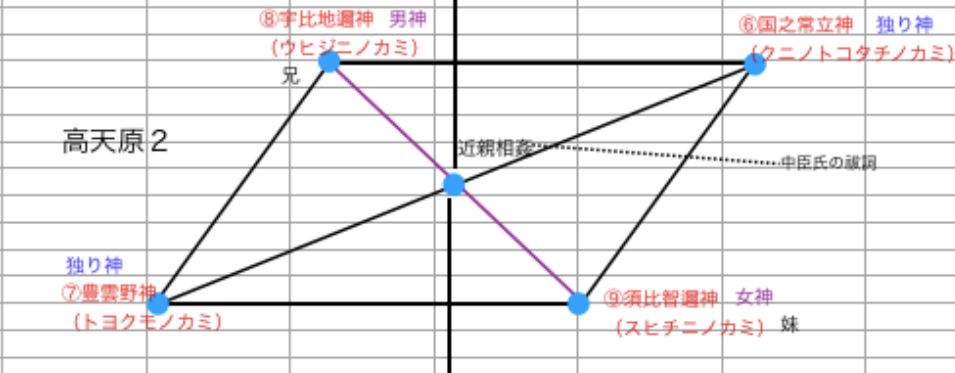
神々のtopology 4-3-1

多神教：汎神論 > (神道：自然道)



『古事記』(竹田恒泰訳)

「葦の芽のように伸びてきたもの」から (P16)



ダウンロードのためURLは：<https://www.scribd.com/document/387477318>

### 3.1.2 時間と空間の超越論：中今と磐座

この高天原の三階層のそれぞれの平面を三枚のトレース紙だと想像して下さい。さうして、あなたは自分の目的とする地点を探すために三枚を重ねて観て、さうして其の場所を特定するといふことなのです。

例へば、あなたが都会の中で番地を知らないが、その建物はある特定の交差点にあるといふことだけを知つてゐるとします。さうして、あなたは道路の地図を持つてゐる。それから、その建物に同等の建物ばかりの地図を持つてゐる。そして、特定の交差点の位置が病院の立つところだとする。さうすると、病院の立つ地図を用意することができる。これら三枚の地図を重ねると、あなたは目的地の場所の建物に至ることができる。つまり、

これが、あなたが神社にお参りをして、「困つた時の神頼み」のための超越論の「燃えつきた地図」といふわけです。神社で引く御神籤（おみくじ）はあなたのための「燃えつきた地図」であり、「明日の新聞」であり、「明日の御神籤」である。「明日の新聞」は「明日の御神籤」である。

三枚のトレース紙は空間の中ですから時間の無い地図の話ですが、しかし、今度は時間の話になりますと、既に何度も安部公房論の中で述べて来ましたやうに、安部公房の世界でいふ「明日の新聞」発行の論理、即ち時間的超越論の論理です。即ち、昨日今日明日といふ日にちを、時間の単位として等価交換をするわけです。上の3つの昨日・今日・明日の文を通して読んで理解できたならば、あなたは超越論を理解したことになる。これは繰り返せば、このまま縄文紀元から続く私たちの中今といふ概念です。中今を《中今》即ち《今》と安部公房の存在論の記号で表記しませう。昨日・今日・明日を過去・現在・未来としても同じです。常に例外なく《昨日》《今日》《明日》であり、これらは《 》といふ存在論の単位として等価交換可能です。もし今生きてゐる自分を中心に考へますと、それは《今》である。しかしこれは《昨日の今》である、そして《明日の今》である、即ち《今》の《今》である。

これは今生きてゐる自分を中心に考へる場合のみならず、過去の死者、即ち死者の過去についても同じであり、未来に生まれて来る子供達、子供達の生まれて来る未来についても同じである。『第四間氷期』の世界、『燃えつきた地図』の世界、『箱男』の世界、『カンガルー・ノート』の世界です。読者は好き好きに自分の好みの作品の名前を挙げる事ができる。

以上は時間的な場合の超越論ですが、空間的な場合の超越論を示すのが磐座であらうと私は考へる。前者は遅延といふ時間的差異であるが、後者は隙間（非連続量）または歪み（連続量）即ち安部公房の凹といふ存在の形象、即ち空間的差異である。前者については中今といふ名前が与へられてゐるのに対して、後者については磐座〔註7〕といふ名前が与へられてゐるのではないだらうか。

[註7]

磐座の写真を眺めると、一個の石としての凹もあれば、凸と凸の隙間を有する凹もある。いづれにせよ二つ併

せれば凸凹の形象といふこと、裏表の関係（といふ隙間）にある陰陽の形象です。それも、垂直方向に積まれた磐座もあり（これは物によつては石の陽物といふ事にもなるでせうし、また層をなす場合と一個の石である場合がある）、水平方向に広がる磐座もあると見受けられます。あるひは、この二つの方向の混交した磐座もまた見受けられる。磐座の形態分類は後日の課題とします。

さて、そして、いづれにせよ、これら二つの差異からなる一つの世界には時間は存在しないといふことになる。さあ、といふわけで長い迂回路を通りましたが、即ち、

三つの話から時間を捨象して、一つに纏（まと）める

といふことになるのです。

ここにも、安部公房の3と云ふ数字があります。

この文脈で思へば、話は層をなしますから、この話の層のことと層間の接続関係を文法学で話法（mode：モード）といふのです。私が安部公房の文章（テキスト）を読み解いて来た学問（science）の一つです。

これが、安部公房の作劇法であり、小説の作法です。それならば、映画も映画のシナリオ（脚本）も同じです。ノン・フィクション（ドキュメンタリー）の映画を記録藝術といふならば、他の範疇の作品もみな記録藝術といふことができる。小説の場合には、言語による記録藝術、即ち言語によつて現実を変換して或る媒体に（砂、顔、地図、箱等々に）写像（mapping）して言語で表現する言語藝術、即ちtopologyによる位相転移の記録藝術、安部公房のいふ仮説設定の文学〔註2〕です。即ち『使者』や『人間そっくり』の超越論的な火星人の話です。安部公房の読者であるあなたも、何かの使者であり、人間そっくりな何かであるのだ。といふ事になるのです。これをメタSFと呼ぶなら呼ぶも良い。といふ事になるのです。SFとは、この場合、Speculative Fiction（スペキュラティヴ・フィクション：思弁小説）の略称といふ事になります。かうして、安部公房はメタSF作家である〔註8〕。安部公房の読者がSF文学の読者と重なつてゐる事には、このやうな理由があるのです。

〔註8〕

『メタSF作家A氏への五つの手紙』（もぐら通信第71号）と『詩的な、余りに詩的な：安部公房と芥川龍之介の共有する小説観』（もぐら通信第85号）、それから『編集者通信：夏目漱石と安部公房～日本文学史上の安部公房の位置について～』（もぐら通信第31号）をご覧ください。安部公房の文学の性格がよくわかる筈です。

さて、本題に戻つて、（1）の「頭脳の現在がただちに対応するには刺激が強すぎるため」と



いふ「頭脳の現在」とは、論者の挙げるマルクスとフロイトの、これら20世紀を席卷したイデオロギー (Ideologie) のことです。あなたも、これら二人のイデオロギーの、それも通俗化したイデオロギーの束縛から、ひよつとしたら、「刺激が強すぎるため」に不自由なままに生きて来たのではありませんか？お考へ下さい。

マルクスとは異なり、フロイトがイデオロギーの開発を好んでしたとは思ひませんが、受け取る側が、その説を盲信して、これが通俗化するとイデオロギーになります。かういふ受信者 (読者と云つても良い) を、私はエリアス・カネッティのmassといふ用語を借りて、"mass-potentials" (群衆潜在者) と呼んでみます。これが顕在化すると大衆 (やはりpeopleまたはmass of people) と呼ばれる。大衆は常に判断を誤る。これの理由 (reason) と原因 (cause) をお話しすると一冊の本が出来ます。結論を云へば、超越論を知らない、否、忘れてゐるからです。何故なら時間の中を生きる事に毎日忙しいから。あの約束、この約束を守る事に忙しいからです。さう、何月何日何時にあそこ (といふ時空の交差点) であの人 (達) と会はずばならないと思つてゐるからです。その交差点が時間と空間の差異の交差点であると安部公房のやうに認識すれば、その人なりの其の人らしい正確な判断を下すことができるといふのに。さて、この交差点の前者 (時間) が贗物？後者 (空間) が本物？それとも、後者が贗物、前者が本物？といふ事になるのです。安部公房の、しかし、あなたの世界です。交差点とは何か。「カーブの向かふ」に何があるのか。箱男の勇気を以つて箱の穴から覗き見るしかない。

言語機能の集団化の機能 (情理の情に働き掛けること) を盲信し、大多数に同調するのではなく、言語機能の分化の機能 (情理の理に働き掛けること) を優先させて考へ、散文的に生きる事です。[註9] 安部公房の一読者としては、このやうにいふ以外にはない。経済の領域では此れをbusiness-like (ビジネスライク) といふのでせう。しかし、これは日本人にはなかなか難しい。私たちは情理分かち難いのです。これを昔は義理・人情・浪花節といつてをりましたが、しかし実は今の若者にも生きてゐて、約束・感情・ラップ [註10] と言ひ替へられ得る。

## [註9]

『シャーマンは祖国を歌う』 (全集第28巻、) より引用します。パブロフ、ローレンツ、チョムスキーといふ、それぞれロシアの脳生理学者、オーストリアの動物行動学者、アメリカの言語学者に言及した (以上232ページから235ページ) 後に、一言でいへば、安部公房は、

- (1) 集団化機能
- (2) 分化機能

この二つの機能を言語にみて二つに分類してゐます (同巻、236～239ページ)。

安部公房のいふ散文精神とは、勿論後者 (2) の分化機能を働かせることです。

## [註10]

ラップはラップ・ミュージックと呼ばれる若者に流行る音楽のこと。見事に洋風に脚韻も踏んでゐて、さうでゐながら、自分の言葉で感情も世相批判も時代批判も表現できてゐる。マチネ・ポエティックを結成した加藤周一、福永武彦、中村真一郎の三人が束になつても出来なかつたことを、今の若者は一人で楽々とやつてゐる。

1960年代末から1970年代にかけて、ヨーロッパの文学の学術の世界では、この大衆のうちの文学作品の読者の問題に学術の世界の人間達が無知であつた事を反省して、文学史に作品受容史を論ずる受容理論が議論されてみました。利害関係者は、作者・読者の二者関係です。しかし、私はこれに批評家と編集者を入れるのが良いと思ひます。但し、後者については、優れた本物の批評眼を有した編集者です。ただ原稿を右から左に作者から印刷所に受け渡すやうな編集者ではなく。さうであれば、編集者は批評家に等しく、小説を書かぬ小説家に等しい。私は大久保房雄といふ編集者の名前を記憶してゐます。

### 3.1.3 安部公房の座標軸1：リルケとマルクス

さて次は、リルケとマルクスの話です。次に引用する論者の言葉は正しい。安部公房全集が編年体である（時系列分類）といふことが、実に私たち読者に対して安部公房といふ人間の文学と人生全体への理解を容易にしてゐます。対して三島由紀夫全集は作品範疇別の分類（項目分類）になつてゐて、三島由紀夫といふ人間の文学と人生全体が一望できないといふ恨みがあります。

「『安部公房全集』の特徴のひとつはこの表現者のあらゆる作品を編年体に並べたところにあるが、結果として、安部公房に於けるリルケの重要性を浮き彫りにしている。リルケの影は、一九四九年三月十五日の詩「宣言」が執筆された段階、すなわち安部公房が主体的にマルクス主義あるいは共産主義を受け入れたように思われる段階まで、その表現のほとんど全域を覆っている。

だが、リルケの影は、以後、払拭されたわけでは無い。あたかもこの表現者の意図を裏切るように――というのは、安部公房自身はそのリルケ体験を若年の誤りであるかのように見なす素振りを何度か示しているからだが――、以後も一貫して、ほとんど最後の最後まで執拗につきまとっている。」

これに続く、リルケに関する論者の結論もまた正しい：

「当然である。安部公房はリルケを、ハイデガーが指摘するようにニーチェ以後の詩人、ニーチェによって示された課題を担う詩人として扱っていたからである。十代に培われた基本的なパースペクティヴはたやすく消えるものではない。また、ニーチェによって示された課題は、マルクスとマルクス主義によってたやすく廃棄されるようなものでもない。安部公房はリルケが担った課題を骨身にしみるように受け継いだのであり――ということはつまりそれが自身の課題にほかならないことをリルケをきっかけに見出したということにすぎないのだが――、その課題のなかにマルクスを位置づけたのであって、逆ではない。すなわち、マルクスのなかにニーチェの課題、リルケの課題を位置づけたわけではなく、ニーチェの課題、リルケの課題のなかにマルクスを位置づけたのである。この独自性は比類なく、きわめて貴重である。」

安部公房と（リルケ、ニーチェ、ハイデガー、マルクス）の関係は、この引用に正確に述べられてゐます。同じことを、私は字数を費やして『安部公房とチョムスキー』（もぐら通信第73

号以降連載) で論じて来たことになります。

私たちの結論は同じです。

### 3.1.4 安部公房の座標軸2：マルクスとフロイトを結びつけたフランクフルト学派

さて、マルクスとフロイトといふ名前のうちの後者、即ちフロイトの話に移ります。フロイトについては上掲最初の「20世紀の政治・社会と思想・芸術の座標軸」図に文章も写して書き入れましたので、ここでは省略して図をご覧戴くとして、フランクフルト学派の話に移ります。

「思想史においてマルクスとフロイトの両者を結び付けようとしたのはフランクフルト学派である。基本的にはこの図式が二十世紀の思想史の全体を覆っている。精神分析は広い意味において解釈学であり、二十世紀の解釈学はその基盤を現象学においている。フランク学派が提起したこの図式は、したがって、マルクス主義を縦軸に、現象学を横軸にしたひとつの座標であったとすることができる。ルカーチからサルトルにいたる思想家のほとんどをこの図式、この座標のなかに位置づけることができる。」

と述べた後に続けて、この図式に載つてゐる藝術家の名前として「シュルレアリストたちはもとより、プーレスト、カフカ、ジョイス、マン、ロレンスといった文学者もまた」同じ座標に位置づけてゐる。要するにルカーチとサルトルは、この座標の上で「要するに労働者ならぬ知識人が、いかにして階級闘争を主体的に闘うことができるか」ということを理論的に示し、かつ実践した」「フランクフルト学派以上に」此の座標を実践したの典型的な人間たちだと言つてゐる。

「二十世紀の知識人はマルクス主義の系のひとつにほかならなかつた。」

この指摘も、その通りです。猫も杓子もマルクス主義になりたがつたのが、確かに二十世紀である。世界中に、人間ではなく、国籍不明で、とにもかくにも猫も杓子もが大勢居たのである。これが二十世紀であつたと私がいふと、世界中の猫も杓子も嗤ふだらう。

そして、マルクス主義について次の二つのことを指摘してゐて、これも正鵠を射てゐて重要である。

#### (1) マルクス主義理論の未だ破綻が清算されてゐない弊害

「もちろんこの図式はマルクス主義が現実的に崩壊した以上、完全に失効したことになるわけだが、問題はいまなお余命を保っているように見えることである。マルクスおよびマルクス主義がその理論においてまでも失効したとは考えられていないのだ。たとえば歴史学者の多くはいまなおマルクス主義者であることをひそかに誇っている。」



## (2) マルクスの価値論の崩壊

マルクスとマルクス主義に対する「根底的な批判がないわけではない。たとえば岩井克人は『貨幣論』そのほかにおいて、商品価値を労働に帰し、貨幣を実体と見なすマルクスの考え方を根本から覆している。マルクスは『資本論』の当該箇所において決定的に誤った、論理的にも現実的にも誤ったというのである。商品の価値を決定するのは労働ではない。差異——相対的な不均衡——にすぎない。労働もまた商品であるならば、その価値を決定するのも差異にすぎない。つまり、労働賃金もまた差異によって決定されるにすぎない。(略)労働が価値の源泉ではないというこの一撃によって、剰余価値発生をめぐる考察も、資本家が労働者を搾取するという図式も、一挙に崩壊する。剰余価値も搾取も現に存在するが、マルクス主義が考えたようにではないと言わなければならない。」

岩井克人著『貨幣論』は、私も『安部公房のアメリカ論(3)～贗物の国アメリカ～：ドーナツとは何か』(もぐら通信第80号)と題して同じ超越論による貨幣の本質を論じた際に引用した理論です。この論を論じて、私も上の(2)に引用の結論と同じ結論に至りました。

それでは(1)についてはどうかと云へば、『安部公房とチョムスキー(11)』(もぐら通信第92号)の「15. 誤訳時代の平成30年間を総括する(30年)」の「【欺瞞の例4】向坂逸郎訳『資本論』の誤訳の欺瞞1」および「【欺瞞の例5】向坂逸郎訳『資本論』の誤訳の欺瞞2」にて結論した通りに、ヘーゲルの「弁証法」の論理の破綻によるヘーゲル哲学の破綻を証明し、またマルクスの『資本論』の「第一篇 商品と貨幣」「第一章 商品」「第一節 商品の二要素 使用価値と価値」の価値論の冒頭部の結論がユークリッド幾何学の範囲に留まるものであつて、非ユークリッド幾何学(topologyはその一つ)をマルクスが知らぬといふことから、これがマルクスの思考の限界であることを示し、マルクスの価値論に対するに非ユークリッド幾何学である超越論による価値論の優位性を、向坂逸郎訳『資本論』の杜撰などいふには余りに拙劣なる誤訳も含めて、明らかにしました。

この(2)に於いても、私と三浦さんといふ方の結論は一致してゐます。

ヘーゲルの『歴史の哲学』(『歴史哲学』は誤訳である)を読めば、この論者のいふ通りに「プロレタリアートは観念にすぎない。概念に過ぎない。」ことが判ります。ヘーゲルを論じながら、私は此れを「狂人の文章」と呼ぶ以外にはありませんでした。さて、「マルクスはその概念をひとつの名称としてロンドンの市井に蠢く雑多な人々に与えるのである。あたかも神であるかのように名づけ、実体化する。かくしてプロレタリアートは、その代表が現れ、代弁人が現れ、ついには一個の規範と化して人を束縛する。現に、きみは真のプロレタリアートではないという言葉とともに、膨大な人間が粛清されたのである。まさしく、観念も信じられれば力になるのだ。」

今でも隣の大陸では同じ理由、同じ原因でマルクス主義政党である中国共産党による異民族の大虐殺が続いてゐる。

話をフランクフルト学派に戻します。この章の最後に論者は次の指摘をしてみます。これも正確な指摘であり、私が『哲学の問題101』の連載で警鐘を鳴らしてゐる問題です。即ち、マルクス主義といふ名前を隠して、隠微な形でマルクス主義が蔓延（はびこ）つてゐるのです。まあ、昔の名前ではなく、今の源氏名で出てゐるといふわけです。

「このマルクスの流儀はいまもいわゆる新左翼のなかに生きていて、たとえば、プロレタリアートならぬマルチチュードというのがそうだ。いまや地球上に溢れる難民こそが来るべき革命の担い手であるというのである。マルクス主義は、ほかならぬその欠陥の流儀において、いまなお終わっていないのである。」

この指摘もまた正しい。何故なら安部公房は、論者のいふ「商品論において、貨幣論において、プロレタリアートの実体化において、決定的な誤りを犯」した其のマルクスの「躓いたまさにその場所に、マルクスの可能性核心が潜んでいてと考へた」からであり、「少なくともそこに引き寄せられたのである。」といふ指摘も正しい。

このマルクスの「躓き」の穴（凹）に、安部公房が着眼したことは、初期安部公房のエッセイ『様々な光を巡って』に特に詳しい（全集第1巻、202ページ）。三浦さんのいふ通りに、安部公房はマルクスの躓いた窪み（凹）に、超越論（汎神論的存在論）の観点から思考を集中した。さうして、マルクス主義を超越しようと挑戦したのです〔註11〕。二箇所から例を引けば：

「疾駆したのはプーシキンのトロイカばかりではなかつた。宇宙の到る所にほりつけられた我々の歴史の総てが、その蹄にえぐられた跡だった。太陽の下では嵐の様に、月の下では影の様に、そのトロイカは疾駆した。

その狂奔は神々のつまずいた或る一点に起つた分解だった。宇宙は丸い。その一点で人間の歴史もまだ幾度かつまずかねばならぬだろう。アリストテレスとソクラテス、キリストとブツダ、それ等の対立が深く交わるあの一点だ。ローマン主義の始まる所で自然主義も始まり、破れる所で終つた。象徴主義も表現主義も同じ事だ。宗教と科学についても同じ事が言える。宗教の終わった所から始つたのが科学ではない。宗教も科学も、同じ所で始まり同じ所で終るのだ。

それは《物》と言うささやかな窪みだった。」

（同巻、202ページ下段～203ページ上段）（傍線引用者）

「一回のつまずきの度に、トロイカは何かしら落しものをして行つた。それはとにかく、一番重いものが先に落ちたに違いない。そして全部が、その窪みの中にくろげ込んだ。

トロイカは次第に軽くなる。そして速くなる。そして更に落とす。恐らくやがて霧の様になり、更に終いには空気の様になって了うだろう。

小さな吾々一個人の歴史についてだって同じ事だ。一切がその窪みに向つて流れ注ぐ。そして誰しも、或る事にふと気付く時がある。つまり、ほとんど気にも止めずに落として来たその

窪みの中のものが、何時の間にか自分自身よりももっと重大な自己になっていて、自分は一箇の名札に過ぎず、うらぶれた木枯しにすぎない事に気付くのだ。それは涙さえ涸らしてう生理的な病いだ。

彼は蒼白の中で皮肉に笑う。何て身軽な風なんだ。それに、何んて気のきいた病気なんだ。」

(同巻、203ページ上段) (傍線引用者)

[註11]

中壘肇宛の書簡で安部公房はマルクス主義に惹かれる自分についてかう語つてみます：

「マルクスイズムはぼくのアンチテーゼではなく、ぼくの超えるべきものであるやうに思われます。」(『中壘肇宛書簡第17信』全集第2巻、333ページ。1950年4月20日付)

かうして、処女作『終りし道の標べに』の冒頭の、

「寒さの為に感覚の鈍くなった手を、霧が凍りついてキラキラ光る粘土の面にそっと押しつけて見た。ぼんやりとした手形が透明な膜に包まれて浮び出る。恐ろしくなって来た。何故こんな事をしなければならなかったのだろう。」(全集第1巻、273ページ下段)

とある手形の意味が、存在の窪みである事を私たちは正確に理解する事ができます。そして、この手形を押しした手は間違いなく、主人公の左手であるのです[註12]。

[註12]

安部公房の概念化した左手については『もぐら感覚(6)：手』(もぐら通信第4号)で詳細に論じましたので、これをご覧下さい。

安部公房は、それではどうやって詩人であることを其のままに小説家にならうとしたのでせうか。それはやはり Rilke に拠つてなのです。これを示す針生一郎との対談のある『安部公房と共産主義』(もぐら通信第29号)より引用します：

「また、針生一郎との対談で、Rilke を否定的な媒介として Rilke から脱却しようとしたという安部公房の次の発言があります(全集第5巻、441ページ～442ページ)。安部公房は対象を自分のものにするときにはいつも対象を否定的な媒介としてとらえて克服するのです。この場合、媒介とっておりますので、Rilke 的なものを否定するばかりではなく、安部公房が理解し統合しようとしている対象もまた否定的なものとして考えられているのです。そうして、それらを一次元上の次元で統合しようとするのです。この思考論理は、20歳のときに書



いた詩と詩作の理論篇『詩と詩人（意識と無意識）』で確立したものです。この相対立し、相矛盾するものを、両方を否定することによって「第三の客観」をもとめるという方法によって、安部公房はマルクス主義をも同様にして超克しようと考えました。従い、日本共産党員の時代にあっても、以下の対話を読みますと、「リルケ的なものを否定的媒介」にしている以上、安部公房はリルケの影のもとにいたのです。傍線は筆者。

「針生 リルケに影響を受けたのは？

安部 戦争中だ。

針生 『名もなき夜のために』（筆者註：1948年、安部公房24歳）のころは脱却したの？

安部 リルケ的なものとそうでないものとの対決を自分の中でさしていた。リルケ的なものを否定的媒介にしてゆこうということだった。超えてゆこうとするものと戻ろうとするものと絶えず入りまじって妥協したり反撥したりしていた。しかし、あの形式で捉えられなくて『異端者の告発』（筆者註：1948年）を書いたのさ。そこから『デンドロカカリヤ』（筆者註：1952年）に抜けて行ったわけだ。」」

確かに論者のいふ通りに「安部公房は、マルクスのなかにニーチェの課題、リルケの課題を位置づけたのではない、逆に、ニーチェの課題、リルケの課題のなかにマルクスを位置づけた」のです。

さうして実際に日本共産党員にまでなつた。そして何をしようとしたかは、既に『安部公房と共産主義』（もぐら通信第29号）にて詳述したところですが、ここで当該箇所を再掲します。

安部公房は何故共産党員になつたか：

「何故安部公房は日本共産党に入党したのでしょうか。1950年代の文章を読むと、日本共産党の党員になった動機と目的は、次の4つが挙げられます。

（1）典型的な人間としての詩人の意識と無意識の個人の在り方を、社会と人間の抑圧と被抑圧の関係にまで拡張して考えたこと。

『詩と詩人(意識と無意識)』（全集第1巻、104ページ）で確立した人間の典型としての詩人の意識と無意識の境域に在るその意識・無意識の在り方を、社会と人間の抑圧と被抑圧の関係にまで拡張して考えたこと。『シュールレアリスム批判』（全集第2巻、260ページ）と、もぐら通信第15号の『安部公房の変形能力14：シュールレアリスム』を参照下さい。

（2）生という混沌たる現実の背後に法則を見つけようとしたこと。

『文学における理論と実践』（全集第4巻、314ページ。1954年6月30日）

(3) 言語の観点から、文学における理論と実践の統合を考えた事『文学における理論と実践』(全集第4巻、314ページ。1954年6月30日)。これは、(2)と表裏一体の関係にあります。大変興味深いことは、このエッセイで、この時点でマルクス主義に決別することを考え、同時にそのことに迷い、悩みながら書いた『文学における理論と実践』で引用するレーニンとマルクスとスターリンの言葉は、みな言語に関するものであり、言語の観点からのものであることから、安部公房は、共産党に対しても、その言語観の証明と実現のために接近し、急激に左傾化して、その黨員となったということが判ります。同じ考え、すなわち言語の側から考えるということは、『文学理論の確立のために』でも述べられています(全集第3巻、229ページ、1952年6月10日)。

(4) 日本の国に、言語の側から、革命を起こしたいと思ったこと『〈人物カルテ〉『社会新報』の談話記事』(全集第15巻、480ページ、1962年3月11日)。また、『偶然の神話から歴史への復帰』(全集第2巻、337ページ。1950年8月)参照。池田龍雄の『詩的発明家---安部公房』(『安部公房を語る』、あさひかわ社、144ページ)によれば、安部公房は、この言語の側からの革命のシナリオを思い描き、革命が1957年に起きると本気で、そう考え、思い込んでおりました。[註23] 安部公房がこのことを池田龍雄に暗い小声で話したのは、間違いなく1955年2月25日以前の時点です。

つまり、以上4つのことを一言で言うと、言語の観点から現実を捉えようとしたということ、そして自分の言語観の正しさを現実の時代の中で実践的に証明しようとしたこと、そして、その正しさによって革命、即ち日本人の意識の根本的な変革を起こすことによって現実を実際に根本から変革しようとしたことが、安部公房入党の動機です。

大事なことは、徹頭徹尾、それが言語の観点からなされたということです。これは、共産黨員であった時代にも、終始変わらぬ、10代からの安部公房の姿です。

さて、そのために、詩人から散文家になるために、 Rilkeの『秋』と並んで、10代からの安部公房の大好きな詩の一つであった『涙の壺』の水分を「蒸留」しようとしたのです(『世紀の歌』、全集第2巻、230ページ)。即ち、この詩は、詩としての、詩人から散文家になろうという決意の詩です。しかし、この個人的な決意の詩に、同時に社会的な意味を持たせた宣言文にするということが、既に安部公房自身の矛盾と分裂と破綻を示しています。安部公房はこの詩を1949年3月15日に発表しております。安部公房25歳。

この入党の動機を更に言えば、しかし、この間、安部公房は、マルクス主義の根底にある終末思想と箱舟思想に囚われたと言い換えることができます。これが、何故安部公房がマルクス主義にある時機から急激に傾斜して、日本共産黨員になったのかという、マルクス主義の側から見た安部公房の持っている理由です。

マルクスとエンゲルスの書いた『共産党宣言』を読むとよく解るように、マルクス主義の正体は、終末思想であり方舟思想であることを、安部公房は、1953年9月10日に無残な文章を書いたときから『猛獣の心に計算機の手を』を書いた1955年2月25日までの1年半の間に見抜きました。

この二つの思想は、終生安部公房が繰り返して徹底的に批判し、否定した思想です。終末思想は、10代の安部公房によって、自分自身の位相幾何学の本質によって否定されており、また既にリルケの純粹空間によって詩の世界のこととして否定されており、方舟思想は、18歳の『問題下降に依る肯定の批判』で自分自身で明らかにした通りに、ニーチェに学んだ「概念から生への没落」という安部公房独自の実践的な思想によって、本来は否定されていたものです。

安部公房が、1953年には、マルクス主義のこの終末思想と方舟思想に何故囚われて、それはどのような無残な状態であったかは、『〈.....私にわかった。〉』(全集第30巻、39ページ、1953年9月10日)を読むとよくわかります。安部公房も普通の20代の若者でした。生が安部公房に授けた青春の力に敗北したのです。[註5]

上の引用の最後の一行に、一人娘のねりさんに「生が安部公房に授けた青春の力に敗北した」とは思ひません。といふ強い調子の反論のメールを戴いたことが昨日のことのやうに思ひ出されます。

既に此の連載の『安部公房とチョムスキー(11)』(もぐら通信第93号)にて明らかにしたマルクス主義による支配の組織階層は次のやうになつてゐるのでした：

Partei (パルタイ) > society (社会) > state (国家1) > nation (国家2) > **people (人民)** > **Comrade (同志)** ..... (a)

しかし、歴史的な事実が示してゐるところに従へば、

People (人民) > Comrade (同志) の関係は転倒して

Partei (パルタイ) > society (社会) > state (国家1) > nation (国家2) > **Comrade (同志)** > **people (人民)** ..... (b)

となつてゐる。あるひは、

Partei (パルタイ) > society (社会) > **Comrade (同志1)** > state (国家1) > nation (国家2) > **people (人民)** > **Comrade (同志2)** ..... (c)

安部公房が芥川賞受賞の前後に立ち入つて日本共産党の「文化活動」を行つてゐた北辰電機で



の立場は〔註13〕、安部公房のことですから、いふまでもなく、上記(c)のComrade(同志2)の立場であつたことでありませう。この立場で、リルケを教へたといふ事になります〔註14〕。とすると、「state(国家1) > nation(国家2)」は、超越論による存在の国家、即ち《state(国家1) > nation(国家2)》といふ事になります。これは、現実に武器を手にして暴力革命を起こさうとしてゐる「Partei(パルタイ) > society(社会) > Comrade(同志1)」に理解される筈もなく、理解されないどころか、これでは日本共産党を否定して、事実さうなつたやうに、除名になるでせう〔註15〕。

## 〔註13〕

『贗月報3』に当時北辰電気の社員であり、「『下丸子詩集』編集発行人、元北辰電機労組書記長」だつた高橋元弘の証言がある。これによれば、安部公房は「エレンブルクの『作家の仕事』や、スターリンの『言語学の若干の問題によせて』」を高橋元弘に薦めてゐる。

## 〔註14〕

文学のサークル活動について当時の様子の良くわかる安部公房の次の二つのエッセイがある：

1. 『文学サークルのあり方』というエッセイがある(全集第5巻、461ページ)。これを読むと、安部公房のサークル活動に対する考え方、当時の戦後のサークル活動というものがどのようなものであつたかが、ある程度わかる。
2. 『サークルをめぐる問題—わたし達の文学教室』(全集第4巻、279ページ)という報告がある。これを読むと、安部公房は当時複数の文学サークルで、美と笑ひについて教へようとしたことがわかる。美といへば、明らかにリルケです。

## 〔註15〕

『安部公房と共産主義』(もぐら通信第29号)より：

1. 日本共産党に入党した日  
「安部公房が、共産黨員になった日については、不明です。日本共産党に照会をしましたが、記録が残っておりませんでした(もぐら通信第17号『質問箱』、38-39ページ)。世間に流布している説は、1951年という年を言っております。今仮に、この年を日本共産党入党の年として措きます〔註1〕。北辰電機の労組書記長で『下丸子詩集』編集発行人の高橋元雄の言葉によれば、安部公房は1951年上半期の芥川賞を受賞した7月には、既に共産黨員でありました(贗月報第3号、全集第3巻)。

## 〔註1〕

高野斗志美は、「野間宏の推薦で、勅使河原宏といっしょに日本共産党に入党しています。」と書いています(『安部公房を語る』採録「安部公房の作品を読む(8)」、あさひかわ社刊。67ページ)

しかし、一般財団法人草月会の資料室に照会すると、次のような回答が参りました。2014年11月29日付のメールです。

「以下のような資料がございましたので、ご参考までに記載しておきます。瀬木慎一著『日本の前衛1945-1999』(2000.1.15生活の友社発行)には、安部らとともに1951年3月に入党申し込みをしたにもかかわらず、宏だけ受理されなかったということが記載されております。また、宏自身も、大河内昭爾、四方田犬彦とともに著した『前衛調書』(1989.8.25学藝書林発行)という鼎談集のなかで、家元の息子なので入党は勧められなかったと

語っております。」

また、信州大学友田義行先生のご教示によれば、「勅使河原宏の入党(未完)については、桂川寛『廃墟の前衛』に詳しく書かれて」いるとのこと。

このように考えて参りますと、安部公房は1951年3月に野間宏の推薦で入党の申請をしたが、その受理の正確な日付は不明、しかし、入党は、同年3月以降7月以前であるということになります。

木村陽子著『安部公房とはだれか』によれば、安部公房の入党については、「安部は五十一年五月、日本共産党に正式入党している。」とあり、それは、1951年5月となっています(同書、95ページ)。根拠が明示されていないのが惜しまれます。」

## 2. 日本共産党に除名された日

「日本共産党に除名された日は、もぐら通信編集部への日本共産党からの回答によって、1961年9月6日と判明しております(もぐら通信第16号『質問箱』、39-40ページ)。」

この同じことを三浦氏曰く、『資本論』に関する貨幣を巡る本物・贋物論といふ「マルクスに対する安部公房のこの接近の仕方は〔引用者註：『S・カルマ氏の犯罪』の名前と存在の関係論、即ち本物・贋物論を云ふ〕、当時においてはまさに異常なものだった。なぜなら、知識人であれ、学生であれ、労働者であれ、マルクスに関心を寄せるものはほとんどすべて社会主義イデオロギーに囚われていたからである。むしろ逆に、社会主義イデオロギーに囚われていたからこそ、難解で膨大な『資本論』まで読まなければならなくなったというのが実情だろう。そこでは『資本論』はほとんど聖典であって、批判すべきものではなかった。だが、社会主義イデオロギーに囚われずにマルクスに接した安部公房は、じかに『資本論』に接したのである。」

しかし、この「ほとんど聖典であって、批判すべきものではなかった」『資本論』の日本語訳が如何に杜撰でいい加減なものであつたか、翻訳者自身がドイツ語による原典のマルクスの価値論を理解できていなかったかは、『安部公房とチョムスキー(11)』(もぐら通信第9号)の「15. 誤訳時代の平成30年を総括する(30年)」の「【欺瞞の例4】向坂逸郎訳『資本論』の誤訳の欺瞞1」および「【欺瞞の例5】向坂逸郎訳『資本論』の誤訳の欺瞞2」にて証明した通りです。鯛(いわし)の頭も信心から。しかし、鯛(いわし)の頭は、所詮鯛の頭である。

三浦氏更に続けて曰く、「安部公房のこの特異性はいくら強調しても足りないだろう。六〇年代に入るやいなや党を除名されるわけだが、当然といふほかない。党に理解されるわけがない。」

「党に理解されるわけがない」理由は、上の(c)の共産党組織階層図にある安部公房の位置、

即ちComrade（同志2）の位置で超越論をpeople（人民）に説いたからだ、私の説明の仕方では、さうなります。

ここも三浦氏と私の見解は一致してゐます。

さて、リルケに対するに、もう一人の当のニーチェとの関係です。

### 3.1.5 安部公房の座標軸3：ニーチェとマルクス

ここで三浦さんといふ方は、マルクス、ニーチェ、フロイトの三者を、それぞれの領域の名前との関係で、それぞれの論じた論を、21世紀初頭に立ち振り返つて、次のやうに整理してゐます。

- (1) マルクス：イデオロギー論
- (2) ニーチェ：言語論
- (3) フロイト：無意識論

### 3.1.6 安部公房の思想とマルクスの『資本論』：本物・贋物論

論者は此の後『題未定（霊媒の話より）』の主人公の例を挙げて、本物・贋物論に話を展開してゐる。即ち、

- (1) 私とは何かといふ問いに対しては「自分とは一個の関係にすぎない、実体などではありえない、にもかかわらず自分はここにこのように実体であるかのように存在する。」
- (2) この関係は、そのまま貨幣論となり、貨幣とは何かと問へば、それは「「本物」の貨幣の「代わり」がそれ自体で「本物」の貨幣になってしまうという「奇跡」が繰り返り起こっていることが分かる。」と、岩井克人著『貨幣論』を引用して、整合性の取れた論の展開してゐます。勿論、原文を読めば分かることですが、これは何も此の貨幣論を正面に据ゑたものではなく、論者自身の考へとして此れを確立した後で、読者に貨幣とは何かを簡潔に説明するために専門家の言葉を引用したものです。この場合、『題未定（霊媒の話より）』の主人公は老婆の「代わり」であるのか、「本物」の老婆であるのか、家人には判らないのです。

これは此のまま、名前と存在の話となり、この話であれば『S・カルマ氏の犯罪』の主人公の話となり、「代わり」が「本物」よりも重要だといふ事の顛末が、そのまま人間や貨幣の在り方の問題のみならず、諸事百般に亘る物事の在り方の問題となり、この『貨幣論』の著者の言葉を引用して、此れを「『超越的な記号されるもの（トランスセンデンタル・シグニファイド）』の場を究極的に確保してきた古典ギリシャ以来の伝統的な記号論」を粉碎してゐるといつてゐます。これは、この通りです。安部公房は此の論理によつて、即ち超越論によつて「古典ギリシャ以来の伝統的な記号論」と同列に「マルクスを根本的に批判し、否定してゐる」のです。



さうして、この、人も馬も躓き、マルクスも躓いた存在の「窪み」（凹）で如何に安部公房がマルクス主義と超越論をtopologicalに統一して次元上の存在の世界を創造したか、これを示すのが、安部公房の書齋にあつて、ニーチェと肩寄せて並んでゐるマルクスの資本論です。『安部公房と共産主義』（もぐら通信第29号）の30ページに、資本論全集の計6巻を左に、ニーチェ全集の計4巻を右に隣り合はせにマルクスとニーチェ全集が接して並んでゐます。これは仙川にあつた家の安部公房の書齋である二階南側の棚です。更に右隣にはイヨネスコの戯曲集、特に左隣には『発禁本』（城市郎著。桃源社）が一冊並んでゐるのは可笑しい。これは当時写真を掲載した時に、安部ねりさんが、これは安部公房の死後に真知夫人が本棚の本を入れ替へたことがあるので、安部公房の並べ方かどうかは確かではない可能性があるといふ事でしたが、今、時を置いてこのやうに考へてみると、この二つの本はやはり安部公房の配列のままだと思はれる。

さて、この章の最後にまとめれば、ニーチェがヨーロッパの哲学史上行つた事は、「『超越的な記号されるもの（トランスセンデンタル・シグニファイド）』の場を究極的に確保してきた古典ギリシャ以来の伝統的な記号論」を粉碎した事なのです。これが此のまま、超越論者ニーチェの、共産主義者マルクス批判に自動的になつてゐる。やはり、ここでも超越論と共産主義の分岐を知ることができる。

さうして、安部公房が Rilke と共に、その成城高校時代に耽読した哲学者はニーチェでした。  
[註16]

[註16]

当時哲学談義を親しく交はした友、中埜肇宛に次の書簡が残つてゐる：

1. 中埜肇宛書簡第1信（全集第1巻、68ページ下段）

「近頃、或意味で、（ニーチェ？）ギリシャにあこがれて居ります。けれど成れるとも思はないし、又成らうとも思ひません。」

2. 中埜肇宛書簡第3信（全集第1巻、72ページ下段）

「Untergangは、今や僕の魂の中で、激しい試練を受け乍ら、苦しみもがき、或は強烈な大歡喜に身を戦かせて居ます。死ぬ時と同じ様に、生まれる時にもしなければならぬと云ふあの苦悶なのでせう。諸々のDingeの中に、ひそかに満ち満ちて居るあの生の流れに、やがて身を投げ入れる為に。」

僕は当分の間、やがてそれ等を超克せんが為に、もつともつと深く Rilke とニーチェとの中に、総てを沈めて行くつもりで居ます。」

安部公房は此の引用の後に Rilke の『秋』といふ大好きな詩をドイツ語のままに全文を引用してゐます。

3. 中埜肇宛書簡第4信（全集第1巻、78～79ページ下段）

「ニーチェは僕の目に益々偉大に、物苦しくうつつて来ます。没落は、実は今の所ある非常に大きな暗礁にさしかかつて居るのではないでせうか。十九世紀の歴史的意義は果たして何だつたでせうか。……新しい登上人物。別離と窓氏。

中埜君、どうかニーチェが気が狂つたと云ふ事と、最後まで Wagner の悪口を云ふのを忘れなかつた——あきなかつたと云ふ事に御注意下さい。人間はあの悲しい反照なくしては自己証認すら足場をなくするのです。」

4. 中埜肇宛書簡第6信（全集第1巻、100ページ）

「僕も随分変わりました。ニーチェ復興です。死ぬ度に生き返へる……。」

5. 中壘肇宛書簡第10信（全集第1巻、269ページ下段）

「僕が最初に実存哲学なるものを発見したのは、キエルケゴールやヤスパースやハイデッガーに於てよりもむしろ、リルケとニーチェに於てだつた。しかし是は勿論実存主義とは名付け得ないかもしれない。とにかく僕は其處から出発した。そして四年間……僕の帰結は、不思議な事に、現代の実存哲学とは一寸異つた実存哲学だつた。僕の哲学(?)を無理に名づければ新象徴主義哲学(存在象徴主義)とでも言はうか、やはりオントロジーの上に立つ一種の実践主義だつた。存在象徴の創造的解釋、それが僕の意志する所だ。

それから、現代のいはいる(原文のママ)実存主義とは、僕はまるで無縁だ。一口に言ってあの下劣なコッケイさが実存主義なら僕は反実存主義だと言はれてもかまは無い。同じく「ハナ」と言つても、花と鼻との相違、いやそれ以上の相違が在ると思ふ。あれは單なる流行主義だ。」(『中壘肇宛書簡第10信』全集第1巻、270ページ上段)

これで、マルクスーフランクフルト学派ーフロイトーニーチェといふ関係が連鎖しました。

この連鎖で超越論はニーチェのみです。フロイトは教条主義的(ideologisch:イデオロギッシュ)になり過ぎた。そこで、ニーチェの後に時間の本質を論じたハイデッガーの名前が出てきます。安部公房は遂に、誰がどんな人種のどんな民族の何人であれ、何語で論じて、結局、時間は存在しない、即ち時間に実体はないといふ結論に至るのです。何故ならば、時間とは遅延であるからです。現在の現実はいつも既に起きた過去である。とすれば、既に未来は此の只今起きてゐる。とすれば、過去の昨日は明日といふ未来である今日である。「**3.1 安部公房の座標**」の座標で出した超越論理解のための三題嚮をおもひ出して下さい。即ち、二面一体、二態一様の次の超越論(汎神論的存在論)の原理を:

- (1) 世界は差異である(認識論)
- (2) 価値は等価で遍在する(存在論)

この宇宙生成の原理を、論者はニーチェとリルケの名前を挙げ、その言葉を引用しながら、次の章の論を、ハイデッガーのリルケ論を論じながら、そのまま言語と貨幣の関係を極端なそれぞれの場合、即ち狂気(安部公房の場合)と恐慌(経済の場合)に比定して論を展開してゐます。

### 3.2 超越論とマルクス主義

次の五つの文を通して読んで下さい。さうして読み取つた言葉の意味が、この章での論者の論旨です。

- (1) 「商人はつねに恐慌を意識し、詩人は狂気を意識する。」
- (2) 「恐慌、言い換えれば狂気、安部公房の表現を一貫するのは狂気の論理的探究である。」
- (3) 「リルケもハイデッガーも詩人を称え、商人を貶しているようだが、ここにも逆説がある。」

(4) 「だが、ほんとうは、狂気が詩人の自由を保証するように、恐慌が商人の自由を保証してもいるのだ。」

(5) 「いずれも、まったく同じ人間の条件に根差しているのである。」

そして、この後に論者は安部公房22歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』に言及して次のやうにいふのです。これは私の言ひ方をすれば、この論文を読者が理解したら安部公房文学の隅々まで理解することができる、といふことを三浦流に、もう少し丁寧述べてみるのです。

『詩と詩人（意識と無意識）』は、お読みになると判りますが、人間と社会と国家の経済行為に、従ひ政治行為には一切無関係な叙述であるのです。従ひ、三浦氏曰く、

もし『詩と詩人（意識と無意識）』が「実際、もしも実存主義的な論文であったならば、戦後に示したマルクス主義への接近も、サルトルふうの実存主義的マルクス主義とでもいったもの [註17]、すなわち、いかにして労働者、農民と連帯するか苦悩するといった態のものになっていたはずだ」が、しかし「だが、「詩と詩人」はそうではない。ニーチェ、ハイデガー直系で、ヒューマニズムの雰囲気はほとんど感じられない。フーコーではないが、人間の終焉を感じさせるほどだ。圧倒的にニヒリズムの色彩が濃いのである。リルケもまたそういう詩人だったと言っていい。」

[註17]

中壘肇宛書簡第10信（全集第1巻、269ページ下段）より引用します：

「僕が最初に実存哲学なるものを発見したのは、キエルケゴールやヤスパースやハイデッガーに於てよりもむしろ、リルケとニーチェに於てだった。しかし是は勿論実存主義とは名付け得ないかもしれない。とにかく僕は其處から出発した。そして四年間……僕の帰結は、不思議な事に、現代の実存哲学とは一寸異つた実存哲学だった。僕の哲学(?)を無理に名づければ新象徴主義哲学(存在象徴主義)とでも言はうか、やはりオントロジーの上に立つ一種の実践主義だった。存在象徴の創造的解釋、それが僕の意志する所だ。

それから、現代のいはいる(原文のママ)実存主義とは、僕はまるで無縁だ。一口に言つてあの下劣なコッケイさが実存主義なら僕は反実存主義だと言はれてもかまは無い。同じく「ハナ」と言つても、花と鼻との相違、いやそれ以上の相違が在ると思ふ。あれは單なる流行主義だ。」(『中壘肇宛書簡第10信』全集第1巻、270ページ上段)

1967年に書いたエッセイで、東京の六本木のとあるレストランで(間違ひなく、国際色豊かなイタリアン・レストラン”CHIANTI”でありませう [註18])、リルケの息子だと会食の友人に指差されて見た男に触発されて笑ひが止まらなくなつて無性に笑ひ続けた逸話が、『リルケ』と題して全集に収録されてあります。全集第22巻に収録の此のエッセイは、収録の題名とは異なり、『リルケ——苦痛の記憶・その後』と題されて最初『詩の本 第3巻 詩の鑑賞』に発表されたものです。



[註18]

『レストランキャンティ(CHIANTI)と安部公房 ～リルケの贗の息子と出合った場所～』（もぐら通信第28号）に詳述しましたので、ご覧下さい。

このエッセイを三浦氏のまとめたところは、そのままであると私は思ふ。それは、

「影響を受けた本人に、その影響のありようを語ることはむずかしい。まるで捨てた恋人のことを語ってでもいるようにいささかヒステリックなこの回想は、逆に安部公房にとってのリルケ体験の重要性を物語っていると言っている。

実際、捨てた理由は、期せずして安部公房の主題と方法を示唆しているのである。遮断も自殺もリルケの企てた詩的な現象学的還元と矛盾しないだけではない。きわめて重要な主題として安部公房自身の作品のなかに持続しているのである。時間の停止は、安部公房の最後期の作品群を貫く鍵とさえ言っているほどだ。」

安部公房はリルケを別に捨てはしなかつた。詩人のままに、上記引用の針生一郎に語った topologicalな方法によつて、そしてこれは初期安部公房論にて証明した通りであります [註19]、しかし、いづれにせよ間違ひなく若き安部公房には超人的な、あるひは超絶的な、意志力を必要とした「転身」でありました。それ故に、最初の発表時の題名が『リルケ——苦痛の記憶・その後』と題されてゐるのは十分過ぎる程の理由のあることです。

[註19]

初期安部公房論は『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』と題してもぐら通信第56号から第59号までに連載して、どのやうに安部公房が詩人から詩人のまま小説家に「転身」したかを実証しましたので、お読み下さい。

### 3.2.1 安部公房はどのやうに超越論とマルクス主義を統合したか

さて、上記三浦氏の文章引用の後半の段落部にある三浦氏の指摘は全く、私も同感です。何故ならば、この、存在の「窪み」(凹)でリルケとマルクスを統合して、常に二者は裏表の関係で、前期20年は社会の中に(これはマルクス)存在の「窪み」(凹)を求めた(これはリルケ)この姿勢が、1970年三島由紀夫の死を境にして、大きくリルケと自分の詩の世界へと回帰して行くに当たり、「窪み」(凹)の中に(これはリルケ)社会を求めた(これはマルクス)といふ姿勢に変はるのが、後期20年の安部公房の藝術家人生であるからです。[註20]「時間の停止は、安部公房の最後期の作品群を貫く鍵とさえ言っているほど」です。

[註20]

安部公房の「安部公房の人生表」をご覧下さい。ダウンロードのURLは：<https://www.scribd.com/document/390472019/安部公房の人生表-v4-掲載版scribd>

「人も馬も躓き、マルクスも躓いた存在の「窪み」(凹)で如何に安部公房がマルクス主義と超越論をtopologicalに統一して一次元上の存在の世界を創造した」か。これが「日本共産党員の時代にあっても、」針生一郎との「対話を読みますと、「リルケ的なものを否定的媒介」にしている以上、安部公房はリルケの影のもとにいたので」であり、そして後期20年もまた、今度は積極的に存在の詩の世界へと回帰するのであれば、やはりリルケは安部公房の元に姿を現して立ち続けてゐた。前期20年はリルケは影のやうに安部公房の元に立ち続け、後期20年は舞台の上で積極的に安部公房スタジオの舞台の存在の一枚布として登場した。1970年を境に、安部公房はリルケへの言及が目に見えて多くなります。そして、リルケの名前を出さない場合でも、同じ詩的・論理的・哲学的・topologicalな存在論は演技論の根底にある演技概念《ニュートラル》として若い俳優たちに教へられたのです。

### 3.2.2 安部公房の愛とは何か

さうして或る時、1979年の『仔象は死んだ』の上演前の稽古に際して、稽古前に「役者とつねに長い時間をかけて討論したという」安部公房は、「人間は幽霊を相手に生きているようなものだが、この問題をどのようにして乗り越えることができるか、役者の全員が執拗に問いかけられたことがあった」が、「むろん誰も答えられはしない。だが、安部公房は突然ほとんど藪から棒に「これを解決するのは愛しかないんだ」と断言したという。そして、「こんなことを言うとは誤解されるから人には言わないが、二十世紀の大きな主題は弱者の救済であり、弱者への愛なんだ」と付け加えたというのである。」この記憶は「安部公房スタジオの俳優だった佐藤正文が語っている。」(全集贖月報二十四)。

もし愛といふ言葉を使ふならば、愛といふ言葉は『詩と詩人(意識と無意識)』には、冒頭に掲げられたエピグラフとしての詩以外には、一語も出てこない。しかし、この、愛といふ文字のあるエピグラフは何を意味するかといへば、愛とはリルケと安部公房の共有する詩の世界の大切な鍵語(キーワード)であるといふことです。

そして、金山時夫の訃報に接して書いた安部公房の処女作『終りし道の標べに』は、理論篇『詩と詩人(意識と無意識)』の実践作品として、愛といふ言葉の書かれてゐる《存在》と《現存在》と時間の中に生きる当の人間の記録となつてゐます。初期安部公房論より引用します：

「このまとまりを見ますと、

象徴：45回

存在：41回

愛：36回

現存在：5回

再帰的自身：4回

転身：3回

暗号：2回

でありますから、結局安部公房は、『終りし道の標べに』で一体何を書いたのかといへば、

(1) 『終りし道の標べに』の地の文では圧倒的に、象徴と存在と愛の関係について書いてあるといふこと。これに対して、上で見たやうに、

(2) 《》といふ記号を使つた哲学的思惟の領域では、安部公房はもつぱら存在と現存在について書いてあるといふこと。即ち、

(3) 『終りし道の標べに』は二層になつてゐて、下層は存在と現存在について語り、上層は、これもやはり時間の中で、即ち後者、即ち現存在に人間が生きることの象徴と存在と愛の関係について語つてゐること。即ち、

『終りし道の標べに』の中で安部公房は何を書いたのかといふと、「金山の伝記を書き度いと思つてゐる。これは容易な事ではない。詩であつてもならないし、伝説であつてもならない。やはり、悩み、生き、そして最後に、存在に対決する為に、永遠の孤独に消えて行つて、人知れず夜の中に潜入して、悲しみでもない悦びでもない歌を信じながら死んで行つた一人の友を、此処で再び永遠に生かさねばならないのだとしたら……」といふ思ひで、この「……」といふ余白と沈黙の中で書いた此の小説は、存在と現存在との関係で、歴史と時間の中に生きる人間についての象徴と存在と愛について書いたのだ、といふことになります。

勿論(3)の上層と下層の上下を逆にしても良いでせう。また、上の(1)から(3)の中で、

現存在：5回

再帰的自身：4回

転身：3回

暗号：2回

といふ頻度の少ない4つの言葉は、頻度が少ないから重要ではないのではなく、象徴・存在・愛との関係で、その重要性が論ぜられるべきことなのです。何故なら、現存在は存在と結びつき、従ひ(その語構成から言つても)存在自身に再帰的に結びつき、存在として(時間の在る)現実の中を生きること、即ち無償の愛と永遠の別離による愛の真実性の証明をするための転身の愛、即ち自己犠牲、自己忘却の愛が転身の果てに(現存在として)解読する

(decode) 混沌と迷路の世界の暗号(code)といつたやうに。」

(『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について(3)』(もぐら通信第58号)の「IV「転身」といふ語のある小説を読む」(「②詩と散文統合の為の問題下降」期の小説)」>「1.「②詩と散文統合の為の問題下降」の時期」>「(2)詩と散文の統合：詩形式による「今後の問題の定立」(『無名詩集』)」>「(2.1)『終りし道の標べに』」より)

### 3.3 詩と散文と第三の沈黙・余白の関係：エピグラフの詩を最後に



この論考の最後に22歳の安部公房の掲げた冒頭の詩を玩味ませう。この詩を理解すれば、実は散文で書かれた第1部は不要なのです。いや、もしあなたが安部公房の散文を読みたいと願ふならば、第2部は必要だ。いや、詩だけ読みたいと思ふならば、第1部は不要だが、しかし尚、それでも第2部が必要だ。即ち、あなたはいつれの場合であつても、第2部、即ち沈黙と余白の第2部はあくまでも必要なのです。何故ならば、安部公房の新象徴主義哲学の真諦は第2部の白紙 (blanc) の沈黙と余白にこそあるからです

「吾が愛する友人よ  
 此の書に於いては  
 総てをかくあらしめる夜について  
 人間の在り方について  
 又はそれ等によつて  
 諸々の肯定と哄笑と  
 そして英雄の歌が物語られ  
 総ての霧、黄昏は解き放たれて  
 総ての高貴なる魂を押包む可く  
 白熱せる久遠の天体が  
 やがて生まれ出るであらう。  
 そしてその時  
 此の書は自らの熱によつて  
 焼け亡びるであらう。」

この詩は書かれざる余白と沈黙の第2部、全き空白に残されてゐる、即ち読者たるあなたが自分の言葉で書くべき余白としてある第2部と釣り合ひが取れてゐるのです。何故なら『名もなき夜のために』の第3部が存在の記号としての ( ) の中で書かれてゐるやうに、存在の言葉は、夜に、沈黙の中に書かれるものだからです。

あなたが第2部の白紙に自らの言葉で文字を書くために、「此の書は自らの熱によつて/焼け亡び」、これによつて生まれた沈黙と余白 [註21] を、第1部「四、人間の在り方」の章の中にも22歳の安部公房は読者のために次のやうに設けてゐます：

「夜は決して理性の作品ではない。又体験から割り出されたものでもない。体験自体なのである。夜はまねかれた客人ではない。夜は此の部屋に満ちる空気である。総てをかくあらしめるもの、それが夜である。此の吾等の判断も、表現も、生も、行為も、幻想も、総てそれがあつた如くあらしめるもの、それが夜なのである。解釈学的体験、……次の数行の余白はその無言の言葉で埋められるのだ。(私は君達の自己体験をねがう為に此の余白を用意したのだ)

.....  
 .....  
 .....」

(全集第1巻、112ページ下段)

[註21]

同じ余白が初期安部公房にある。『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について(1)』(もぐら通信第56号)を参照ください。具体例を挙げて論じました。

冒頭のエピグラフの詩は此の沈黙と余白の第2部に/と釣り合つてゐる、均衡してゐるのです。さうでなければ、即ち文字で表せば、その釣り合ひ、均衡が文字で書かれた第1部なのだ、と理解しても良いでせう。この関係が超越論なのだ。これがtopologyなのだ、と、安部公房は言つてゐるのです。即ち、この冒頭のエピグラフの詩を読み始める「以前に」第2部の沈黙と余白が「既にして」(超越論的時間)沈黙と余白それ自体の中に存在してゐる。即ち、

劇場の幕が定時定刻にベルの音とともに上がる前に劇は終はつてゐる。超越論の世界、topologyの世界です。

《そして開幕のベルも聞かずに劇は終わった》 [註22]

《……》

「救急車のサイレンが聞こえてきた。」 [註23]

[註22]

『箱男』の最後から二章目の題。

[註23]

『箱男』の最後の章の題と、その題で書かれた文章の最後の一行。

### 3.4 《……………》 [註24] : 日本語はクレオール語である

ここでも明らかなやうに開幕のベルの鳴る「以前に」劇は「既にして」(超越論的時間)始まり終り、終り始まつてゐた/ゐる/ゐるだらう。ゐた/ゐる/ゐるだらう: 昨日/今日/明日。ゐた/ゐる/ゐるだらう: 過去/現在/未来。このやうに、私たち日本語は縄文紀元以来超越論の言語であるのです。日本語はtopologyの言語であり、存在論、それも汎神論的存在論の言語であるといふことです。

[註24]

見出しの《……………》は『箱男』の最終章の題名。

この日本語の規則に従ひ、即ち、《……………》の後の位置に「救急車のサイレンが聞こえてきた。」この「聞こえてきた」の「きた」はただ終はつてしまつてゐて現在に繋がつてゐない単純過去、もつといへば、単純完済過去ではないのです。

これは、英語ならば非現実話法であり、私の方のドイツ語で云へば接続法II式と云つて（英語と同じく）過去形から作る非現実の話法なのです。何故時間の存在しない話法が過去形から生成されるかは、私たちの言語の本質を、従ひ人間の思考論理の本質を表してゐます。このやうに、この言語の話法の問題は、存在論といふ哲学の問題であり、この哲学の問題は、接続法（Konjunktiv : conjunctive）といふ時間に関する接続と変形の言語規則の問題であり、これは此のまま接続と変形といふことから、数学ではtopologyと呼ばれる（日本語でいふ）位相幾何学なのです。論理の問題としては、文字で表すか数字で表すかの違いだけです。そして、これに記号が加はる。安部公房は数学者ですから、文字と記号を有機的に併用して、存在論と言語と数学を一つに統合して小説を書いた。勿論、数字も使用して、殊に3といふ数は地の文のみならず、小説の結構（構造）にまで及ぼして読者の目にも見えぬ形で使つた〔註25〕。

〔註25〕

『カンガルー・ノート』論（もぐら通信第66号から第84号まで）をお読みください。詳細に文章中の実例を挙げて精確に論じました。

開幕のベルの鳴る「以前に」〔註26〕劇は「既にして」（超越論的時間）始まり終り、終り始まつてゐた/ゐる/ゐるだらう。ゐた/ゐる/ゐるだらう：昨日/今日/明日。ゐた/ゐる/ゐるだらう：過去/現在/未来。〔註27〕このやうに、私たち日本語は縄文紀元以来超越論の言語であるのです。日本語はtopologyの言語であり、存在論、それも汎神論的存在論の言語、即ち安部公房が考へたやうに、

日本語はクレオール語である

といふことです。即ち、

古事記はクレオール語といふ日本語で叙述されてゐる。

この、漢字・片仮名・平仮名といふ文字表記の問題も含み、日本語といふクレオール語を読み解いた後世最初の人が、江戸時代は享保年間の伊勢松坂の箱男、本居宣長である。漢字に頼つてゐては古事記を読み解くことはできない。漢心（からごころ）を排するとは、この心であり、この箱男は此の心をやまと心と呼んだのです。私ならば、メタ・やまと心と呼びたい。

日本語は日本列島の上に生まれたクレオール語でありますから、大陸には勿論、日本列島以外



の島々にも、ない。といふことは、このやうに考へて来ますと、この事実は至極当たり前であるといふことになります。即ち、日本語はチョムスキーのいふ普遍文法（生成変形文法）の実例だといふことになります。日本語の文法が普遍文法、原・文法である。さうして、チョムスキーは言語の本質に迫りながら、日本語の冗長性が理解できないのであるのです〔註28〕。何故ならチョムスキーの母国語たる言語は英語（米語）といふアングロサクソン語だからです。

## 〔註26〕

さて、従ひ、このサイレンの音は次の『密会』の冒頭の人攫（さら）ひのサイレンの音にメビウスの環として一捻りされて接続・非接続されてゐる。このやうに安部公房の全作品群が一個の存在となつてゐることは『デンドロカカリヤ論（前篇）』（もぐら通信第53号）で詳述した通りです。

## 〔註27〕

本当は「みた/ゐる/ゐるだらう」の最後の「ゐるだらう」の「だらう」は、日本語本来の「既に過去である未来が現在出来してゐる」といふ超越論的な時制ではない。「だらう」では一次元の直線的な時間の未来といふアングロサクソン語の未来だからです。仕方がないので、明治以来欧米語の専門家たちは学者たちも含めて「だらう」といふ苦肉の策を採用した。ですから、日本語の「みた/ゐる/ゐるだらう」は、変な言ひ方ですが、「みた/ゐる/ゐた・ゐる」または「みた/ゐる/ゐる・ゐた」、要するに、私たちは「みた/ゐる」だけで十分といふことなのです。私たちの世界はキリスト教のやうな一次元の直線的な時間の存在する世界では全くない。超越論的な中今、即ち《今》があるだけで、キリスト教の云ふ未来はなく、従ひ、終末思想もなく、方舟思想もなく、従ひ選民思想も不要である。この彼我の違ひは大きい。あなたである（あなたの）私は、私と云ふ自分自身を思ひ出せば良いのです。

## 〔註28〕

『安部公房とチョムスキー（6）』（もぐら通信第78号）の「4.1 チョムスキーの疑問に回答する：日本語の持つ冗長性とは何か」に詳しく論じましたので、お読みください。今ここで結論を再度いへば、日本語の豊かな冗長性は「五十音表」または「五十音図」にあるのです。これは日本民族の代々継承すべき宝です。「五十音表」よ、恢復せよ。「五十音図」よ、恢復せよ。

対して、19世紀のヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、この日本語といふクレオール語の topologicalな接続・非接続性を膠着といふ用語で多分言ひ当てたのでせう。この膠着性の典型の一つが、本居宣長の発見した日本語の文の階層（レヴェル）での接続規則（後世云ふ）「係り結び」です。語の階層（レヴェル）には名詞ならば宣長が辞と云ふ「てにをは」に上位接続機能があり、動詞ならば助動詞に同じ機能がある。（助動詞とは何かといふ論は今ここでは控へます。）機能としてみれば、名詞であれ動詞であれ同じ二義的・二次的な（さう見える）接続機能が付いてゐる。これはこのまま古事記の一層目の片葉、即ち高天原0（と名付けた最初の折り紙の三角形）に「この時、大地はまだ若く、水に浮く脂（あぶら）のようで、海月（くらげ）のように漂っていて、しっかりと固まっていませんでした。ところが、葦の芽のように伸びてきたものから、宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましかびひこじのかみ）が成り、続けて天之常立神（あめのとこたちのかみ）が成り立」つて生まれる高天原1や、そのあと高天原の三階層と大八島の間を結ぶ天（あめ）の御柱の、伊耶那岐・伊耶那美の神のお立てになる（大八島から高天原への）上位接続（conjunctive）に同じ機能を有してゐる。特に、前者即ち高天原0に二義的・二次的な位置にあつて「海月（くらげ）のように漂っていて、しっかりと固まって」ゐない場所から「葦の芽のように伸びてきたものから」上方に伸びて来て成り高天原1を生み出す（三角形の折り紙を最初に開く）契機を産む神の名に「遅」という漢字を当てた太安

万侶と彼を支へた文章博士たちは十分に此の上位接続の意義、即ち時差といふ時間の遅延に関する縄文紀元の超越論を知つてゐたといふべきです。日本民族は、幼稚園の時から折り紙を通じて超越論を教はり、身につけてゐる。私たちは折り紙を折るたびに、縄文紀元に戻り、その魂（情）と精神（理）を思ひ出してゐる。私たちが千羽鶴を折る契機を数へ挙げてみては如何か。何故私たちは千羽鶴を折るのでせうか。同じものに袱紗（ふくさ）あり、風呂敷あり。かうしてみれば、折ることの延長に包むことがある。和服のための畳紙（たたうし）、商業に包装紙あり。ならば体を包む和服そのものあり。畳（たたみ）は何故畳と呼ばれ、畳の字が当てられるのか。畳は分かれてゐるやうに見えるが、実は私たちの意識下では畳（たた）んでゐるのではないのか。さうであれば、畳紙に帖紙の文字を当てて同じ訓読みをするのであれば、実は私たちにとって書物や本もまた畳なのではないか。即ち、本は袱紗であり風呂敷である。とすれば、絵巻物の形式（帖）の由来も説明もつく。となれば、私たちにとって巻くとは、包むことの一種であり、従ひ折ることの一種であるのではないか。これらはみな一筆書きの形式（form）であり様式（style）であり、即ち高天原由来のtopology（位相幾何学）であり、膠着語の日本語の特性である。

このやうに言語は非連続的に連続してゐる。あるひは連続的に非連続である。これは日本語だけのことではない。この言語的なtopologyを、私は概念連鎖と呼んでゐます。これが言語機能論です。安部公房曰く、言葉に意味はない、言葉に実体はない、言葉は函数であり、連鎖即ち文脈によつて意味が定まる。即ちあなたの其の言葉の使ひ方によつて意味が決まる。あなたは意味の運搬人ではない。あなたが日常仕事の上でも演技者であるならば、更にあなたが役者であるならば、一層にさうである。アリストテレス曰く、連想（association）は人類最高の能力である。かうであれば、アリストテレスもtopologyを知つてゐた。キリスト教といふ一神教のtopologyを逃れて本来の古代ギリシャの、汎神論に戻つてtopologyを思ひ出したのが17世紀のデカルトとライプニッツであり、この二人からの超越論の分岐が18世紀のカントから生まれた。この間（かん）しかし、近代ヨーロッパは超越論を等閑に付し、カントーヘーゲルからの共産主義が猖獗を極めた300年であつた。超越論の言語学者チョムスキーがアメリカにあつて激越な怒りを此の事実に対して表明してゐる事は諸処既述の通りです（この間、マルクス主義といふ共産主義、フランクフルト学派といふマルクス主義、globalismといふ共産主義が、マルクスの「共産党宣言」の冒頭の亡霊として徘徊するどころではない、これが20世紀に世界中を跳梁跋扈し、猖獗を極めた）。同じ超越論をスイスの言語学者ソシュールが唱へ、オーストリア人のヴィトゲンシュタインが唱へてゐるのは、これが本来の言語の姿であるからです。ヘーゲルを生み、ヘーゲルからマルクスを生み、言語の再帰性を絶対的に否定したキリスト教2000年に及ぶ罪は深いのです。埴谷雄高が『死霊』第7章《最後の審判》でチーナカ豆にイエス・キリストを弾劾せしめてゐる理由の一つです。

さて、本題に戻り、さうであれば、その次に成る神の名が天之常立神（あめのとこたちのかみ）であることは何ら不思議ではない。論理的な接続と変形の順序を漢字で書き表してゐる。即ち、これで天（あめ）の高天原1が（高天原0を含み）常（とこ）しへに立つたといふ意味の神が成つた。あるひは常しへに立てたといふ意味の神が成る。永でも久でもなく常といふ文字であるのは、これが日といふ時間の単位であれば、日永でもなく日久でもなく、日常にゐますからでありませう。年なら年に、月なら月に、時なら時に、分なら分、刻なら刻に天之常立神（あめのとこたちのかみ）はゐます。これは単位ですから、時間を超越して時間に無関係

である。即ち、高天原0も1もあなたの直ぐ側に存在してゐる。これは私の実感です。手を伸ばせば其処に記紀万葉までの縄文紀元が日常存在してゐる。かうして、

時間を超越して私たちは汎神論的存在論の世界に生きてゐる。

このtopologicalな、日本語といふクレオール語の接続論理は、古事記の中に幾らでもみることが出来る筈です。天地初発・国生み神話が最初から既にさうであることは、『Mole Hole Letter (5) : 超越論 (4) : 高天原2 : 八といふ文字』(もぐら通信第84号)にて実証的に、または実証主義的に(考古学的な物(ブツ)によるばかりではなく、論理の実証もあるでせう)、位相幾何学的(topological)に即ち汎神論的存在論(超越論)的に、証明した通りです。この汎神論的存在論の例、即ちtopologyの例は、同じ『Mole Hole Letter (5) : 超越論 (4) : 高天原2 : 八といふ文字』で出雲の国譲りの論理として、大和朝廷との接続関係の問題として、『出雲國造神賀詞』(いつもこくぞうかむよごと)といふ祝詞(のりと)のこととして具体例としてお話した通りです。

縄文紀元由来の此の高天原topologyを使つて、無文字紀元から有文字紀元に入つてみた平安時代の日本人がどのやうに漢字を片仮名と平仮名に変形させたか、この変形は何をそれぞれの仮名にあつて意味するのかは、別途稿を改めてお話しします。[註29]

[註29]

紀元概念と定義を『安部公房とチョムスキー(11)』(もぐら通信第93号)より引用します：

「14. 私たちは何をなすべきか

(略)

さう、安部公房の四権分立国體構想によつて日本の国家丸ごと贗国家、即ち《国家》に変形させてしまひませう。さうなれば、存在としての《国家》と現存在としての《国家》が存在することになります。これは、かうなるといよいよ、Deep Japanです。この二つの国家はtopologicalに等価交換が可能なのでした。さうして、この等価交換の出来ぬものは受け容れず、出来るものは受け容れることが出来る。これが、縄文時代以来の私たち日本人といふtopology民族の流儀でした。縄文時代といふよりも、1万5千年の時間の長さですから、千年紀などといふ言葉があるわけですから、縄文紀元と呼ぶ方が正しいと、私は思ひます。私たちの超越論、即ち汎神論的存在論の世界です。これを島嶼哲学と呼び、また秋津島哲学と呼んでもまた一向に差し支へはない。

縄文紀元といふ言葉の分類を以下に掲げます。これは、初期安部公房論[註19]を論じた時に行つた「時代>期間>時期>区分」といふ安部公房の創作活動の時間的分類の上に、紀元>世紀を加へたものです。これを英語にした場合に、この順序にして英語の概念同士で異同がないかどうかの吟味は後日としたい。文化とは言葉を正しく使ふことであるといふのが上述の私の文化の定義ですが、かうしたやうに先の戦争中までは日本人は言葉を正しく使つてゐたのです。例へば、紀元節[註20]といつたやうに。文化とは言葉を正しく使ふといふことです。

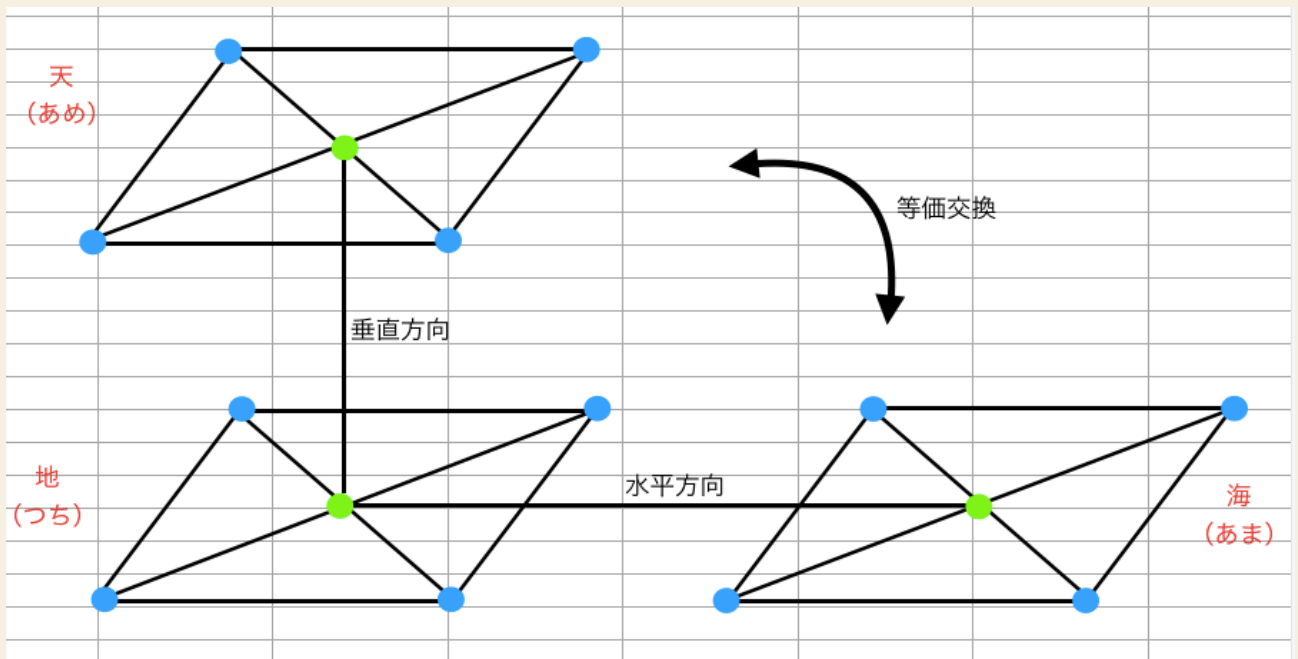
紀元(紀元1)>千年紀(紀元2)>世紀(百年紀:紀元3)>時代>期間>時期>区分

紀元2が千年紀といふ千年単位の紀元でありますから、紀元1の時間の単位は、1万年単位から五万年単位から10万年単位でも100万年単位でもよろしいと思ひます。紀元1は孫悟空の如意棒と同じで伸縮自在の概念です。紀元の紀と元の語源と概念を『字統』(白川静著)に尋ねてみて下さい。納得が行くはずで、ここでは省略して先を急ぎます。



この紀元・時間分類を下記の高天原topologyの基本モデルと比較をして日本の紀元を考へて みる事が大事です。その紀元の節目、即ち紀元節は、今思ふままに挙げてみますと、日本の歴史は超越論ですから、私たちの歴史には初めも終りもありませんが、敢へて此れまでの考察の順序に従つて紀元節を時系列に挙げて観ると大体次のやうなものがあるのではない でしょうか。

天地開闢の紀元節、国生み神話の紀元節、岩石文明習合の紀元節、瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)の天孫降臨の紀元節(天孫降臨の出発する場所は磐座である)、初代神武天皇即位の紀元節、陰陽五行習合の紀元節、神仏習合の紀元節、西洋近代哲学の超越論習合の紀元節(と云つても既に高天原topologyに1万5000年前からの縄文紀元に「既にして」(超越論的に)習合済みなわけですが)あるひは従ひ 此れを哲学習合の紀元節と呼んでも良い、そしてこれから先未来に、何百年何千年何万年先 に至るまで、やつて来る習合問題のための解決方法(method)も方法論(methodology)も、この『安部公房とチョムスキー』の連載に是迄明らかにした通りに、皆同じです。その方法論(Methodologie:methodology)と方法(Methode:method)であるtopologyを古事記の冒頭の天地初発・国生み神話に戻つて再度図示すれば以下の通り」:



付記:

三浦雅士氏の最新刊『孤独の発明 または言語の政治学』(2018年6月刊。講談社)は、この安部公房論の基礎になつてゐる考へを更に一層広く深化させ、同氏のこれまでの思索をまとめ上げたものです。装丁は、安部公房全集の装丁を担当した近藤一弥氏だといへば、そのスタイリッシュな(stylish:様式ある)白一色の装丁は想像がつくでしょうか。装丁、中身共に、安部公房の読者には、書店で装丁を見るだけといふ眼福に預かる事も含めて、お薦めの一冊です。

## 安部公房とチョムスキー (13)

### 目次

1. ヨーロッパ文明の近代とは何であつた/あるのか
2. 西洋近世哲学史の中の安部公房の位置
3. バロックとはどういふ時代か
  - 3.1 バロックとは何か
  - 3.2 バロック建築：差異の建築
  - 3.3 バロック文学：差異の文学
  - 3.4 バロック哲学：差異の哲学
4. チョムスキーの統辞理論とバロックの言語学：生成文法とポール・ロワイヤル文法
  - 4.1 チョムスキーの疑問に回答する：日本語の持つ冗長性とは何か
5. ポール・ロワイヤル文法とラシーヌ
6. 「2. 西洋近世哲学史の中の安部公房の位置」に関する
7. 一神教と大地母神崇拝をtopologyで読み解く
8. スコラ哲学は21世紀にも生きてゐる
9. ネットワーク・トポロジーの変遷でヨーロッパ文明の300年間を読む
10. 日本列島文明の視点から近世ヨーロッパ文明を相対化する：大地母神崇拝と一神教の文明間戦争
11. 言語の観点から明治維新の30年を総括する（150年）
  - 11.1 ヘーゲルの『歴史の哲学』の原題の誤訳を総括する
  - 11.2 『歴史の哲学』にある歴史の定義
  - 11.3 ヘーゲルのいふ歴史と国家と哲学の関係
  - 11.4 マルクス主義の理想の社会をまとめる
  - 11.5 キリスト教を切り捨ててヘーゲルの論理からマルクス主義が生まれた
  - 11.6 マルクス主義の歴史・共産党・社会・国家・国民・個人の関係
  - 11.7 マルクス主義と金融資本主義の関係
  - 11.8 時代の「曲がり角」は急激に「カーブの向かふ」へと「転身」してゐる
12. 言語の観点から第二次世界大戦後の日本を総括する（70年）
  - 12.1 United Nationsを国際連合と訳した欺瞞
  - 12.2 現行日本国憲法の欺瞞
13. 安部公房の国體変形論
14. 私たちは何をなすべきか
15. 誤訳時代の平成30年を総括する（30年）
  - 15.1 平成時代の30年を何と呼ぶか
16. 《東京裁判》を開廷する
17. 安部公房の縄文紀元論
18. 結語：安部公房とチョムスキー再度

青字は前回までに  
論じ終つたもの、  
赤字は今回論ずるもの、  
黒字はこれからのもの

休筆御免。次号を待たれたし。

哲学の問題 101  
(9)  
性 (SEX)

岩田英哉

休筆御免。次号を待たれたし。



## Mole Hole Letter

(12)

LGBTとは何か(2) : 人生相談

岩田英哉

過日、読売新聞紙の人生相談に偶々(たまたま)次の人生相談の投稿と回答を目にする機会があり、これは面白いと思つたので、この回答者の解決策、マルクス主義者の解決策、それに超越論者の解決策の三者三様の答へを掲載して、LGBT(量)ではなく、L,G,B,T(質)のT(トランスジェンダー)の問題を考へてみたい。加へて、マルクス主義と超越論が一体どれ位論理が異なるものかもお伝へできれば良いと思ふ。

### 1。人生相談(2018年11月1日朝刊)

「女装趣味隠していた夫

50代パート女性。60代の夫が女装しているのを知ってしまいました。

女性用の下着とカツラをつけて化粧をし、撮影しているのを昨年末、偶然見えました。道具は今も夫の車に隠されています。

以前も自宅に戻ってリビングルームのドアを開けようとしたら、夫から「ちょっと2階に行つて」と言われたことがあります。何をしていたのかと聞くと、「何で帰つて来たのか」と逆ギレされました。

今も働いてくれている夫ですが、無口で友人がいません。兄弟とも話さず、コミュニケーション下手だと思っていました。大学生になった息子には優しく、子育ても協力的でした。しかし息子も父親の女装を知ったらショックだと思います。

先日、女装した人が警察に逮捕されたとも聞きました。どんどんエスカレートしていくのが怖いです。

知っていると告げて話し合った方がいいのか、趣味として見て見ぬふりがいいのか、ご助言お願いします。

### 2。定例回答者(精神科医)の回答

異性の服を着る行為は「異性装」と呼ばれています。ご主人の場合は「女装」ですね。この行為自体は他人に迷惑をかけるわけでもなく、もちろん違法ではありませんから、まあ単なる趣味と言いたいところですが、ご家族がこれに嫌悪を感じれば家庭内騒動になりかねません。

あなたがなぜ嫌うかを考えてみると、第一に隠し事をされていたという生理的嫌悪もあるでしょうが、エスカレートして何か犯罪でも起こさないか、という心配も感じておられるようです。

しかし、異性装は犯罪とは全く無関係と言えます。ご相談の文中にあった女性した人

が逮捕された案件も、たまたま何か他の事件を起こしただけのことで、女装には関わりがないのでは？

これはもちろん生理的に許せない、という面が大きいことは理解できますが、相談文中にあるように、「見て見ぬふり」をしてやり過ごすのも一つの方法かな、と私個人としては思わないでもありません。とても良いご主人のようですし、個人の趣味によって、その良さをなくしてしまうのも、もったいないような気がしますから。

### 3。マルクス主義者の回答

夫婦とは昔から割れ鍋に閉ぢ蓋といはれてゐるやうに、それぞれが互ひに不完全ながら半分づつの役割を持ち、助け合ひながら生活するのが夫婦です。ヨーロッパの文化は偽善の文化ですから、実態は女性蔑視社会、女性奴隷社会であるにも拘らず、男は女といふ性に対してbetter half（より良い半身）などといふ嘘を平気でついてをります。その嘘に気づいて、男はworse half（より悪い半身）だと叫ぶのが世にいふフェミニズムでありフェミニストと自称他称の女性たちです。但し、この半身が縦に割つた半身なのか、横に割つた半身なのかで、フェミニストが分かれる。縦横に男女の区別があるものですか。勿論わたくしは横に割つた方の、下半身の方を愛するマルキストです。

さて、マルクス主義では人間も物質ですので、あなたも物質、ご主人も物質です。つまり『資本論』の価値論によつて単純明解なる回答を申し上げれば、あなたも半製品、ご主人も半製品なのです。それぞれが半分づつの価値を有してゐる。そうして、結婚して性の交換といふ市場価値が生まれて性に値段がついて、交換価値たる息子さんがお生まれになつた。この息子さんはお二人の完製品として生まれたわけです。一体結婚前のデート代の費用は総計幾ら？、それにお子さんの教育費用はどれ位お掛けになりましたか？費用対効果を計算して差し上げませう。

しかし、あなたの年齢は50代といふことですから、肉体といふ物質的な価値としての生殖能力はもはやないわけです。物質的に見れば、あなたはもはや女ではない。大相撲の土俵にだつて無断で上がったつて相撲協会は文句の言へない年齢なのです。これが50代の女性の素晴らしい女体ならぬ女体です。性を超越してゐる。うらやましい。あつ、わたくし女ですよ。

しかし、マルクス様は厳格なるユダヤ教のラビのご家庭のお生まれお育ちでありますから、男の女装などは決して許すことも赦すこともありません。

党のコンプライアンス管理部門にこの問題を照会しましたところ、ご主人は直ちに収容所に入れ、教育するを要するといふ回答でした。教育期間の長さはご主人の異性装の趣味の深刻度次第とのことです。

直ちにご住所とお名前をお知らせ下さい。ご主人を拉致するための人民解放軍を送ります。

もしあなたが共産黨員ではない場合には、あなたが性の問題から解放されるために、是非入党することをお薦めします。さうなれば、あなたは共産党の所有物であり、資産です。従ひ、あなたは党の奴隷であるからには、性の悩みのみならず、全ての悩みから解放されて、幸せな老後を送ることができませう。我が党には、退職者と其れ以後の年齢の者のためのLGBTと略称される下部組織があり、老後を幸せに過ごしてゐる高齢者が全国に大勢ゐます。皆あなたの仲間です。

LGBTとは、Life is Gone But Time is also goneのことです。さう、物質であるあなたには最初から死後の世界は存在せず、死ねば一貫の終はりなのです。

直ちにご住所とお名前をお知らせ下さい。黨員になれば一切のプライヴァシーはなくなり、あななの普段の日常生活での女性としての女装も否定されますので、裸で生きることになる。嘘のない正直な人生を送りませう。性による区別も差別もなくなりますので、さうなれば家の中でもご主人といふ半製品の女装趣味に思ひ患ふことは永遠になくなります。ましてや完成品の息子さんに於いてをや。息子が女だつて良いではありませんか。

万国の女装者よ、団結せよ！

#### 4。超越論者の回答

日本の精神科医の水準は非常に低く、かの『砂の女』で有名なる安部公房氏も東京帝国大学医学部に入る時に、当初は精神科の医者にならうとしたが、精神医学は余りにも程度が低くて科学とは呼び難いほどだつたので、精神科医にはならなかつたと或るインタビューで述べてみます。

あなたの悩みは相談の最後にある二者択一の問題であると思はれる：

「知っていると告げて話し合った方がいいのか、趣味として見て見ぬふりがいいのか」

回答者の精神科医の回答は後者の選択肢を薦めたと見えます。見猿言は猿聞か猿とは、マルクス主義者に特有の上部構造的態度です。この医者はマルクス主義者です。そんなイデオロギー人間のいふことを信じてはなりません。そもそも人生相談の回答者の資格がない。問題を混乱させるのみで、決して問題を解決しようとしなからず。

私は超越論者ですので全く違ひます。二者択一のそれぞれの項を否定して、第三の道を求めませう。二者択一は時間の中にゐる人間の型に嵌（はま）つた問ひに過ぎません

安部公房の耽読した詩人にリルケといふ『マルテの手記』を書いて有名な詩人がゐます。この詩人は子供の頃親から女装を強ひられて生活したことを35歳に此の作品の中で客観化して書いてみます。それから安部公房と親しかつたやはり著名な作家、三島由紀夫も子供の頃の想ひ出として、これは強ひられてではなく、自ら惹かれて女装をした記憶を処女作『仮面の告白』で書いてみます。

あなたのご主人はこれら天才と同等の能力をお持ちなのですから、普通に家庭の主婦として対処してゐても埒（らち）があきません。

あなたが毎晩男装してご主人を”あなた、お帰りなさい！”とお迎へするのが良いと私は結論します。女性の男装は日本では何も可笑しいことではない。宝塚の歌劇をご覧なさい。あれは皆女です。マルクスならば交換価値を持つ若い女たちだといふに決まつてゐますが、そんな詐欺的言辞に騙されてはいけません。あなたには男性といふ性と交換される生殖的な能力の有無を問はずとも、最初から男装といふ第三の道があつたのです。



勉強のために宝塚へ足を運ぶことをお薦めします。これは超越論の切符ですから片道切符です。二度と家には帰つて来ることはできません。その覚悟でお買ひ求め下さい。

この切符の値段と購入場所は新潮社刊の安部公房全集全30巻の背表紙の数字の中に暗号化されて隠されてゐますので、この暗号を解読する間はあなたは現実を忘れることができ、最愛にして不愉快なご主人のことも忘却するでせう。さうして不図或る時ご主人のことが忘却された記憶の中から想ひ出される。と、その時、ご主人が存在象徴としてどんな姿に変形してゐるかは保証の限りではありません。一番有名な変形は、赤い繭とかデンドロカカリヤとか水棲人間とか箱男とか……。いつれにせよ、あなたは現実であつたご主人のことなどすっかり記憶になく、ご主人の女装趣味に煩わされることは永遠になくなります。但し問題なのは、あなた自身が男に変形してゐるかもしれないことなのですが……。

でも、大丈夫です。今度は、あなたが女装すれば良いだけの話ですから……。

リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む

(36)

第2部 XI

～安部公房をより深く理解するために～

岩田英哉

XII

WOLLE die Wandlung. O sei für die Flamme begeistert,  
drin sich ein Ding dir entzieht, das mit Verwandlungen prunkt;  
jener entwerfende Geist, welcher das Irdische meistert,  
liebt in dem Schwung der Figur nichts wie den wendenden Punkt.

Was sich ins Bleiben verschließt, schon ists das Erstarre;  
wähnt es sich sicher im Schutz des unscheinbaren Grau's?  
Warte, ein Härtestes warnt aus der Ferne das Harte.  
Wehe —: abwesender Hammer holt aus!

Wer sich als Quelle ergießt, den erkennt die Erkennung;  
und sie führt ihn entzückt durch das heiter Geschaffne,  
das mit Anfang oft schließt und mit Ende beginnt.

Jeder glückliche Raum ist Kind oder Enkel von Trennung,  
den sie staunend durchgehn. Und die verwandelte Daphne  
will, seit sie lorbeern fühlt, daß du dich wandelst in Wind.

【散文訳】

変身を欲せよ。ああ、炎に歓喜せよ、  
その中では、幾多の変身を見せびらかし、誇示する物が、お前から遠ざかるのだ。  
地上的なるものを支配する、企図する精神、企画する精神は、姿の振動と跳躍の中に、転  
回点のような無を愛しているのだ。

留まることの中に閉じ籠るもの、それは既に硬直したものだ。  
硬直したものは、みすばらしい白髪の老人の庇護のもとに、安心して妄想に耽っているの  
だろうか。待て、最も厳しいものが、遠くから、厳しきものを警告している。  
傷ましいことだ、不在の鉄鎚（かなづち）が、打ち下ろそうと待ち構えているのだ。

源泉として自分自身を注ぐ者、この者を、認識することは、認識しているのだし、認識することは、この者を魅了して、明朗に創造されたものを通じて導くのだが、この明朗に創造されたものは、しばしば始めて閉じ、終りで始まるのだ。

どの幸せな空間も、分かれていることの子供であり、また孫であり、その空間を、子供や孫は驚きながら通って行くのだ。そして、変身したダフネは、自分が月桂樹を感じて以来、お前が風の中で変身するということを欲しているのだ。

### 【解釈と鑑賞】

前のソネットが、より明朗なる精神を歌っているので、ここでも精神と、明朗に創造されたものが歌われています。

お前と呼びかけられている相手は、オルフェウスです。

第1連のFigur、フィグーア、姿、第3連のdie Erkennung、エアケンヌング、認識すること、第4連のRaum、ラウム、空間、リルケの宇宙では、これらは縁語です。一言で言えば、みな同じこと（ものではない！）を意味しています。

Figurと言えば、entity、実在、存在を、entityと言えば、「-ung」で終わる動詞であり、即ち、そのまま空間を意識するのです。これらは一連の概念のあり方です。ですから、「認識すること」は空間なのであり、空間が何かを認識しているという意味になります。第1部ソネットXIの第1連第1行に歌われている

SIEH den Himmel. Heißt kein Sternbild «Reiter»?

### 【散文訳】

天を見よ。騎士座という星座はないのだろうか？

と歌われた星座、この星座というものは、点を結合して意味あるものとなされたこと、すなわちentity、実在に他なりません。大熊座、小熊座、天秤座、これらはentityです。あるいは、それらのentityの間に関係があれば（それは神話と呼ばれる）、それもentityです。また父と母という関係、親子という関係もentityです。そうすると家族もentity。そうです、これは関係概念なのです。人間が認識してそこにひとつの纏まりを知ったならば、それはentityと呼ばれます。そこには不思議な話しも生まれることでしょう。これは認識することの結果、生まれることです。認識の対象として、結合されて存在することなのです。これをリルケは、ソネットの中では、Figur、フィグア、姿と言っています。また、第1部ソネット



XIIの第2連、

HEIL dem Geist, der uns verbinden mag;  
denn wir leben wahrhaft in Figuren.

【散文訳】

精神において快癒せよ。精神は、わたしたちを結びつける。  
なぜならば、わたしたちは、真に、（結ばれて初めて形をなす）姿として生きているからだ。

このソネットXIIの第2連は、ひとことであるならば、わたしたち人間は、entity、実在に生きている、存在に生きていると歌っていることが、あらためてわかります。そうして、それをなさしめているのが精神であるといっている。そうして、精神は明朗なるものである。

さて、第1連で、「転回点」と一語に訳した言葉は、分かれる点と訳すことができます。むしろ、この方が原文の意味の流れに沿っていることでしょう。この分かれるという動詞のドイツ語は、wenden、ヴェンデンというのですが、この言葉は、やはり同じ第1部ソネットXIに、次のように歌われて出てきました。

Ist nicht so, gejagt und dann gebändigt,  
diese sehnige Natur des Seins?  
Weg und Wendung. Doch ein Druck verständigt.  
Neue Weite. Und die zwei sind eins.

【散文訳】

この、（名誉心という）存在の憧憬の性質は、このように、（狩猟でのように）狩り立てられ、そして、（手綱で）制御され、抑えられているのではないか？  
道と分岐点。しかし、そんなことはない、ある圧力が教え、解らせるのだ。そうして、新たな先へと続く。こうして、ふたり（の騎士）は、ひとつになる。

ここで「分岐点」と訳した名詞、wendung、ヴェンデウングが、動詞wenden、ヴェンデンから生まれた言葉だということは、その言葉の姿を見ればわかるでしょう。

それで、第4連の第1行に「分かれることの子供や孫」として出てくるのです。リルケがこのWendungやwendenという言葉を使うときにはいつも、それは別れではなく、全く逆のこと、即ちひとつになること、意思疎通、コミュニケーションを完全にして一体となることを意味しています。このソネットでも同じです。転回点とは、分岐点なのですが、それ

は、オルフェウスがひとつのものから次のものへ、ひとつの姿から次の姿へと変身するその変化点を言っています。それは、無です。変身は、無私の、私を喪う無償の行為でありました。そうして、その無、nichts、ニヒツは、「姿の振動と跳躍の中に」あるのですが、リルケがこの「振動」や「跳躍」という言葉、schwingen、シュヴィンゲン、それから生まれたSchwingung、シュヴィングングとかSchwung、シュヴングという名詞を使うときにはいつも、それは新しい生命の誕生を意味しています。新しい宇宙、新しい世界の誕生です。そのために、神々しい美しい若者が死を受け容れるということが、リルケの少なくともこの最晩年の詩の主題であることは、既に悲歌1番の最後の連で見た通りであり、オルフェウスもまた正にそのような人物として歌われています。

第3連の第1行「源泉として自分自身を注ぐ者、この者を、認識することは、認識している」とは、一見普通に考えると奇妙な文に見えるかも知れませんが、既に上でentityという概念を説明しましたように、また今までのソネットで何度か言及してきましたように、何々することという動詞を名詞化した名詞を使うときには、リルケはいつも空間を意識しており、この空間が認識するのであれば、それはドイツ語の言葉の使いかたとしては、あるいは英語もそうであると思いますが、少しもおかしいことではないのです。

認識するということがentityとして存在し、それはひとつの姿である。その姿が、惜しみなく我が身を与える者を認識するのです。認識によって創造された関係概念が、何かを認識する。わたしが、リルケの空間とは、言語の世界でいう概念のことを実は言っているのだということは何度か言及してきた通りです。そして、ひとつの概念は、ひとつの次元なのです。この次元をリルケはRaum、ラウム、空間といっています。このことを説明するには、もっと別の機会に言葉を尽くさなければなりません。

それでは、この空間は認識する以上何か意志ともいべきものがあるのでしょうか。それは生きているのでしょうか。そのことにリルケは正面から答えません。悲歌5番の曲芸師の歌で、かろうじてこのことに触れていますが、しかし、そこでもやはり正面から回答してくれておりません。しかし、リルケのこのような文を見ると、生命とは何かという問いは今仮に横に措いておくとしても、この空間は主語になり得る以上、わたしには生きているように見えます。さらにしかし、リルケの空間は、内と外の交換、即ち息をする、atmenということによって交換されるのでした。ですから、交換ということによって移動する空間です。この交換をなさしめている力があることをリルケは知っていたでしょう。さらにしかし、その力を何かの名前で呼ぶことをリルケはやはりしないのです。神とは呼ばない。神もまた悲歌8番でみたように、そう呼べば、それは空間なのです。なぜならば、神もまた概念であり、ひとつの次元だからです。これがわたくしのリルケの空間の解釈です。

第3連の「この明朗に創造されたものは、しばしば始めで閉じ、終りで始まるのだ。」という意味は、精神は明朗であり、そのような精神の創造したものは、offen、オフエン、開かれていると言っているのです。「始めで閉じ、終りで始まる」点があれば、それは「分岐

点」でありましょう。同時に、それは、無私の変身の無の一点。それを企図する精神は愛するのだ。それをリルケは歌っています。この企図する精神は、第2部ソネットXXIVには、冒険者たちと呼ばれて歌われています。その冒険者たちの精神は、次のように歌われている。

Götter, wir planen sie erst in erkühnten Entwürfen,  
die uns das mürrische Schicksal wieder zerstört.

#### 【散文訳】

神々を、わたしたちは、神々を、敢然たる企図の中で計画するが、その企図、企画は、気むつかしい運命が再び破壊してしまう。

さて、第4連、最後の連では、もしそのひとが幸せであるならば、つまりリルケ流に言えば、幸せの空間にいるならば、それは、別れ、分離、Trennung、トレヌングがあって、その功德の御蔭だといっています。功德の御蔭とは、日本人のわたしのものの言い方ですが、リルケならば、上に散文訳したように表現するのです。わたしたちの精神がもし無私の変身を遂げる努力をするならば、世代を隔てて、その因果はわからないけれども、必ず結実することなのでしょう。それは、その空間は、ひとびとを幸せにすることなのです。そうであれば、アポロンの求愛を逃れるために月桂樹に変身したダフネも、オルフェウスが風の中で変身することを欲している。わたしたちは、それぞれ一体誰なのでしょう。わたしたちは、それぞれ誰かの変身した姿ではないのでしょうか。そのように思われてなりません。そのような変身した姿の者として、わたしたちは会っているのではないのでしょうか。

#### 【安部公房の読者のためのコメント】

第一行目早々に初期安部公房の作品に頻出する「転身」が出て来ます。

この詩は十代の安部公房にとって意義のある詩であつたのです。

私の上の訳は「変身」としてありますが、これは「転身」とはオルフェウスがさうであるやうに、これは連続的な変身を意味してゐます。これが、リルケの変身であり「転身」です。詳細は『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第56号から第59号）をお読みください。安部公房がどのやうに詩人から小説家に「転身」し、その後も終生「転身」し続けたかが叙述されてゐます。

この初期安部公房の用語「転身」といふ言葉の全体の意味、即ち概念を理解することは、安部公房の読者にとつてとても大切です。



『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第57号）より少し長い引用をします：

## 「II 「転身」といふ語について: 「転身」とは何か

「「転身」とは何かと問へば、それは、リルケが詩の中で使ったドイツ語、die Verwandlung (デイ・フェアヴァンデウリング)の日本語訳であるといふことになります。

(略)

結論から言ひますと、先の戦争までのリルケの詩の訳語について言へば、リルケの翻訳詩集の訳語を見ると、戦前はVerwandlung(フェアヴァンデウリング)を転身と訳し、先の戦争後は、転身を変身といふ訳語に変へて、ドイツ文学者たちは、Verwandlung(フェアヴァンデウリング)を訳してをります。

具体例を挙げますと、片山敏彦訳の訳による『リルケ詩集』（新潮社版、昭和二十一年）に所収の『オルフォイスへのソネット』第二部第XII章では、転身の語が詩の中に次のやうに3回出てきます。かうして見ますと、平俗に考へれば、訳詩にある「転生」（これもVerwandlungの意識）とは「転身」の結果、次の世に生まれ変はることを意味するのでありませう。一行目の「転身」の原語はVerwandlungではなく、類縁の語のWandlungです。訳者は同義と解釈して、前者の訳と同じ訳語をあてがつてゐます。

『オルフォイスへのソネット』の各連は一篇の詩と呼んで良いものですが、どの篇も無題です。片山敏彦は一篇の最初の第一行を採用して、当該篇の詩の題名としてをります。

「轉身を欣求せよ

轉身を欣求せよ、おお 焔の爲に感激せよ、

その火の中で、轉生を仄めかす或るものが、君からすり抜けて過ぎる 焔のために感激せよ。現世のものを統べてゐる、常に企ててゐるあの靈は ものの姿の勇躍の中に唯 轉身の曲がり角だけを愛する。

(略) 君が轉身して風と成ることを望んでゐる。」(傍線筆者)

「轉身の曲がり角だけを愛する」といふ一行に、『カーブの向う』や『燃えつきた地図』の主題と動機(モチーフ)を、また『箱男』に挿入されたカーブミラーの写真の主題と動機(モチーフ)を、そしてカーブミラーの立つてゐる存在の十字路を、容易に見てとることができます。何故なら、十字路といふ曲がり角にカーブミラーは立つてゐるからであり、角を曲がらなくとも超越論的に「既にして」カーブの向うを知ることができるからです。

ちなみに「轉身の曲がり角だけを愛する」といふ訳の「曲がり角だけを」の原文は、"nichts wie den wendenden Punkt"となつてゐて、この"den wendenden Punkt"といふドイツ語の意味は其のまま訳せば、「転ずる点」、「転回する点」、もつと意味の判

るように強調して訳せば「転じ続ける点」「転回してゐる点」といふ意味で、その点は曲がつて其れ自身を転じてゐる点といふ意味ですので、単なる其処にあるといふ「曲がり角」なのではなく、曲がり角が移動する其の転じて行く曲がり角を本来意味してゐます。

また、「君が轉身して風と成ることを望んでゐる。」といふ最後の行の風もまた、安部公房が Rilke に学んだ存在の風、即ち「轉身」することのできる場所としての存在の風なのです。風はどんな障害物があつても、その向かうでいつも一つに、即ち1に、従ひ存在になる。この風は読者の記憶に応じて作品の中から吹いて来ることとせう。『第四間氷期』の最後に水棲人間が憧れて死にゆくに際して吹いて来る風です。

さて、同じ訳者の同じ Rilke の作品から、「静かな友よ」で始まる第二部第XXIX章、即ち此の作品の最後の連の一篇を。

「静かな友よ

数々の遙かさに生きてゐる静かな友よ、感じたまへ君の呼吸が更に拡がりを増してゐるのを。真暗な鐘楼の中全體に音と成つて轟きたまへ。君を食ひほろぼすものが一つの力と成るのだ一糧である君の上方(うえ)で。出で入りたまへ、轉身の道程を。(略)」(傍線筆者)

「真暗な鐘楼の中全體に/音と成つて轟きたまへ。君を食ひほろぼすものが/(一行の余白)/一つの力と成るのだ一糧である君の上方で。」とある三行を読みますと、安部公房の作品の中では、いつも人攫(さら)ひの登場とともに鳴る救急車のサイレンの音を思ひ出すことができます。確かに、さうやつて攫はれた後の「轉身の道程」は、『第四間氷期』であれ『密会』であれ『カンガルー・ノート』[註1]であれ、一日の幕の開く前の夜明けに鳴り響いた甲高い音の繰り返しの呪文の音の後には、地獄巡りの道程が始まる。

(略)

2. 1 ユァキントゥスとS・カルマ氏の関係:かくして安部公房は詩人から小説家への「轉身」に成功した

(略)

(2) 詩:『嘆き』:「身をひるがへし」:全集第1巻、123ページ(1回)

「身をひるがえし消え行くを  
吾が宿命(さだめ)とは知れるなり  
おゝされど 吾尚ほ君を愛すれば  
吾尚ほ君を愛すれば」(傍線筆者)

ちなみに、上の4行に続いて間断なく続いて此の詩の最後にある次の5行は、リルケの『オルフォイスへのソネット』の第二部第XII章からの引用と変奏によるものです。この5行のうちの最後の2行は、安部公房がリルケから何を独自に学んだかを示してをります。さうして、「欣求」(ごんぐ)といふ仏教用語の選択は、高校生の安部公房が上にも言及した片山敏彦訳の『オルフォイスへのソネット』を読んだことを示してをります。

「花ほころびてあふれしは  
かの\*外国(とつくに)の歌人の  
嘆きに満ちし欣求の声ぞ  
— 外(と)の面(も)にて 君にし遭はゞ嬉しきものを  
君にし遭はゞ嬉しきものを

\*.....リルケの事。

(略)

## 2. 2 安部公房はリルケから何を独自に学んだか

上記二つの第二部第XII章の片山敏彦訳と安部公房独自の『嘆き』の最後の連の引用を比較すると「安部公房がリルケから何を独自に学んだか」と問へば、次のことがわかるといふ答へになります。

### 1. 悲しみ

「嘆きに満ちし欣求の声」とあるので、「転身」は人との別離であつて、この別離は悲しみであり、それ故の嘆きが生まれるといふこと。リルケの詩には、この嘆きはない。これが、安部公房の小説の持つ哀愁、哀切な感じの源ではないだらうか。リルケはむしろ焔に歓喜を求めてゐる。あるいはオルフォイスは焔に身を投じて、我が身を焼くのかも知れない。

### 2. 愛と別離

「転身」によつて詩人は愛する人と永遠に別離するのであるが、しかし、その別離の遙かな距離が、その愛の証明であること。遙かな距離にあつても、詩人自身の意志する「転身」によつてたとへ別れても、詩人は「吾尚ほ君を愛す」るのであり、いや「吾尚ほ君を愛すれば」こそ、別れるのであるといふこと。この愛すればこそ別れる、進んで別れて愛の証明とするといふ考へ、この愛といふことに関する考へが、リルケにある愛は遙かな距離にあることに留まつて歌つてゐるのに対して、安部公房の遙かな距離にあつては、別離と愛といふことのこの後者、即ち愛がより一層強調され、強く別離の悲しみと分かち難く結びついてをります。そして、これは女性への愛といふよりも、男性の友への愛である。[註10]これが安部公房の愛の特徴です。



## [註10]

「贗月報」(安部公房全集第24巻)に安部公房スタジオの俳優であつた佐藤正文が、稽古場で安部公房の口にした愛といふ言葉について、その驚きを次のやうに回想してしてゐる。後期20年の安部公房が、リルケの詩の世界と自己の詩の世界への回帰だといふことの、これは証言といふ事がいへるでせう。そして、ここで安部公房が若い役者たちに伝へたかつた愛とは、存在と別離と自らの死と、即ち「転身」の事なのであること、これは存在の十字路にあつて初めて愛は現実のものとなるのだ、この十字路に存在する事が、ニュートラルといふ言葉の意味なのだ。と伝へようとしたのだといふ事が、よく解ります。

「稽古の前の話でとくに印象に残っているのはね、最後は愛なんだっていう話になつたことがあつたんです。なにかどうしても解決できないことがあつて、どうしたらこれが解決できるだろうか、乗り越えられるだろうか、っていう時に、何だと思ふ、しつこくみんなに聞いて、わかんない、なにも答えがでなくつて。愛なんだよって。あのときはびっくりしたな。理詰めになつて分析していつてね。で、これどうするって話じゃないですか。突然これ解決するのは愛なんだって。愛しかないんだって。それから、付け足したんです。でも、最後は愛しかないんだよ、っていうふうに言うと、既成のある小説家の名前を挙げて、それと一緒にされるからけつして言わないけどね、つて。それから覚えてゐるのは、二十一世紀の大きなテーマとして弱者の救済っていうのがあつたはずなのに、つて。弱者の救済、弱者への愛っていうのがテーマだつて。そんな話をしてからですよ。『仔象は死んだ』をやつたのは。」

さうして、ここで安部公房の語つた弱者の救済の弱者とは、例を挙げれば『没我の地平』の「主観と客観」の詩にある「木の間 木の間」に蹲る、人知られずに無償の人生を存在の中で生きる何者か、時間的・空間的な差異(十字路)に存在する無名の人間のことをいつてゐるのです。即ち「既成のある小説家」が恐らくは書いてゐたやうな通俗的な弱者などでは全然ないのです。『仔象は死んだ』といふ戯曲は、やはり安部公房の理解をして自家薬籠中のものとしたリルケが姿を変へて、存在の舞台として現れてゐるのです。

### 3. 外面

「外(と)の面(も)にて 君にし遭はゞ嬉しきものを」[註11]

これは、『他人の顔』の論理に通じてをりませう。予め喪はれた顔は、予め喪はれたものでありますから、従ひ案内人であり[註12]、また其の形状たる凹(窪み)は、『砂の女』の砂の穴の凹(窪み)と同様に、存在であるか又は遙かな距離と時間といふ差異をゼロにすることによつて存在になり得る、凹(窪み)といふ差異に存在する何かでありますから、この「外の面」と呼ばれる外面もまた詩人が窪みをつけて、もぐらのやうに手で其の面を搔き出して、即ち書き出して言語化して[註13]、この交換関係により動的な境界が生まれる訳ですから、この場所で「君にし遭はゞ嬉しきものを」と、安部公房は歌ふのです。

この場所とは、動的な交換可能の関係、即ち動的な接続関係のことであり、言ひ換へれば、いふまでもなく、存在のことです。安部公房は、自ら意志する「転身」による愛する人との別離によつて生まれる遙かな距離をゼロにするために、あるいは其れが成就したならば、存在の中で再び「遭ふ」ことができると考へた。

「会ふ」のではなく「遭ふ」のですから、日時を決めて会ふのではない、日時など存在し

「会ふ」のではなく「遭ふ」のですから、日時を決めて会ふのではない、日時など存在しない無時間の接続点で、何も凶らずに出あふといふこと、これが「遭ふ」といふことなのです。これが、安部公房の念じた無償の人生、箱男の人生です。勿論、向かうから(主人公の意志とは無縁に)やつて来るのが、人さらひです。勿論人さらひがいつやつて来るのか、主人公は知らない。従ひ凝つと待つ、機が熟するのを待つ以外にはない。これが社会であれ思考論理であれ閉鎖空間から脱出する唯一の方法であり、同時に方法論である、即ち「問題下降に依る肯定の批判」であり、『詩と詩人(意識と無意識)』に論理的に叙述されてゐる、無償の「転身」の果ての果てにやつて来る僥倖であり、遂に眼にする究極の反照、即ち存在、なのです。[註14]

第一連の第三行目にある、

「地上的なるものを支配する、企図する精神、企画する精神は、姿の振動と跳躍の中に、転回点のような無を愛しているのだ。」

といふ「企図する精神」と訳したドイツ語は「jener entwerfende Geist」であつて、この”entwerfen”（エントヴェールフェン）といふ動詞は名詞では”Entwurf”（エントヴァウルフ）となつて、ハイデガーが独自に用ひた用語にほかなりません。この解釈は、偶然の場合を除けば、三つ有り得ます。

(1) ハイデガーが Rilke の『オルフェウスへのソネット』の此の詩の此の連を読んで触発されて、精神との関係で、時間とは何かといふ問いに答へるために役立つといふ解釈。これが一つ。二つ目は、

(2) 当時ドイツの思想界または言論界で、この”entwerfen”（エントヴェールフェン）といふことが盛んに論じられてゐて、この言葉が流行してゐたといふ解釈です。

(3) 上記の二つを、その因果関係は問はず、ハイデガーが併せて使つた場合

ハイデガーと全く同時代人でシュンペーターといふ経済学者がゐます。この人は innovation（イノベーション：革新、新機軸）といふ言葉を提唱した人で、この新機軸を打ち出す人を経済の世界で起業家（entrepreneur：アントレプレネア）と呼んださうですから、さうであれば、この言葉に関係して、言論界に”Entwurf”（企画；設計）といふ言葉が流行することは一層不思議ではありません。しかし、日本語に「投企」と訳してはよくわかりません。「投企」とは要するに普通に誰でもが自分の人生を自分で設計するといふことです。

私のお伝へすることは【解釈と鑑賞】に書いたことに尽きてゐますので、安部公房が Rilke を論理的に読んで学んだ、次の三つのこと、即ち、

- (1) 悲しみ
- (2) 愛と別離
- (3) 外面

といふ三つの言葉を、第三連の、

「源泉として自分自身を注ぐ者、この者を、認識することは、認識しているのだし、認識することは、この者を魅了して、明朗に創造されたものを通じて導くのだが、この明朗に創造されたものは、しばしば始めて閉じ、終りで始まるのだ。」

といふ三行を、『終りし道の標べに』の冒頭の一行「旅は歩みおわった所から始めねばならぬ。/墓と手を結んだ生誕の事を書かねばならぬ。」と照らし合はせると、この小説ならぬ小説の処女作の主人公もまた、確かに「源泉として自分自身を注ぐ者」であり、作者は「この者を、認識することは、認識しているのだし」、作者は「源泉として自分自身を注ぐ者」を「明朗に創造されたもの」即ち作品を「通じて導くのだが」、「この明朗に創造されたものは、しばしば始めて閉じ、終りで始まるのだ。」といふリルケの言葉の意味が理解されるでせう。勿論、この始めと終わりの論理は、論理だけに焦点を当てれば、ニーチェの論理でもあるのです。

「この明朗に創造されたもの」とは、「記念碑を建てようとすることはそれ自体君を殺した理由につながるのかも知れぬが……。」といふエピグラフを以つて、以後《金山時夫》を殺し続けることによつて生まれる、安部公房の作品中の全ての存在のことである。と、このやうにリルケの詩を読みますと、いふことができます。

金山時夫を存在の友として殺し続けること、これが安部公房にとつては「自分の墓を暴け」といふ言葉の意味であつた〔註1〕。何故なら金山時夫といふ『リルケのオルフェウスへのソネット』を共有して、無私の人生を生きようと誓い合つた最も親しき此の詩の友は、もう一人の自分、即ち「僕の中の「僕」」であつたからです。

〔註1〕

安部公房スタジオの若い役者たちに向けて言つた、安部公房の言葉。



## 連載物・単発物次回以降予定一覧

- (1) 安部浅吉のエッセイ
- (2) もぐら感覚23：概念の古塔と問題下降
- (3) 存在の中での師、石川淳
- (4) 安部公房と成城高等学校（連載第8回）：成城高等学校の教授たち
- (5) 存在とは何か～安部公房をより良く理解するために～（連載第5回）：安部公房の汎神論的存在論
- (6) 安部公房文学サーカス論
- (7) リルケの『形象詩集』を読む（連載第15回）：『殉教の女たち』
- (8) 奉天の窓から日本の文化を眺める（6）：折り紙
- (9) 言葉の眼12
- (10) 安部公房の読者のための村上春樹論（下）
- (11) 安部公房と寺山修司を論ずるための素描（4）
- (12) 安部公房の作品論（作品別の論考）
- (13) 安部公房のエッセイを読む（1）
- (14) 安部公房の生け花論
- (15) 奉天の窓から葛飾北斎の絵を眺める
- (16) 安部公房の象徴学：「新象徴主義哲学」（「再帰哲学」）入門
- (17) 安部公房の論理学～冒頭共有と結末共有の論理について～
- (18) バロックとは何か～安部公房をより良くより深く理解するために～
- (19) 詩集『没我の地平』と詩集『無名詩集』～安部公房の定立した問題とは何か～
- (20) 安部公房の詩を読む
- (21) 「問題下降」論と新象徴主義哲学
- (22) 安部公房の書簡を読む
- (23) 安部公房の食卓
- (24) 安部公房の存在の部屋とライプニッツのモナド論：窓のある部屋と窓のない部屋
- (25) 安部公房の女性の読者のための超越論
- (26) 安部公房全集未収録作品（2）
- (27) 安部公房と本居宣長の言語機能論
- (28) 安部公房と源氏物語の物語論：仮説設定の文学
- (29) 安部公房と近松門左衛門：安部公房と浄瑠璃の道行き
- (30) 安部公房と古代の神々：伊弉册伊弉諾の神と大国主命
- (31) 安部公房と世阿弥の演技論：ニュートラルといふ概念と『花鏡』の演技論
- (32) リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
- (33) 言語の再帰性とは何か～安部公房をよりよく理解するために～
- (34) 安部公房のハイデgger理解はどのやうなものか
- (35) 安部公房のニーチェ理解はどのやうなものか
- (36) 安部公房のマルクス主義理解はどのやうなものか
- (37) 『さまざまな父』論～何故父は「さまざま」なのか～
- (38) 『箱男』論II：『箱男』をtopologyで解説する
- (39) 安部公房の超越論で禅の公案集『無門関』を解く
- (40) 語学が苦手だと自称し公言する安部公房が何故わざわざ翻訳したのか？：『写真屋と哲学者』と『ダム・ウエイター』
- (41) 安部公房がリルケに学んだ「空白の論理」の日本語と日本文化上の意義について：大国主命や源氏物語の雲隠の巻または隠れるといふことについて
- (42) 安部公房の超越論

- (43) 安部公房とバロック哲学  
 ①安部公房とデカルト：cogito ergo sum  
 ②安部公房とライプニッツ：汎神論的存在論  
 ③安部公房とジャック・デリダ：郵便的 (postal) 意思疎通と差異  
 ④安部公房とジル・ドゥルーズ：褻といふ差異  
 ⑤安部公房とハラルド・ヴァインリッヒ：バロックの話法
- (44) 安部公房と高橋虫麻呂：偏奇な二人 (strangers in the night)
- (45) 安部公房とバロック文学
- (46) 安部公房の記号論：《 》 〈 〉 ( ) [ ] 「 」 『 』 「……」
- (47) 安部公房とパスカル・キニャール：二十世紀のバロック小説 (1)
- (48) 安部公房とロブ＝グリエ：二十世紀のバロック小説 (2)
- (49) 『密会』論
- (50) 安部公房とSF/FSと房公部安：SF文学バロック論
- (51) 『方舟さくら丸』論
- (52) 『カンガルー・ノート』論
- (53) 『燃えつきた地図』と『幻想都市のトポロジー』：安部公房とロブ＝グリエ
- (54) 言語とは何か II
- (55) エピチャム語文法 (初級篇)
- (56) エピチャム語文法 (中級篇)
- (57) エピチャム語文法 (上級篇)
- (58) 二十一世紀のバロック論
- (59) 安部公房全集全30巻読み方ガイドブック
- (60) 安部公房なりきりマニュアル (初級篇)：小説とは何か
- (61) 安部公房なりきりマニュアル (中級篇)：自分の小説を書いてみる
- (62) 安部公房なりきりマニュアル (上級篇)：安部公房級の自分の小説を書く
- (63) 安部公房とグノーシス派：天使・悪魔論～『悪魔ドゥベモウ』から『スプーン曲げの少年』まで
- (64) 詩的な、余りに詩的な：安部公房と芥川龍之介の共有する小説観
- (65) 安部公房の/と音楽：奉天の音楽会
- (66) 『方舟さくら丸』の図像学 (イコノロジー)
- (67) 言語貨幣論：汎神論的存在論からみた貨幣の本質：貨幣とは何か？
- (68) 言語経済形態論：汎神論的存在論からみた経済の本質：経済とは何か？
- (69) 言語政治形態論：汎神論的存在論からみた政治の本質：政治とは何か？
- (70) Topologyで神道を読む (1)：祓詞と祝詞と結界のtopology
- (71) Topologyで神道を読む (2)：結び・畳み・包みのtopology
- [シャーマン安部公房の神道講座：topologyで読み解く日本人の世界観]
- (71) 超越論と神道 (1)：言語と言霊
- (72) 超越論と神道 (2)：現存在 (ダーザイン) と中今 (なかいま)
- (73) 超越論と神道 (3)：topologyと産霊 (むすひ) または結び
- (74) 超越論と神道 (4)：ニュートラルと御祓ひ (をはらひ)
- (75) 超越論と神道 (5)：呪文と祓ひ・鎮魂
- (76) 超越論と神道 (6)：存在 (ザイン) と御成り
- (77) 超越論と神道 (7)：案内人と審神者 (さには)
- (78) 超越論と神道 (8)：時間の断層と分け御霊 (わけみたま)
- (79) 超越論と神道 (9)：中臣神道の祓詞 (はらひことば) をtopologyで読み解く：  
古神道の世界観
- (80) 三島由紀夫の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
- (81) 安部公房の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一

- (82) 『夢野乃鹿』論：三島由紀夫の「転身」と安部公房の「転身」
- (83) バロック小説としての『S・カルマ氏の犯罪』
- (84) 安部公房とチョムスキー
- (85) 三島由紀夫のドイツ文学講座
- (86) 安部公房のドイツ文学講座
- (87) 三島由紀夫のドイツ哲学講座
- (88) 安部公房のドイツ哲学講座
- (89) 火星人特派員日本見聞録
- (90) 超越論（汎神論的存在論）で縄文時代を読み解く
- (91) 「『使者』 vs. 『人間そっくり』」論





●荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む(12)：虫族の詩(うた)：この詩集中二番目に短い詩が、この詩です。安部公房の『倦怠』と『夢と夢』を思ひ出すとは。かうしてみますと、何かの折に触れて、そのひとのことを思ひ出すといふ私たちの意識の働きは、それだけでそのひとの供養をしてゐるといふことなのかも知れません。そのためには、やはり、思ひ出されることの契機となる当の作品もまた優れたものであるに違ひありません。●『周辺飛行』論(7)：3。『周辺飛行』について(4)：自己犠牲一周辺飛行4：思ひもかけずに、ここでも三島由紀夫の形象化された二等航海士が登場しました。きつとこの極限状態を想定した議論を二人はしたのでありませう。さういへば、三島由紀夫が安部公房に言つたと安部公房が記録してゐる前者の言葉、国内に反乱が起きたら僕の家地下壕に匿つてやるから、今から食事の量を減らしてをくようにといふ言葉は、この極端な状況設定での議論であつたのではないでせうか。さうであれば、三島由紀夫が登場して、二等航海士になるのはわかります。また、きつと食料といふことから、どうやつて露命を繋ぐかといふ話になつて、安部公房は、俺は餃子が得意だといふ話になつたのかも知れない。と、想像することは楽しい。●Rongo Rongo：ヴォイニッチ手稿：まさかマルクス主義者にブル代数の創始者の娘がゐるとは知りませんでした。結局、私たちはヨーロッパの近代史を余りよく知らないのではないでせうか。まあ、安部公房を巡つて解ることが多いこと、多いこと。彼我の違ひがいよいよ明確になつて一線を画することが論理的にもできて、いよいよいい時代になつて来ました。もつとも部屋の外は嵐が吹き荒れ、雨風が激しいが、少年時代の、奉天の二階の部屋にゐる安部公房はいふかも知れないが。●[贗月報30]三浦雅士『安部公房の座標』：「安部公房の座標」から何が解るか：折に触れて眺めてみる此の安部公房論でしたが、本格的に文章の中に入つて行くと、思つた通りの優れた安部公房論でした。率直な感想を言へば、前期20年の作品を評価して、後期20年の作品を評価しない読者は、突然『箱男』から非ユークリッド幾何学(超越論)の世界に変じたやうに見えるので、安部公房に戸惑つた読者ではないでせうか。前期20年の失踪3部作は写実主義ではない。安部公房は此れを足し算の文学といつて否定しました。●安部公房とチョムスキー(13)：17.安部公房の縄文紀元論：休筆御免。●哲学の問題101(9)：性(sex)：休筆御免。●Mole Hole Letter(12)：LGBTとは何か(2)：人生相談「女装趣味隠していた夫」(読売新聞)：これは書いてみておもしろかつた。なるほど、マルクス主義と超越論はこれ程に違ふものか。マルクス主義の延長にあるLGBT共産主義を声高にいふ輩は、人間の生殖行為を否定してゐる訳であるから、いつそのこと山に籠つて坊主になつては如何か？男は坊主、女は尼さん。あつ、これも性差別か？さうか、彼奴らは坊主頭とはいははないのだな。さうであれば、尼頭か。あつ、これも女性蔑視か？それなら坊主頭も差別であらう。要するに差別は悪だといふ考へが悪なのである。それではクルクル頭は如何だ？『新徒然草』の出だしは、さすれば、”第〇段 昔〇〇の大僧正ありけり。その頭殊にクルクルとて、世に知られたるものなれば、一目見むとて遠国よりも遙々と来つものどものあるとかや。”とでもなるのか？言葉を巡つて、こんな馬鹿馬鹿しいことが日常茶飯事になつては、日本の文学もクルクルパーになつて衰退するな。結局、古典に戻ることにあります。井伏鱒二の名訳を借用すれば、花に嵐のたとへもあるぞ、勉強だけが人生だ。●リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む(37)：第2部XII：“幾多の、死の、静かに何の変哲もなく秩序立てられた規則が成立した、”：この詩は、記念碑を建ててはならないといふ詩とともに、安部公房の好んだ詩と見えます。金山時夫といふ詩の世界を共有した親しき友を殺し続けると同時に、安部公房は自分自身を虚構の中で殺し続けた。安部公房がどこかで質問してみた、ボートに二人ゐて、どちらか一方が死ねばどちらかが生きるといふ状況下でさてあなたならどうするかといふ質問を発して、殺しあひではなく、二人が同時に海に身を投げて死ぬといふ選択肢があるのだといふ事を言つてゐますが、全くその通りの作家人生でした。二項対立の否定をして、第三の道を探めるとは、かくなる上は死出の旅の道を行くといふ事になります。

差出人：

贗安部公房

〒182-0003東京都調布  
市若葉町「閉ざされた無  
限」

次号の原稿締切は超越論的にありません。いつでもご寄稿をお待ちしています。

次号の予告

1. 『周辺飛行』論(8)
2. 荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む(13)
3. 安部公房論『現在へむかうベクトル』：伊藤典夫
4. 安部公房とチョムスキー(12)：安部公房の縄文紀元論
5. 私の本棚：映画『アイアン・スカイ』を読む
6. 哲学の問題101(9)：性(sex)
7. 大久保房雄を読む(1)
8. リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む(38)
9. Mole Hole Letter(13)：超越論(6)：日本人はtopologyで如何に漢字を二つの仮名に変形したか：片仮名とは何か、平仮名とは何か



【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、有識者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけるとありがたく存じます。（順不同）

近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、中田耕治様、宮西忠正様（新潮社）、北川幹雄様、富澤祥郎様（新潮社）、三浦雅士様、加藤弘一様、平野啓一郎様、巽孝之様、鳥羽耕史様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、コロンビア大学東アジア図書館、「何處にも無い図書館」

【もぐら通信の編集方針】

1. もぐら通信は、安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものです。

2. もぐら通信は、安部公房という人間とその思想及びその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものです。

3. もぐら通信は、安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものです。

4. 編集子自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うものです。

【もぐら通信第93号訂正箇所】

なし

